

岳 山

第 十 八 年
第 一 號

山 岳

第十八年第一號

大正十三年九月發行

目 次

冬から春への槍ヶ岳

霧 立 越

冬の靈仙山

球磨川より緑川へ

船 田 三 郎 一頁

吉 岡 八 二 郎 九

榎 谷 徹 藏 一六

竹 内 亮 三一

圖 版

○燕小屋附近より見たる槍ヶ岳

○春 の 槍 澤

對頁
八

二四

○春の槍ヶ岳	三二
○國見山頂より北東望	四〇
○縦木村	
○郡村誌の一部	六四

雜錄

○比留賀嶽(吉岡八二郎)○奈良井附近の山(高畑棟材)○山旅のノートから(竹内亮)○可惜郡村誌の燒失(木暮)○城ヶ尾行(松井幹雄)	
○澤と谷(山本徳三郎)	

雜報

○燒ヶ岳大爆發	
○羚羊の濫獲防止	
○秩父宮殿下立山御登山	
○京阪神在住日本山岳會員小集會	
○八高山岳部夏季計畫	
○一高旅行部	
山岳旅行日程	

會報

○第十七回大會記事	
○第二十四回小集會記事	
○交換及寄贈圖書目	
○本會規則拔萃	
○投稿規定	

附錄

山岳第十七年總目錄	
-----------	--

冬から春への槍ヶ岳

船 田 三 郎

一九二一年五月——一九二二年五月——一九二三年四月——一九二四年一月——一九二四年三月——冬より
春へ亘つての槍澤より槍ヶ岳へと登る。

日本在來の經驗深き登山者の有する基礎的知識とは、限られた時季の山岳のみに關するものを知れるものであつた。然し今、私達は冬から春への高連山脈の岩稜と峽谷を求めて、深く山を知らんと努め勵みつゝあるものである。高連山脈の夏から秋への山岳のみを知れる在來の多くの登山者にとつて、冬から春への積雪期に於ける山岳の知識と登山術を研究することによつて登山の限界の擴張であり、アルピニズムのよき成長である。

そして今や、積雪期に於ける山岳を知る爲め必要なるスキー術は、日本に於ても登山術中有力なる部門の一つとなつて來た。

英國スキー界に於て高名なるアーノルド、ラン氏著アルバイン、スキーイングの緒言中に『スキー家は又登山家なることを望む、それと同時にスキーを用ひずしてアルプスの冬を訪れることは價値なきものなるを登山家の一部の人々に説付けることをも亦、望むものである。』この言は日本の登山家によい教訓となるのである。極く少数の人々によつてなされる飛驒山脈の冬より春へかけての登山に、その登山者はスキーを穿ち、其の周圍にはスキーを穿たざる山人の職業的援助を求めて初めて登山を行ひ得ることである。總て登山は登山隊員の各人が離散せざるやう最も力劣れる者を標準として行動を採るべきものである以上、スキーを使用する者と使用せざる者と同時に共に登山をなす時は、その

最も協調の行爲を要するためにスキーを穿たざる者を標準として行動をなすを要しなければならぬ。スキーを穿たざる山人を変へてのスキー登山は、價值少き登山に終るのである。勿論日本に於ては登山小舎の設備悪しきこと、スキー登山者としての永き訓練なきこと等、原因は種々あるであらう。私も立山山脈のスキー登山に於て、スキー登山隊としての基礎的訓練少き爲めに、スキーを穿たざる荷擔者の援助による登山を行ふた一例がある。しかもその記憶は私にとつて實に不愉快なものとなつてゐる。今後山岳スキーのよき成長の爲めに登山小舎の發達を望むものである。飛驒山脈の夏季に於ける營利を目的とせる登山小舎が増加することよりも、眞に深く山岳を敬愛する人々の集りである『山岳會』の手によつて、山岳を潰さざる我々の爲めの登山小舎の設置を望むものである。その登山小舎は高連山脈の姿を最も廣く、最も深く知るために、孰れの時季に於ても自由に使用し得るものであり又進歩せる登山小舎の設備を有するものでなくてはならぬ。

我々が高きへ登らんとする努力は、高きへ登らんとするまでの中途に於て、背嚢に重く一抔に充たされた數日間の吹雪の爲めの準備に、所謂登山季節外れの登山として避く可らざる過重な荷物の爲めに大半は費されて了ふのである。かくして我々が知らんと憧れ又欲する冬の山谷の姿は、容易に登山小舎の設備不完全の爲め充たされないものである。雪と氷と岩の境地に、冬の山岳の懷に歸らんとする山人の熾烈な愛戀の情熱を、いつもほの白い冷たい現實に引き戻すものは、私には狭谷の雪崩でもない、雪稜の吹雪でもない、ただ冬の夜を明かす山小舎のなきことである。幸ひ冬より春への槍ヶ岳を訪れるには幾つかの山小舎をその麓に見出し、それに依つて可成り自由に槍澤と槍ヶ岳とを訪れることが出来る。スキーアルピニストとして此の方面の開拓者であつた故板倉勝宣氏の跡を蹤ふて、この地方のスキー登山案内記を認めることも敢て無爲でないことと思ふ。

槍澤

冬から春へかけての槍岳に數回の旅を試みた。そして槍の頂と谷とはいつも異つた姿態をして迎へて呉れた。

上高地から横尾までの梓川の河原は、一、二、三月はいつも雪と氷で鎖されてゐる。雪の廣い原が銀盤のやうに擴つて、スキーは最も展望のよい處を滑りゆく。稜高の氷圈に舞ひ昇る粉雪の煙、全く雪の塊りのやうな南岳の山稜、黝い屏風の岩壁、それ等が次から次へと倦まぬ景観を與へて呉れる。そして最も廣々とした風の強く當てる横尾の谷からの展望は、又優れて華麗なものである。其處を過ぎると梓川も迫り、溪間の姿を呈して山に入ると云ふ氣持を濃くする。徳本峠の下から二の俣までは五時間から六時間を見て置けばよい。川に沿ふて上高地へと下る時はこの時間より更に速い。スキーの路は全然夏のものを使へない、雪の積をただ一筋の最も近い距離を採つて、雪崩の虞れもなく、安逸な思ひのまゝに歩みを續けてゆく。四月から五月の梓川は、河原と山裾の残雪を踏んで溯るので時間は多少多く掛る、殊に河原には水嵩も増し、雪解けで川岸の崖などに崩れた箇處などのある時は、案外手間取つてしまふ、わざわざ澤の石小舎は雪が吹き込んでゐる時もあるので當には出来ない。然し此の石小舎は雪崩れの危険からは遠ざかつてゐる。

二の俣から上流は俄に積雪も増して雪崩の危険が伴つて来る。登路はほぼ夏季の路附近を通る方がよい。春の雪崩が出た後は、その雪塊で谷は堆高くなる。二の俣から祖母平の槍澤小舎までは案外時間を要するものと思つてゐなければならぬ。夏の地圖の上の考へが全く裏切られてしまふものである。少くとも二時間を登りには見て置かねばならぬ。下りには三、四十分程もあれば充分である。槍澤小舎までの槍澤の雪崩は多く赤澤山の方から押し出すものである。そうしてこの峽間を通過する前の數日間の天候と、また通り抜ける時刻とその時の雪質をよく研究して置くべきである。

祖母平の槍澤小舎はいつも雪崩から安全な位置に置かれてゐる。此の小舎のすぐ裏から續く岳樺と

唐槍の疎林がいつも薪として切り倒される。小舎は深い峡谷の底にある丈けに風當りが弱いのであらう、吹雪が餘り澤山は小屋の内へ吹き込まないうちに小舎全體が雪の深い褥の裡に降りこめられて了ふ。そして正月この小舎を訪れた時には漸やく軒端から内へともぐり込んだ。三月にはたゞ堆高い雪の塊りの裡から小舎の入口を堀り當てた。此のやうな時季には、この小舎を訪れるには小舎の位置と變化ある冬季の地形とをよく確かに記憶してゐる案内者がなくてはならぬ。然しそのやうな案内者は未だ少ないことであらう。

四月がこの峡谷の底に訪れる頃は吹雪の日も少くなり、積雪も締つて、容易に小舎の入口は雪から出て来る。小舎の中にはいつも四、五人には充分な程の寢具と炊事具一切が供へつけてある。吹雪に暮れる日などにこの小舎附近でも可成りの痛快なスキー滑走感が味はへる。

赤澤小舎から西岳の麓を通り抜けるまでの隘路は雪崩に捧げられた峡谷の底を辿るもので、晩春の Grindlavnen の出切つた後などは、太陽の輻射熱が雪面を劇しく融解して、縦横に挟まれた Chovass で實に不愉快な通路だ、それでも三月の末頃まではまだ一つの雪崩の跡もなく、平坦な雪の細長い原が続いてゐる、然しこの附近の通過は出来るだけ夜中か、黄昏前を選ぶべきである。

槍澤のスキー登高滑降の舞臺は、西岳の麓から初まる。海豹皮を附したスキーの登高の苦闘が続き、幾度かの方向變換の電光形登高の後、槍の頂がちらつと燐石の閃めきの如き鋭さを見せ、やがて岩壁が仰がれ出してから風も烈しくぶつけて來て、雪質が俄に變り出す。大槍小舎（坊主小舎）下の槍岳よりの河床と、大喰、中の岳よりの河床との間に挟まれた背狀地とその兩側の隘谷は、槍へのスキー登路中最も頭を悩まし、又それだけ興味深い部分である。去年の春はこの附近でもう少しのことでの岳の雪稜の崩壊で惹き起された Windlawne の危害に遇ふところであつた。今年の正月のある一日は濃密なる吹雪の帳りのために全くこの附近の地形を見失つて了つた。四月五月には中央の背

狀地の兩側に並行した小流には雪崩の *runns* で一杯である。三月の末の暖かいやうな日には、既に雪崩に對する深い注意を怠つてはならぬ。勿論スキーの通路は最も雪崩の危険の少ない中央の背狀地を取るべきではあるが。

槍澤より南岳へ登るには、この雪の背狀地を登り詰めてから、左への谷へと入るのである（陸地測量部燒岳地形圖幅五萬分一に示された中の岳より槍澤へ分派された尾根は大喰岳の頂より槍澤へ分派された尾根より寧ろ遙かに短きものではないかと思ふ。此處に説く南岳は同地形圖幅の北穂高岳を示すものである）。

大槍小舎の附近は正月から三月までは烈しい風が絶えず一定の方面から吹きつけて、雪面は硬い凍雪（*Skavla*）となつてスキーは一時脱がねばならぬ。然し四月から五月の眞晝には最早やそこには *Skavla* を見ることもなく、陽に培はれたスキー滑走に好適な *Frühjahrschnee* が擴つてゐる。

大槍小舎（二七〇〇m）は冬季風が強く吹きあてるので、小舎の裡は粉雪で一杯になつてゐた。それに雪崩の虞れもあるので雪の登山には不適當なものである。槍澤小舎より此處まではスキーにて登り二、三時間を要す。

大槍小舎より上は高く深い蒼穹の擠りと、輝やかしい雪は高く高く續き、黝い槍の岩壁がそばだつ。ただ單純な三つの色帶が專占するのみだ。冬のスキー登高に、大槍小舎を通り抜けると再び粉雪が續く。正月も三月もその粉雪と硬雪との分布狀態がほぼ同じものであつた。然し殺生小舎と大槍小舎との間は數日間の晴天と烈しい風によつて粉雪が吹き拂はれ、又は雪の一部が硬雪となつてスキーの使用が困難になることが或はあるかも知れない。四月から五月に亘つて谷の兩側に雪崩は一面に出るが、谷の中央までも押し出す程の大きなものは出ないやうである。それには谷幅も廣く、兩側の傾斜面の谷底よりの高距が餘り大きくないことにも依るものと思ふ。東鎌尾根よりの雪崩はいつも降雪後

早く出ることを知らねばならぬ。大槍から殺生との間の雪の積りは槍澤のスキ！滑降路中、最も爽快なものである。登高に四、五十分を要す。

殺生小舎附近は既に山稜に近く、冬ならば風の影響を強く受けて雪は硬く波立つた *Skavla* をなし、正月の如きは殺生小舎を囲む高き山稜と峰々は、絶て烈しい雪の三角波が脈打ち、風は高く唸りてその波頭に突き當り、粉雪の翱翔とその強き刺戟は、冬の山岳を動的な姿に換へる。殺生小舎は雪崩に襲はれる憂ひはない、然しこの附近には燃料を見出すことは出来ぬ、それに正月には漸やくその存在を認める丈で、小舎の殆んど全部が硬雪の下に埋もれて、掘り出すには一日も掛かりそうだ。三月には既に軒端の一端をそれでも硬雪の上に擡げて、三、四人で二時間程も雪を掘り下げれば小舎に入れることと思ふ。この雪に埋もれる状態は、歳々によつて違ひ、五月の初めに於てさへ漸やく雪面から軒下の空虚へとわずかに許りの穴が通ふてゐることもある。正月から三月にはスキ！は此の附近でシユタイク、アイゼンと穿き換へられ、そうしてスキ！は小舎の隅なり、岩角の陰に雪に深く挿し込まれて主の歸りを待つ。或る時は *Skavla* に立てられたスキ！に赤き旗が結ばれて *Skiddepot* の目標となる。四月から五月の眞晝にはスキ！のシユブールは尚ほ槍の肩までへも繼ぐ。

槍の肩への登路はなる丈に飛驒乗越の方を選ぶ方がよい。嚴冬の結氷した槍の岩壁からは堅氷の破片が飛來してそれで負傷する虞れがある。春になり槍の岩壁に滲み入つた氷の層が融けて膨張し、岩壁の破壊作用がそこに営まれ、岩角を離れた墜石は晴れた春の午前によく雪面に拋物線の軌跡を描いて奔下してゆく。新らしい降雪に陽の暖味が滲み込んで、雪に多少なりとも濕潤性が與へられた時には、殊に槍の穂の直下の急傾斜面から無數の *Schneemasse* が轉々として轉げ落ちて来る。而していづれの時季を通じて、高みが岩と氷と雪とのモザイクからなる險しき槍の穂は、その裾を巡る雪面へ何等かの影響と變化とを與へてゐる。殺生から槍の肩まではほぼ夏の登りと同じ程の時間を見て

おけばよい。三、四十分もあれば充分である。

槍の穂

槍の肩へは雪庇の憂ひもなく、それでも風に吹き固められた雪の上を踏んで辿りつくのである。槍の肩へと大きな期待をもつて登り來た者は、しばしば眼前の千丈澤より吹き上げ來る風に押し返へされて、身體を翻へすやうにして、いづれかの岩角の風淀みに潜まねばならぬことがある。然し槍の肩がかく風が猛く烈しいからとて槍の頂を断念するには及ばない。多くの場合、槍の頂は肩より風の當て方が弱いのである。

槍の登攀……それは矢張り嚴冬に於て最も困難なものであらう。槍の岩稜と岩壁の總てが凍雪と蒼氷と氷りついて、あだかも四十五度の氷壁を或は部分的には殆んど突き立つたやうな壁を攀ぎ登るのである。それにスキールピニストの考慮に更に加へらるべき一つの要素は、烈しき寒氣と闘はねばならぬことである。氷壁とは云へ、腕と脚とによつての登攀なる以上、手には厚き暖かき手袋を重ね置く譯にはゆかぬ。氷の附いた岩角を握つた指の先にも生命の一端は托されて指の屈折にさへ重大な意義が齎らされる。人の生命を托された綱は確實にビッケルなり岩角に巻きつけられて確保法が行はれ、蹴き來る者に又、蹴き行く者にザイルは絶えず緊張してゐなければならぬ。ビッケルは硬き氷を打ち碎いて足場が刻まれる。確保法は自分の爲め又他人の爲め安全に運ばれなければならぬ。かくして困難な時間と勞力を多く要する登攀法が寒風と氷粒の刺戟に惱まされ乍ら行はれるのである。

寒氣と闘ふ爲めに確實にして迅速に登山術を行はねばならない、寒氣に永く曝されることによつて吾々の元氣と精力を消耗して行く、かくして危地にさへ陥れる。そして冬の登攀に登山隊の人数に嚴重な制限が必要となつて來る。槍の登攀の如きは三人よりは好ましくない。

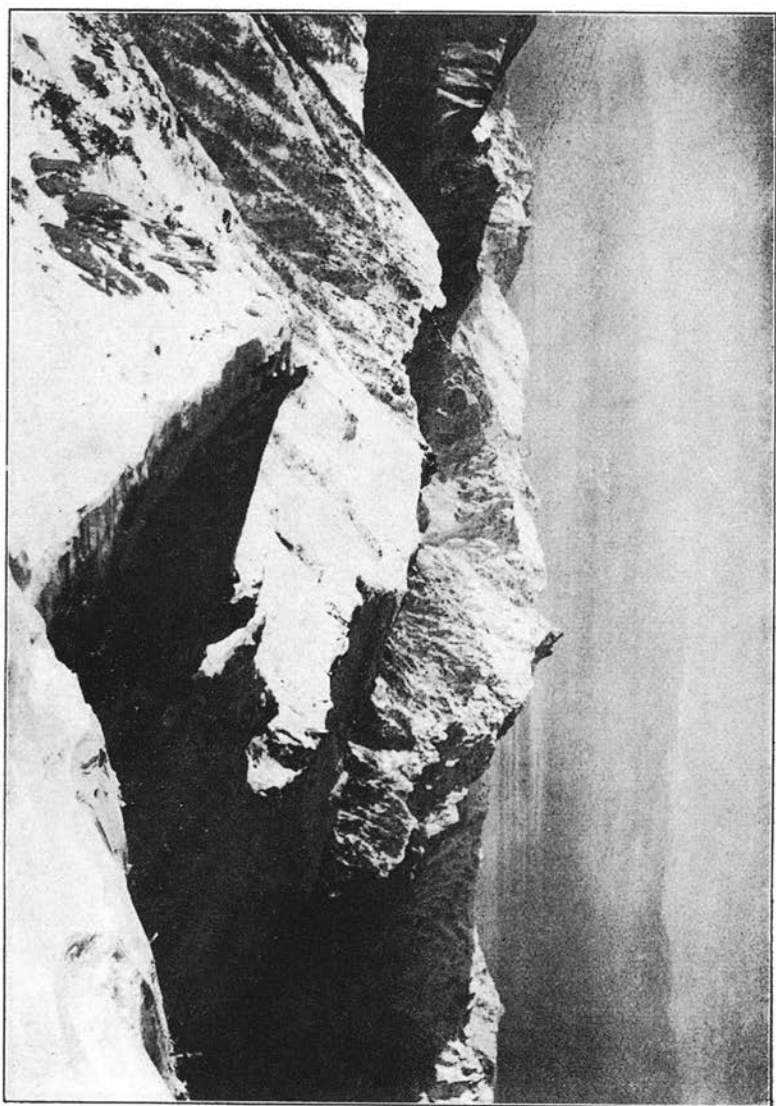
槍の肩から人々の胸にはザイルが結ばれる。そして槍澤に面した岩蔭に、そこは多くの場合風淀み

となつてゐる、荷物の一部を置くなり軽い食物を攝つて岩角の登攀に取りかゝる。

正月の槍の穂に於て、取り分け何處が困難であると云ふべき處はない、全體が同じやうに精神の緊張と肉體の虐使が要る。槍の肩より槍へとわずかの岩稜を傳ひ、小槍の前に見て千丈澤へと落ちゆく Coulair の頭を横切る附近では、岩壁から吹き拂はれて横なぐりに敲きつける氷粒と、形あるものの如く強く吹く寒風に身體は稍もすれば吹き飛ばされそうになつた。五月も此處で矢張り劇しい風と氷粒に苦しめられた。

岩稜の雪量は一月から五月頃へかけてはその季節を問はず大差がない。ただその數日間の天候によつて又降雪、それも靜かに降り積む雪、吹雪、その積雪の融解、雪質の輪廻、風の運搬それら種々な原因によつて、岩角に薄く又は厚く被ふ雪の量が絶えず山稜の姿態を變へる。五月末に槍の岩稜に最も饒多な積雪を見たこともあつた。今年の正月は三月の時より雪は多かつた。絶巔へまでの登攀時間はその岩と氷との状態によつて、勿論それは今迄日本在來のアルピニストが忘却して居た登山技術の熟練程度にもよるが、非常に異なる。概して新雪の無き限り四、五月の槍は夏季のものと大差がない。三十分もあれば充分である。正月の槍には絶えざる努力が五十分も要した。春の登攀に融けかかつた新雪と多人數の爲め、確保法に非常に手間取つて一時間半以上も掛つてしまつたこともある。槍の下りは普通登りと同じ位を要するものと思へば大差がない。

槍の頂。冬の槍は、その岩壁に風が高く唸り、黝い岩と蒼白い堅氷がそれを占居するときにも、その頂には風淀みとなつて深い柔かな粉雪の堆積することもある。五月の濃い蒼穹が數日間か續いて、槍の岩壁に一片の残雪も見當らなくなつた時にも、雪を踏んで頂上に立つたこともあつた。槍岳に於ては概して槍の肩よりはその頂の方が風が弱いものと思ふ。雪の深い時の頂は如何にも光りに包まれた鋭い尖りの一端に立つと云ふ感がする。



(影撮氏水懸田山)

岳ヶ嶺るた見りよ近附屋小燕

正月、三月、四月、五月の槍の岩壁とその峽谷を考ふるに、最も冷厳な姿をした山岳、そして最もスキー、アルピニストの心を充たして呉れる山岳は嚴冬のものである。三月の槍にはすでに春の陽が
 高き岩と雪との上に輝く。四月から五月へと春が暮れ、高き山稜の雪庇が次第次第に成長するに従ひ、それにより描かれる蒼穹の青みは黝いまでに深くなつて、雪の惱ましきまでに煌き燃え、春の惶
 しい轉瞬の悲哀は感ぜられないで、もはや初夏の輕やかな希望が山人の瞳を輝かして呉れる。
 雪の槍へは在來の多くの夏のみに登る人々の知ることの出来なかつた困難な登攀、山岳の危険、強
 き刺戟がある。然しその生命を賭して自身の存在を蒼空へと聳ゆる巨大な雪の峰々の圍繞する數多の
 アルプスの谷々の或る一つの高みの上に見出すことによつて、山に登る者の最も深き山の歡びを知る
 ことが出来るであらう。

霧 立 越

吉 岡 八 二 郎

阿蘇の南麓高森町から正南方に外輪山を踰えて五里餘り行くと、五ヶ瀬川の上流で日肥國境に近く
 馬見原と呼ぶ小さな町が山の中にかくれて居る。延岡から熊本に通ずる街道の中央部に在つて、西へも
 東へも海岸までは約十五里の谷間を這はねばならぬから、此邊の女小供の多くは恐らく海を見たこと
 はあるまい。汽車や電車が馳る土地とは世界がちがふのであるが、街道上の小驛であるから、小奇麗
 な宿屋の一軒位はある。西南は五家の莊、東南は椎葉の山村に續く山復た山で取り巻かれて居る。夫
 等の山の奥には四五軒宛の山家が谷の所々に散らばつて、靜かに春風秋雨を送り迎へて居る。材木商

などの外は訪ね来る旅人もない。九州の内でも最も交通不便な浮世離れのした地方であらう。馬見原では餘り海遠い山の奥とも感じないが、こゝから更に五ヶ瀬川の上流に沿ふて三里ばかり南すると、川は跳ね越へ得る程の細流となつて下流に見るやうな、水蝕の爲め截り立つた斷崖などは其俣もない、谷が漸々狭くなつて兩側の山が險くなる奥の詰りに波歸といふ部落がある。此處から美々津川の上流椎葉村に越える四里の山徑を霧立越と呼び、曾て文化風などの吹きつけたこともない處女林に掩はれた人氣の少い山道である。余は大正四年六月に通つたのであるが、十年の歲月もこの山道に格別の變化を與へては居まいと想ふ。

祖母山などを駆け廻つて後、三田井から馬見原に暗くなつて着いた時であつた。草鞋も脱がぬ先から、宿の主人に霧立越の様子を尋ねると、何の爲めに越すのか、止むを得ぬ要事があるなら是非もないが、物好きなら藝もないこと、路はありませうが年に何人しか通らぬ物凄しい山道で、殊に折々大蛇が出るといふので、惧れて仲々御供もありませまい、と話は半分仰山であつたが、それでも波歸の區長サン宛に手紙を書いて呉れたから波歸へ來て見ると、五ヶ瀬川の本流から右に岐れた小さい支谷を挟んで七八軒の荒家が高く低く、相隣り、斜面を拓いた木の葉大の山田が少しばかり段々に並んで居て、五六人の男女が大事さうに苗を植ゑつけて居た。勿論部落民が月餘を支へる程の收穫は覺えないが、山奥の谷間まで稻田の作れるのは九州だからである。どの家に行つて見ても戸は締めてはないが人影もない。家人が野良歸りを待つて小高といふ區長の家に泊めて貰つた。

暗くなつても洋燈などはない。明りとしては爐に燃える樺火の光りだけである。余の爲め殊更に米飯を炊いて呉れたが、主人を始め家族は麥と稗とを混ぜた飯や、小豆のカウセンを食つて居た。小豆餡は好物の余も砂糖の代りに鹽で味をつけたカウセンには少からず閉口した。食後暫く爐を圍んで家族と雑談して居たが、主人と息子との外は充分語が判らない。女房も娘達も亂れた儘の髪を無雜

作に束ねたのみで、膝頭までの短い汚れた袷に帯の代りに前掛け一條を締めたばかり、爐端に胡座をかいた異様の姿が、樺火の明滅するに伴れて、顔だけ赤く照らし出されたり、忽ち暗に消えたりする。『北越雪譜』に書かれて居る秋山郷の女達は吠の中に寝るといふが、二人の姉は色白くして玉を双べたる美人で愛形こぼるゝやうであつたといふから、鈴木牧之も大に恐悦したらうが、波歸の樵婦は安達原に近いものであつた。珍客があると聞いて二三人の男が遊びにやつて來た。碌々御辭儀もせず、お前どこから來たと喧嘩でも吹きかけさうな態度と物の言ひやうには、最初恐縮したが、霧立越を越して椎葉に行く旨を主人が説明すると、さうかく、何蛇などは昔のことさ。別に珍しい處もないよ、と昔は出たといふ狼の話などを聞かせたり、東京の町は四里四方といふが、真中に山はないか、と眞顔で聞かれて説明に困つた。飾り氣のない、そして見聞の狭い山民を低級といふなかれ。彼等は唯だ物質的智識に乏しいだけであつて、人間として都人士よりも遙に眞人間に近いのである。眞人間から幾分遠ざけられたやうな余等がかういふ山民と他合もない事を話し合つて居ると、平常自分が浸つて居る世智辛い油斷のならぬ浮世が、却つて遠い昔話にでも聞いたもののやうに想はれてくる。人煙を絶した高嶺の中を露營を重ねて道ふて居る時は、人の世を想ひ出してくる。余が山上山中を好む理由の内にはかういふ、言はば強ひて忘れて更に想ひ出す想ひ出の樂さが可なり有力なものである。やがて男共も歸つた後、家族一同頭を爐端に向けて放射狀に荒蕪の上に横になつた。六月ながらさすがに夜は薄ら寒さを感じる。一枚の薄布團を引被つて寝たが蚤の襲撃に夢は多角形となつた。

六月八日。長男の若者に少しばかりの荷物を負はせてこの部落を出發した。谷の北側に沿ひ小さな田の畔、畠の間を五六町も進むと、かなり下を流れて居た小流が上つて來て、夫に架した丸木橋を渡ると路は愈よ闊葉樹の中を分け登る阪となつて、二人は忽ち緑の中に没して仕終ひ、頭上も左右も朝露も乾かぬ青葉が朝日に透けて一面の青絹を張り廻して居る。雜草の亂れた間を割合に人通りの繁か

りさうな路が蜿つて居る。水音も響かず禽の聲も聞こへぬ森閑たる密林中を路は漸々急になつて久字を繰りかへし、登るにつれて立樹が喬くなり下草が疎に森の中が明るくなつて来る。樹種の智識に乏しい余は茲に委しい樹名を記すことを得ないが、一抱に餘るサルスベリ（觀賞用の百日紅とは別樹）や樺の大本も多かつたとおもふ。部落から一時間半程で一つの峠に登りつくが、前後とも見透しも利かぬ密林である。少し下り氣味に數町樹の間を通ると水の多い小さな澤を渡る。此處を空谷（カウケン）といふて五ヶ瀬川本流の眞の水源である。波歸の谷の南側に立ち塞がつて居る山の南麓を東に半周する深い谷を流れ下るのであるが、白岩山の頂上から覗き込むと唯だ緑の浪のゆらめく長い美しい谷である。空谷から更に二十分程方向も判らず曲り蜿つた細徑を頼りに登ると、美々津川流域との分水界に達する。少し坦らな處に喬木が疎になつて一二丈の嫩樹が茂つて居る。霧立越の本道は南に向つて尾根を傳ひ判然とついで居るが、微かな小徑が西側の谷に降つて行くのを少し追ふて見ると間もなく草の内に没して仕終う。然し國見越（クニミコエ）の山道に遙じて居るといふ。

此處から北方に七八町、小枝を掻き分けて向坂山の頂上まで登つて見たが、割合に廣い絶頂は一面の藪で眺望は元より三角點の所在も判らず、僅の戻り道を餘程迂廻して峠に歸着すると、焚火に羽虫を防ぎながら若者は心配さうな顔を仕て居た。

此峠から分水界上を南行すること二十分程で巨巖がある。此白い石灰岩が蓋し白岩山の山名の因つて出来た元であらうが、絶頂ともいふべき處は更に五分程を南した處に在つて、巖よりは五六十米突も高からう。丸味を帯びて可なり廣く三角點は標高一六四六米突、一面の雜樹に綴ちられて眺望もない。路はこの圓頭を避けて西側を迂廻して居るから頂上に氣づかず通り越して仕終う。此邊が霧立越の最高所であるが、分水界に達してからは殆ど昇降を感じずる程の急斜部はなく、尾根の背筋を傳ふ樂な歩みで、之から先は降る一方である。

白岩の巖上に登つて見ると南北二方は眼前を塞がれて居るが、西方の眺望は較や見榮がある。脚下の分水界は峠の北側向坂山から直角に西に折れて三方山（一五七八米）まで約一里十町を殆ど直線に走り、再び直角に南に折れて高嶽（一五六三米）、國見嶽（一七三八米、附近の最高點）から五勇山（一六四四米）鳥帽子嶽（一六九二米）に連り、東西一里三十町、南北二里の略ぼ長方形の溪谷を圍み、南側の一邊の中央部が缺けて峽谷狀をなし、其底から長方形内の溪水が耳川となつて流れ出して居る。一般に溪谷は細長なのが當然であるが、其成因が浸蝕でなければならぬものであつて、長方形の廣い溪谷は必ずしも珍しくないとはいへぬ。然し巨巖の上から眺めた處では勿論長方形には認められぬが、眼界は全く此長方形内に限られて居る。約一里半の空間を隔てた谷向ふに、西側の一邊が眼八分の高さに長堤を築いて居る中に、國見岳が扁平な頭を一際高く擡げて見える。分水界に並んで居る上記の諸峰は何れも秩父層（伊木理學士に従ふ）に削磨作用が圓熟した鈍圓形をして居るから空線の連續に無理な處がなく穩やかな觀を與へて居るのに、時は丁度夏樹の葉盛りで、漏斗に似た面積約四方里の谷は、其谷底から峰まで全く青葉に包まれて居る。殆ど針葉樹を交へず、禿げた素肌の露れた處もなく、岩壁などの屹つものもなく、渾べて軟かな丸味に富んだ枝尾根が中央に向つて求心的に重り合ふだけで、長方形内には鮮綠の大波が溢れさうに蓋れて居る。此の外には谷底の水も見えねば、長方形外に立つ遠山の影も見えず、煙一條見えねば況して人里も見えない。望洋といふやうな廣さはないが山頂に立つて居るから何となく廣豁な氣分はある。空の群靛色と谷の青綠とこゝから觀た世界は唯だ二色である。由來針葉樹林の少い（屋久島の杉森は別として）九州の森林といへば何れも闊葉樹林が主であるが、局部的の嫌いはあるが此處の青葉の眺めは特筆する價值があるとおもふ。

九州では本州中部に見るやうな針葉樹林の壯嚴は到底見ることも出來ず、況して南北アルプスに在るやうな御花畑の美觀は望むことも無理である代りに、雲仙岳（溫泉岳）や阿蘇の高嶽、霧島の韓國

嶽頂上のツ、ジの花盛り的一面の花毛氈を敷いた美しさを誇らねばなるまい。耶馬溪などは山陽の趣味眼には海内第一と映つたかも知れぬが、余等の凡眼には却つて海内到處に在るやうである。

白岩山から小隆起を右に避けたり左に廻つたり、樹立の中を一條の細徑が纔に繋つて居る。多くは左右を塞がれて居るが折々多少の見晴しの利く處もあるが、其他に何の珍奇もない。どの邊であつたか位置を確に記憶せぬが篠竹の茂つた中をぶざざと掻き分けた部分があつた。こゝで若者が用事あつて篠の中へ隠れて居た間を余も路上に腰を据へて煙草を吸うて居ると、行手から凄じ惡相の山男が酒の五升樽を擔げて突然現はれた。双方共に意外の人影に駭いたが余が顔を氣味惡く覗き込んだ後無言の儘復た篠の中に姿を消して仕舞つた。之が何者であつたか知らぬが稀には通るものもあると見える。

余等は長方形の東邊を全部傳はないで、一四四三米突の三角點の南方ヅウダノヨコヒ（憩）といふて、いかにも往來の人は一休みしさうな處から西方に尾前小原の山村に降つたが、谷陰の薄暗い曲折の多い上に足場の惡い阪路である。降るだけに約一時間十分を要した。霧立越の本道は憩場から猶ほも尾根傳ひに南して急阪を瀧に降るのである。

日向の西部、肥後と背中合せの美々津川上流の椎葉村一帯は初めにいふたやうに九州中での山奥であつて、耳川に沿ふた谷底に數軒宛塊つて一部落をして居るが、物賣る店などは極めて稀で、藤臺の危い垂橋が架けてある（此頃は多分銅線に變つたらうが）處もあつた。霧立越南端の尾前小原から桑弓野まで耳川の谷は山村殊に荒寥で谷底の路からは人家を見る處は殆どないが、桑弓野から小崎川に沿ふて球磨川流域に越える谷は兩者共に山村の様が餘程豊かに見える。平畑の峠で分水界を越えて球磨川上流の谷に出ると、北側の椎葉村とは峠一つを隔て、文化の程度が一世紀を隔つる感がある、

耳川と小崎川との落合に近い桑弓野は村役場と郵便局の所在地でもあり、橋本屋といふ一軒の旅店

もある。十數軒の山家が急な山腹に勝手な位置を占めて、隣まで近くも二三町の阪を上下せねばならぬ。田も畑も殆ど見掛けぬといふてよい程であるが、麥や稗を常食として碌々白砂糖さへ知らず茅屋に住んで居る人達でも、何れも十萬圓位の山を所有して居るが、如何せん立樹の評價は萬金を超えても、交通の便が極めて悪い爲め伐り出す段になると運搬費の爲めにともすると木代が消えて仕終うといふ、いはゞ寶の持ち腐れである。曾て樺の三尺角八間といふ巨材を出さうとして運搬費に當時で八千圓の巨費を以てして覺束ないといふために商談は破れ、仕合せなるかな神代からの靈樹は尊い餘命を安らかに、今も昔の儘に梢に霧を屯させて居るとか、宿の人の話であつた。

交通の不便は獨り樺を衛るばかりでなく、都會地から捲き起る輕薄の風さへ入るに難く、山民は千年を稗に暮し、歲月をば頓着なく耳川の急瀬に流し、軒端に山雨を眺め峰に懶雲を瞻る外、贅澤も知らねば從つて嘘偽の必要をも感ぜず、天真其儘の素朴を代讓りに仕て來て居たのが、近年に至り民情が俄に荒み、旅人に對しても往日のやうな穩和親切氣を缺くやうになつた。現に余等も細道を見誤つて一軒家の軒先を行き過ぎやうとして鋭く咎められ、暮焼酎の爲めもあらうが、譯を述べて詫ぶるのも聽かず振り上げて來た薪の下を危く逃げ延びたことがあつた。山村の人情美が幽境の自然美と相俟つて山地旅行者に與へる一種盡きない快感が、眞に人間と自然との合作に成る不思議な美術品が有する尊い價値であつて、自働車で都會を乗り廻しても發見することが出來ず、どうしても脚を勞して汗を惜まぬ人達でなければ味ひ難いものであると思ふが、此一大美術品が到る處で、日一日と汚損されてゆくのもまた止むを得ない變遷といふのであらう。曾ては實に浮世離れのした菩薩境であつた此地方の民情が俄に破壊されて、搗きたての餅が忽ちカキ餅のやうに成つた原因は、材木の好景氣につれて所謂山師といはれる材木商が入り込み、山民の無智素朴につけ込んで随分惡辣なことをして、欺き得るかぎり欺いた爲め、友人と信じて居たものが實は自分を狙ふ敵であつたのを知つた時のやうに、

彼等は驚いて、他所から來る人間は非道者はかりである、うか／＼して居ると臍までも抜かれて仕終
う、少しも油斷はならぬと思ひ込み、由來頭が單純なだけに思ひ込む處も亦た單純で、旅人と見れば
一概に村を荒しに來たものであると信ずるやうになつたことである。かういふ民情の急變は、ウエス
トン氏が嬉しがつて居た甲州の早川溪谷や、大井川溪谷などでも著しく感ぜられる。
然し椎葉の村でも宿屋などで村民と親しく話し込み、此方の氣持を充分了解すれば、彼等の髓の中
に残つて居る醇厚な部分があつたと露はれて來て、感化するやうな親切なことがある。桑弓野で宿に
着いた時、若者が先に入つて懇懇に腰を屈め、御宿といふはこちらで御座りますか、と挨拶したのを
聞いて余自身の態度を恥かしく思つた。

冬の靈仙山

榎谷 徹藏

「やあ、此間は靈仙からの通信を有がたう。……怎うだつた、あすこの雪は。」
「一寸面白かつた。兎に角『雪の山』といふ感じは充分に味へたよ。あすこは軽いテクニクも要
るし、それに何んとなくヴァージンライクといふやうな氣分があつて、それが嬉しいと思つた。」

「しかし、迂つかり雪の山岳なんて銘を打つと、何處からか叱られるぜ。」

「積雲、若しくは亂雲の底に達しないといふ理由でね。」

「ぢや、雪のシーズン丈け、少し標準を下げて貰ふことにするか。」

こんなことを山好きの親しい友と語り合つて、笑つたことがあつた。

攝政宮殿下御成婚祝賀式を八時半に終ると、直ぐ宅に歸つて、大急ぎで山装束に更へ、十一時四分大阪發東海道上りの間に合はした。氣儘な獨り旅である。醒ヶ井に着いたのは三時十五分前。朝から穏やかな日本晴れの空だつたのが、高槻あたりから、厭に重く曇り出して、やがてちらりちらりと雪片が疾走し出した。彦根近くでは、もう地上が眞白く染まり、米原から醒ヶ井、雪は次第に濃やかに、あたりは全く寂しく暗い降雪に沈んで、けさの晴れやかな心持とはすっかり違つたものとなつた。以前はよく重い携帶國やイーセルを擔いで、連年雪の寫生にやつて來て泊つた覺えのある多々美屋といふのに落ち付く。

けふのうちに樽ヶ畑迄登つて置けば、あすの行程なり、視察の狀況なりが、うまく行く筈だけれども、もう今からでは、この烈しい降雪を冒して行くことは覺束ないから、あすの朝立つことにして、ゆくりあたりの雪を撮つたり、この邊の山村情緒を味ふのも悪くはないと思つた。午後五時氣溫五度（C）。

こゝから頼んで貰つた山人夫、山本道藏といふのが宿へやつて來た。色々の打合はせをして、兎に角あすは天候が怎うであらうとも、樽ヶ畑迄登ることにして、それから先きは、向方へ行つてから決めるといふやうにした。宿の老主婦の話によると、この男は「山が上手」ださうで、荷物も中々重いものを平氣で擔ぐさうである。しかし雪の時に靈仙へ登つたことはないさうだけれども、他に誰れも雪の山には經驗がないのだから、矢つ張りこの男が一番しっかりしてゐるといふことになるのださうだ。夜が更けても雪は絶え間なく降り續いた。

一月二十七日午前六時、ポケットアラームに起こされて、窓外を見る。明け切らない嚴寒の空は不思議にも雪切れがして、氷結したやうな有明月の鋭い光が、亂雲の隙間から青凄く射しかゝつてゐ

た。寒さは随分酷しく、室内で丁度零度、縁側では零下五度に及んだ。七時出立の豫定が、寒い爲めに、ついごた／＼と遅れて、八時十五分前になつて了つた。道藏は早くからもうちゃんと結束して待つてゐた。

夜來の積雪は悉く凍結して、街道筋の往來の頻繁なところは、きのふ一旦溶けた雪が、厚氷になり切つて、堅牢な硝子板を敷き詰めたやうであつた。村外れの小高いところから振り返ると、思ひがけなくも、前方に蟠つた丘陵の上から、伊吹山の眞白な全容が、うら／＼とそ／＼立つた。曉のまだ青色の褪せない日光をその半面に浴びたので、あの山肌になうしてあんな硬い壁が浮び上がるのだらうと驚かれる程、際やかな強い明暗が匂ひ立つた。左右に連る低い雪の山脈にも、今は不思議な程尖鋭な褶皺が走つて、一齊に片光線の明快な調子を閃かした。餘り見事な眺めなので、松の並木の下にスタンドを組んで、一つ撮つて見た。

空は愈靜かに晴れ亘つて、一片の雲の影さへ見えなくなつた。丹生川筋の大きい窪谷が縦に展けるところへ出ると、南の空、その谷筋の奥に群がる山岳の上から、目指す靈仙山の上半身が、によ／＼りと天半を劃つて傲嘯した。満身に鎧つた雪が、名残なくアゲンストライトに蔭り盡くして、玲瓏としたブリュウヴァイオレットの透明色が、空の色よりもまだ深く、神秘的な冷やかな森嚴さを以て迫るのであつた。

みちは専ら丹生川の右岸について、次第にその上流へと溯つて行つた。朝日はや／＼と高い山の顚から離れて、その沓を切つた快い光線を斜めに送つて來た。雪晴れの朝の空氣には、纖塵一つ揚らず、瑩然として澄み返つてゐた。このあたりは、積雪僅かに五六寸に過ぎないけれども、寒氣が強いので中々容易には溶けさうも見えなかつた。下丹生から上丹生、一簇の山家が佗しく深い山隈に擁かれてゐた。二十年餘りも前に來たことのある養魚場へのみちを少し行くと、樽畑への岐れ路がある。もう

このあたりでは、溪流を挟んだ左右の山が著しく迫つて、暗鬱な杉木立が長く續くのであつた、雪の質も醒井あたりとはずつと違つて來て、下層の古い凍結した雪の上へ、昨夜の新しい乾雪が軽く蔽ひかゝつてゐて、餘り深くないのに、一步毎に後脚が妙に後ろへ撥ねるやうな滑り方をするので、中々手間が取れた。

分岐點を左に採つて、新道へかゝる。山袖と山袖とが限りなく複雑に組み合つてゐる間を、うねり／＼と縫ふやうにして、次第々々に爪先が登つて行つた。上丹生を離れてからは、先つき樽畑の方からやつて來た一人の若い男に遇つたきりで、新雪の上には、その男の足痕丈けしか残つてゐなかつた。みちは概して西方に面した山側を切つて拓いてあるので、絶えず日蔭ばかりを迫ることになつた。併し向方の峯、その谷間には、清淨な雪晴れの日光が爽やかに射しかゝつてゐて、鮮明な雪の明暗が、歩々に様々の變化を見せて、間斷なく眼を歡ばせてゐた。小さい切り開きや、片岨みちや、狭い雁木田や、すべて柔らかな新雪の粧ひと、清鮮な日影とで、極度の美觀を呈すのであつた。「山の上手」な道藏の足なみは、空身の私一杯の努力で、漸く蹠いて行ける程、元氣よく歩いた。

「あれなら、山に掛つても、ラッセルは大丈夫に違ひない。」と心強く思へた。

路上の積雪は次第にその量を増して、一尺餘りになつた。そして一步步大袈裟な高い底鳴りがして、全く鳴草入りの靴で歩いてゐるやうであつた。新道は手車が通れるやうに拓いたものだから、地盤全體の勾配が加はる程、極端に冗漫なデグザグを曳いて、つい鼻の先きに見えてゐる所へ登り着くのに、うるさく廻り／＼してからでなければ、そこ迄は出られなかつた。さういふところが次から次へと出て來て、私達は幾度ともなくもどかしがつた。

「ひどい千鳥に掛けとすで・・・。」

道さんは赤く火照つた顔をして、その千鳥に掛けた山みちを見上げた。

深い森林の中から、高燥な山の腹、溪沿ひみちから片岨みち、同じやうな雪の山路が、どこ迄も々々々續いた。やつと樺畑の人家を深い山峽に見出したのは十時二十分であつた。朗らかな碧空を劃つて、雪の山々の間から、靈仙の一峯が、他の山とはすつかり趣の違つた、どつしりと重みのある、力強い形相を表はして、高く々々挺聳した。日光の加減で、その坡陀狀にそゝた山の肩や胸に刻まれた壁の隆起線丈けが、悉く磨き上げたやうな不思議な光澤を發つた。それは全く雪の感でなく、白い玻璃で包まれた感じであつた。

「いよゝ、高いな。・・・それに、てら／＼光つてる。」

「經ヶ塚は丁度あれの奥です。」

私はこれからあの高い峯の頂よりも更に高い奥の頂きに登るのだなと思ふと、いつも山へ登る直前に感じる特殊な快感と共に、あの雪を掻き分けて、果して目的の地點に達し得られるであらうかといふ微かな不安の念を萌すのを覺えた。

村長の宅を訊くと、ずつとこの上の方だといふので、急斜面にぞた／＼と建てられた人家續きの間を縫つて、やつとそこへ着いた。圓花君彌といふ家だ。兎に角こゝで辨當を喰つて、色々山の容子を聞くことにした。都合によれば、ラッセル人夫を尙一人なり二人なり雇ひ入れても宜いと思つてゐたからだ。

初めてだのに、家人は快く待遇して呉れて、臺所の暖い爐邊で様々の話をして聞かせて呉れた。併し雪の靈仙の容子は全然不明で、確實には分らないけれども、今年は此邊でも珍しく雪が尠いから、雪踏みはさうたいしたこともあるまいといふのであつた。それに半腹以上の「やぶ」は、すつかり雪に隠されてゐる筈だから、却つて夏よりは登り易からうといふ。私はさういふ具合なら、天候も好いしひどく困難でもなさうだから、道さん一人で踏めないこともあるまいが、怎うだやつて呉れるかと云

つて談しかけて見たら、

「へえ／＼宜しうおすとも、一人で充分です。」といつて元氣よく引受けた。

圓花の家婦は、昨秋この村で、白い蝙蝠傘のやうなものを、宮さんの前へ立てたものがあつたと云つて、當時の有様を詳しく話した。

・村の者は誰れも、そんなものを見たことが無かつたので、頻りに不思議がつた。そして怖ろしがつた。夜になると、その中に火が點されて、絶えず人の話し聲が聞こえた。村の若い元氣な人達でも、遠くからそれを眺めてゐる丈で、近寄つて見届けて来る者もなかつた。兵隊に行つて来た男は、さういふものを見たことが有るとは云つたが、中に何者が居るか分らないので、矢つ張り近寄り得なかつた。

「今夜は寝られんぞ。」

恚ういつて觸れ廻る人々もあつた。こちらでは、村の代表をしてゐる責任上、どうしてもそれが何者であるかを突き止めて、相當の處置をするなり何んなりして、村の人々の不安と恐怖とを除かなければならぬのだが、さうかと云つて、矢張り氣味が悪いので、怎うすることも出来なかつた。到々「多勢して行かう。」といふことになつて、調べに行つた。

それは××の學生さん達で、「僕等は決して迂散な者でない。安心して呉れい。」といふことであつた。そんなら、むさくるしいけれども、こちらにお泊りになれば、風呂も沸かして上げるし、熱い御飯も炊いて上げるから、さうなさいと云つて薦めたけれども、「これが面白い。」といふので結局矢張り勝手に御飯を炊いたり寝たりした。

晝になると、皆して靈仙へ登つたらしいので、その留守に、子供達がそつと覗きに行つたりした。「學生さんなら、學生さんらしい風をして居やはつたら解つとすのに、それは／＼汚い風體で、めい

くどつさり荷物を背負ふて、その日の夕方前に、この下の方を通りはつたんで、みんな氣味悪がりましたとす。」……

文化の遅れた村人の當時の慌て方を想像して見ると、滑稽ではあるが、さうして私もこの話を聞いてゐる最中に、幾度となく大聲を揚げて笑つたりしたのではあるが、旅ゆく人々は、充分の注意を以つて、禮儀なり徳義なりに缺けるところのないやうにし度いものであるとつく／＼思つた。(登山に附随した道德といふことについて、いづれ誌上で、別に斷片を書いて見度いと考へてゐる。)

こゝを立つたのが十一時十五分。出来る丈け輕装にして、多くの防寒衣類や、器具類などは圓花方へ預けて置いた。

一度谷間へ下りて、人家の終るところ迄突き抜けると、一寸右へ曲つて、深林の中を登るやうになる。この邊では積雪一尺四五寸で、新雪にはまだ足跡が着いてゐなかつた。少し行くと、撞木なりに山途が左右に岐れた。左を採る。これから愈本ものゝ山へ掛るのであつた。すると雪が急に深くなつて、唯概形の上から、「成る程道だ。」といふことが分るだけで、幾日かの間、村人さへも通つたことがないと見えて、足痕などは更に無かつた。小兵にして精悍な道さんの本當の活動が、これから開始されるのだつた。

大きいデグザグザグを描いて、緩く登つて行くのではあるが、一步々々に脚を高く揚げて、又深く踏み込む道さんの努力は、中々容易でなかつた。先つき迄は、さしも一騎當千の勇姿を逞うしてゐた彼れすら、一時に衰れげなるものになつて了つたのであつた。

「こゝは深かうおつせ。」とか「登れますか?」とか云つて、又しても振り返つて私を勞はりながら歩々に途を拓いて行つた。

「あの男の後からは、到底蹤けまい。」と思つてゐた先つきからの豫想は、すっかり裏切られて、實際本もの、山に掛つてからの方が、却つて脚に餘裕が出来るやうになつた。

みらはいつの程にか、快い尾根筋にかゝつて、疎らな雑木の間を、緩漫に登り續けた。樽畑の白い村家の屋根が、段々下へ々々と遠ざかつて行つて、仕舞には近い山袖の爲に、すっかり見えなくなつた頃は、もう餘程高い所迄來てゐた。尾根筋から山腹へと、途はおのづからうねくつて行つた。右手には大きい眞白な窪谷が展けて、その谷の末は、幾重とも知れない雪の急峻な山袖の間へ深く々々隠れてゐた。と南方、聊東倚りに、鍋尻山の純白な髻頂が峭立した。頂の背後からは、大濤の打ち寄せるやうな勢を示して、白く濃やかな積雪が、暗い程深い碧色に澄んだ虚空を劃つて、おほらかに湧き立ちはじめた。仰ぐと當面、これから攀ぢようとする靈仙の前尾根とも見える崇高な峯頭の背後にも、慌しい積雪の動きが表はれ出した。

「あれへ掛るのどすえ。」道さんはその峯の中腹、高い々々ところに水平の一線を細く入れたやうなものを目指した。そのうち地盤は漸次高まつて來て、振り返ると、脚下に限りなく組み敷かれた複雑な雪の峯々を越えて、琵琶湖の静寂な藍靑が横はつた。つい此の間、雪の上ノ岳から俯瞰した日本海の静かな色合に能く似た色調ではあつたが、これは又、あれよりも一入寂しい感じをしてゐた。湖岸の西を繞る比良の長い山なみも、今は残るところなく展開して、雪の殊に多い打見から蓬萊へのあたり、面白く蹙んだ皺脈の明暗は、深い湖色と對比して、氣持の好い眺めであつた。脈中殊に目立つて挺んでた一峯は武奈岳である。半腹以上の急峻に秀拔したスカイラインが、一列の大尾根の上から、ぬつくと際立つてゐる形勢が既に非凡であるのに、分けてもそこばかりに、他とはかけ離れて厚く鎧つた雪と、硬く刻んだ巖とは、一入豪快の活趣に充ちてゐた。

長脈の南端、微弱な卵黄を含んだ空をバックにして、こゝからでは絶巔の細く尖つて見える比叡の

全容は、餘程の距離があるので、雪の色か、遠い山肌の色か、仄んのりと一樣にコバルトを刷いてゐた。しかし途中越の大鞍部あたりを境にして、北と南とでは雪の期間なり分量なりが著しく違つてゐるから、よし雪であつても、山體全部が蔽はれてゐるなどいふことは減多にあるまいと思はれる。奥島から多景島、竹生島、そのあたりに幾つも斗出する美はしい可愛い山嘴の一つ々々も、瞭らかに指願されるのであつた。

山逕が左へ、迂曲しながら登るあたりから右に切れて、眞直に谷間の杉林を突つ切つて行つた。勿論雪のない時には、通過殆ど不可能といつて宜いところではあるが、今はこれを行く方が、近くて安樂らしいからであつた。杉林の下は、一面の密聚した深い灌木らしく、雪の上から、疎らにその亂れた枝先や、鋭い刺トゲを持つた細い弓なりの幹の一部などが露出してゐる。雪の深さは概して四五尺位で、矢張り下層は凍雪、上層は新しい乾雪であつた。

道さんは成る丈け並木の隙間の廣さうなところを擇んで、うね／＼と縫ふやうに登つて行つたが、又してもずぼ／＼と深く踏み込んで足は踠いた。

一度踏み込むと、足が灌木の枝に引つ懸つて、中々容易に抜けなかつた。それに杉の幹を頼りにして登る時などは、雪が下枝の上からすつぽり掩ひ掛つてゐて、下の方に恐ろしい空洞を隠してゐるので、餘程注意しないと、その深い雪の空洞の中へ落ち込む虞れがあつた。

やがてその杉林を抜け切る頃になると、もうそれから上は、すべて丸坊主で、一本の喬木さへ無かつた。こゝは谷の行き詰りといふやうな地形であつて、前面に當つて非常に急峻な雪の大斜面がカールの正面で能く見るやうに、幾分かの曲面を立て、高く帽廂を壓して迫つて來た。その雪面は、高距約百米餘りといふもの、谷間から吹き上げる勁烈な風の爲めに、殆ど何んの凹凸もない程、綺麗に刷き撫でられてゐるので、四十度に餘るその大急斜面は、全然凡帳面に削り上げて磨きかけた板



(影撮氏水應田山)

澤 槍 の 脊

のやうであつた。さうして至つて疎らに、その雪の上から、灌木の頭がちよい／＼と覗いてゐる許りであつた。雪の上層は勿論乾雪ではあつたが、けふのやうな晴天の午後になると、氣温の上昇と、強い日射との爲めに、幾分緩みかゝつて、これが日没前にでもなれば、フィルムクルステを拵へるらしい容子に見えた。シュツツクのシュネーテルラーで掬つて、がた／＼と揺つて見ると、先づき迄は、直ぐばつと烟のやうに飛散したのが、その散り方が聊か重くなつてゐた。

この斜面の下地が、若しも「はみ」か又は「なめ」――表面の滑らかな巖壁。伊勢方面の山語――であつたり、雪層の硬度に著しい懸隔があつて、その異種の層の觸接面に何んの引つ懸りもなかつたりしたら、それこそ容易ならぬ危険の箇所で、逆も近寄ることは出来ないけれども、幸下の方で灌木が充分に喰ひ止めてゐる筈だから、私達は何んの不安も覺えることなく、眞幕にそれを攀ぢ初めたのであつた。

この斜面に掛つてからの「山の上手な」道さんは、實に慘めなものであつた。一步々々と踏み込む足の底は、下層の凍雪で、それが海綿狀多孔性凍結のやうな状態になつてゐて、彼れの脚は容易に安定せない。胸に突つかる雪へ獅噛み着くやうな姿勢をして、有らん限りの力で奮闘したけれども、中々埒が明かなかつた。幾ら元氣な彼れでも、さうして又、道すじや烟の雪には馴れてゐても、恚ういふ山の雪には経験がないので極めてデリケートな、言ふことの出来ない要領が、彼れには解らなかつた。

暫くの間、私は後から蹤いて行つたけれども、餘り氣の毒なので、

「少し僕が踏んで見ようか。……恚う幾分千鳥に掛けるやうにして。」

私は上ノ岳から歸つてから、又少し考案を加へて、紐を全部掛け更へた輪樑の踏み具合を、本當に試めして見度い氣もあつたので、先きに立つて行つた。ビッケルの頭は、まだ使ふ程のことはいや

うだから、サックを嵌めた儘にして、靜かに歩を運ばした。私のシュネーテルラーは、角度の自由が餘計利くやうに工夫して、特に鍛冶屋でその軸部を拵へさせたのだが、それが非常に有利に働いた。上層粉雪の深いところや、極めて浅いところや、又は殆ど上面近く迄、凍結層が露出しかゝつてゐるやうな部分などが、次々と不規則に出て來ても、それ／＼のコンディションに應じて、或時はテルラー自身身の働きを充分有効に、或時は石突の働きに支障を與へない爲め、自然と力が遊離して、その最大角度に退いた。輪樑の爪も、幾分前倚りに來るやうな工夫をして置いたので、一見バランスの鳥渡取り難いやうなのが、實際は却つて逆に、確實な踏ん張りを與へて、疲勞を軽減することが能く解つた。これは彈性に乏しいウキンドブレットを踏む時に、著しく効果があることを證據立てた。

私は極めて緩慢なデグザグを描きつゝ、その方向の轉換毎に、山脚側の手の方へ多く力を加へるやうにして、努めてシュトックを水平に近く突くことに注意しながら、出來るだけ正確を期しつゝ、徐々に攀登した。慙うして十數歩を運ばす毎に顧ると、どうしたことか、道さんの歩武は一向捗らない。折角私がラッセルをして、確實に足痕を残してあるのに、矢つ張り雪へ獅噛み着いたなりで、一方ならぬ苦闘を續けた。私は幾度ともなく立ち停り々々々々として、近寄つて來るのを待ち合はした。想つて見れば可憐さうに、幾ら強壯な彼れでも、荷が重く、裝具類が全然お話しにならぬ程度だから、私との體力の差より以上に、他の條件の差が甚しかつたのであつた。

斜面は次第々々に角度を増して來た。これは谷間から吹き上げる風の爲めに撫でられて、雪が絶えず上へ々と擦り上げられるからであらう。先つき高い峯の腹に一線を見上げて、あれへ掛るのだと云つたその地點が、いつか眼の高さになつて來た。それでも中々容易に登行は捗らなかつた。

やつとこのことで、左方から遠く迂廻して來た山逕に這ひ登つて、ほつとした。しかしこの途も、強い風で雪を撫で廻はされるので、地形の概觀からさうだと、熟知の人々にのみ分る位のもので、唯々

一面雪の大うねりが續くばかりであつた。併しあたりの地貌も、もう餘程變つて來て、氣溫も午後とは云ひながら、ずつと低下したことが感じられた。スキー帽の耳蔽を下ろしてあるのに、顎の下から凍り着くやうな冷氣が絶えず闖入した。それに朝からあの通り珍しい快晴であつたのに、前面に傲兀する北、中靈仙の双頭が、うす暗い吹雪雲を、慌しく吞吐し初めた。西方に展開する大湖の上空にも、鼠色の亂雲が狂ひ出して、比良の峯々はその半腹以上を、もう全く雪濁りした泥色の茫やけた中へ隠して了つた。するうち刃のやうな寒風が、駿躍として騒ぎ立つた。こゝそこの雪面からは、風に煽られて、烟の如うな雪が亂舞した。ある部分では、雪の龍卷になりかゝるやうな氣配を示した。

「うるさいことになつたなあ。」

「あれ、向方の頂上は、あんな恐ろしい吹雪どす。」

「併し、まあ兎に角登つて見よう。」

私は樽畑迄なら、どんなことがあつても下り得るといふ充分な自信があつたから、尙前進を續けた。と左手に聳へる北靈仙の大尾根續きに、東向きにはみ出した驚く可き大「あぶさ」の連續してゐるのが現はれた。これ位の山で、能くもあれ丈けに發達したものだと思はれた程、その「あぶさ」は見事なものであつた。數十尺に及ぶ物凄いその斷層面には、青味を含んだ縞や、鼠色の罅裂線が限りなく走つてゐた。

「雪でもひどいことになるもんだすなあ。」道さんは驚嘆の眼を瞠つた。

丁度その時、慌しい亂雲の隙間から、一棧の日光が漏れたので、大雪底は遂に目映く華やかな耀さを發つて活躍した。あぶさの斷層側とは反對の背から續いた雪の絶大なスロープが、四十六度に及ぶ斜線を、深く幾千尺の谷底へ、一氣に力強く薙ぎ落とした向方からは、暗澹と雲霧に蔭つた琵琶湖一帯の遠景が覗いた。コムボーズは申分なし、刹那の明暗の凄愴な調子は更に絶妙だつた。スタンドを組

む間は迎もないから、急いでコダツクを取り出して、いざり、ースといふ時、又もとの陰暗な雲翳に、一望のシーンはすっかり沈んで了つた。あまり呆氣ないので、せめてあの「あぶさ」の形だけでもと思つたが、折あしく狂ほしい風が股下から猛烈に吹き立つて、踏ん張る私の兩足をも奪ひさうな勢だ。残念ながら思ひ切つた。

北靈仙と最高點經ヶ塚との中間に蟠るなだらか尾根を少し登つて、右絡みに經ヶ塚の眞下へ出た。そこの凹窪地は雪が吹溜りになつてゐて、驚く可き深さに達してゐたがもとより何尺といつて測るわけにも行かなかつた。しかし地形が緩漫だから、少し注意して歩めば、先つきの急斜面のやうな困難はなかつた。それに轉んだところで、生命に關するやうな氣遣ひも更になかつた。此附近はすべてなだらかな大うねりが連續してゐるからスキーには甚だ面白いが、こゝ迄やつて來るのに大分骨が折れる。

經ヶ塚の北に向つた斜面は、雪が様々な状態になつてゐた。こゝも風の爲めに絶えず吹き撫でられるので、地盤の小さい凸凹は無論すつかり一様のなめらかな面になつてゐた。ある所では六七尺の深さがあると思へば、ある所では地肌の岩石がちら／＼と頭を出してゐたりした。しかも上層の粉雪がふつと吹けば直ぐ飛ぶやうに、極めて移動性に富んでゐるところもあれば、驚く可き風の威力と高寒とに薰陶されて、ウキンドプレートになつてゐるところもあり、將にシユカヅラを造らうとしてゐるやうなところもあつた。

風は愈々猛に、雲霧と雪との狂ふこと愈濃やかに、あたりは咫尺も辨ぜない程のうす闇の世界になつた。楽しんで來た頂上の展望も、勿論全然駄目であつた。下山の途に就いたのは二時二十分。氣温零下九度。大あぶさのところ迄下つた時、思ひがけなくも濃霧が幕を曳くやうにする／＼と聞いて、琵琶湖の全景が残るところなく見亘された。しかし湖面すれ／＼と思はれる位迄低く垂れ下つた濃密な

雪雲の大集團が、脚並揃へて此方へ々々と襲ひかゝるやうな形勢を見せてゐるし、湖北の一帯の地は、今降雪の眞最中と見えて、灰白けた朦朧とした色に混沌とぼかされてゐた。

先づきの急斜面にかゝる少し手前から、道だといふ水平線のところを辿つて見たが、そこも雪の一と續きの急斜面になつてゐて、横に絡むのが相當面倒だつた。怎ういふところになると、道さんは又閉口した。先きに立つて足跡を印して行く私は、幾度も立ち停つて待ち合はしたが、彼れが一步步確實な踏ん張りを作るのに、一方ならぬ苦心をしてゐるさまが、餘り氣の毒に思へたので、

「これを眞直に下りて見ようぢやないか。」

と左手の急斜面を指した。彼れには勿論異議がない。私は本當の一直線に、眞幕に下つて行つた。歩々に雪烟が立つて、徑一時足らずの小さい雪毯が、幾らでも／＼面白い程私の前へ轉がり出すのであつた。そしてそれ等の一つ／＼は、五六呎程も軽く飛ぶやうに轉がると、どれも直ぐ碎けて了つて、せめて庭球のボール位の大さにもなるものは一つもなかつた。何んしろ雪の狀態が非常に良かつた爲めに、全長一千二百呎の間を、僅かに十分そ／＼で下り切つたのは、餘りに呆氣なかつた。その間、シュトックの後ろ構へを、二三回右と左とに換へたが、雪は全身のバランスをして、絶えず餘裕のある快い安定を保つことを得させた。それに輪標をも極めて確實に落ち付かせて呉れたので、歩々に脚部へ感觸する雪の特殊な柔かい彈性に似た心持は、堪らなく嬉しいものであつた。他のいづれの器具を使用しても、これに劣らない、若しくはこれに近い快い感覺は決して得られないと思つた。

併し道さんは矢つ張り遅れた。登り遅にも、彼れは度々繰返して云つたことだ。

「なんで先生の後へ蹴けんのどつしやろ。……脚を怎うぞしてゐるのか知らん。」

しかしさうは云ふものゝ、若しも彼れと私との足拵へと、杖とを取り換へたら、私は到底途で堪へ切れずに、くたばつたに違ひなかつた。

樽畑の圓花氏へ歸つたのが三時二十分。意地悪く又雲切れがして、朗らかな日あしが暖く射しかつてゐた。風もない山村の晴れた午後は、よし積雪で眞白に埋められてゐても、宛然として小春日和の感じがした。室内四度。

今晚私達を泊めるつもりで、御飯の仕掛けも済まし、もう湯を沸かさうかと云つてゐるところだつた、家婦はにこ／＼として話した。しかしまだ時間も早いから、けふのうちに大阪へ歸つて、あすの勤務を出来ることなら缺かし度くない旨を告げて、ゆつくり休憩してからこゝを立つた。丁度四時二十五分。願ると山の隅隈から高聳する靈仙の一角は、いつの間にかすつかり雲霧を拂つて落日に近いうす薔薇色の光線をてか／＼と浴びてゐた。目醒めるばかりの雪の輝きは、飽く迄も高潔なアーベントロートのさほひ立ちであつた。

「意地の悪い。丁度上に居る時丈け暴れて……。」

「あの山は、いつもさうです。」

變な迷信めいたことを道さんは言つてゐた。下丹生の外れから日がどつぷり暮れて、醒井に着いたのは六時五分钟前。驛前などは、荷車の往來が頻繁な爲めに、雪解のぬかるみは、ことの外ひどかつた。

球磨川より緑川へ

竹 内 亮

は し が き

平原の姿はすでに老いた。しかし九州での高い山々は、つつじと石楠とで美しく飾られてゐるのだらうと思ふと、たまらなくなつて、旅ずきな私は又山へ行くことにした。

昨夜は人吉の林温泉のそれは静かな一室に球磨川の河鹿に聞き入りながら眠つて、今朝早く人吉から最近開通したばかりの湯前鐵道で、木の香も新しい幾つかの停車場をすぎ、終點の湯前驛に降り、球磨川から支流の市房川に入る三里の路を午後二時頃市房山麓の湯山村についた。

湯山村は市房山の西麓の緩斜地にある感じの明るい山村で、水車の多いのが眼に立つ。電燈もあり、一寸とした物資も調つて居り、客馬車も多良木との間に往復して居り、御客さへあれば自動車も來るといふ處だつた。

今度の山旅のプログラムの最初の市房山はここからでは、最早目と鼻の間である。

山麓に長く引かれた崖錐臺地、急峻な山體、どこか大きな感じのするピラミッド状の山頂、北に續く小さなギザギザ、山腹以下の水々しい新緑から高處の單調な褐色の樹林への移り替り、これがその日の市房山の見たまゝの姿だつた。

九州の地圖を開くとき熊本・宮崎兩縣界を劃する一三〇〇米乃至一七〇〇米内外の連峯を辿る、一條の路が記されてゐるのに注意出來ると思ふ。その路は宮崎縣の椎葉村から、熊本縣の緑川方面へ出るための駄馬路としてつくられたものだからである。

その邊の特殊な山岳地形——餘り甚しい高さの差のない連峯、急峻な山側の傾斜、深い谷、峯と谷とを埋むる大森林——は路を低い處につけることが困難であつたためであらうが、われわれ山を戀ふる者には、ホントウにお誂え向きな、眞の意味でのハイウェイである。

球磨の支流川邊川の上流にある、平家の武士の一團がつくつたといはれてゐる五家莊の山岳村では、いろいろな傳説を包んで、今なほ現代文化からはなれて人々が生きて居る。

市房山に登り、五家莊に入り、高い峯々を連ねた路を辿つて、緑川へ下りきうといふのが私の今度の旅のプログラムのすべてなのだ。

峯々の春の情緒、山村の傳説と山民の生活、私はいろいろな興味につきつきへと想像を浮べながら、旅の第二夜を湯前の小さな旅舎に眠つた。四月廿九日。

一 雨の市房山

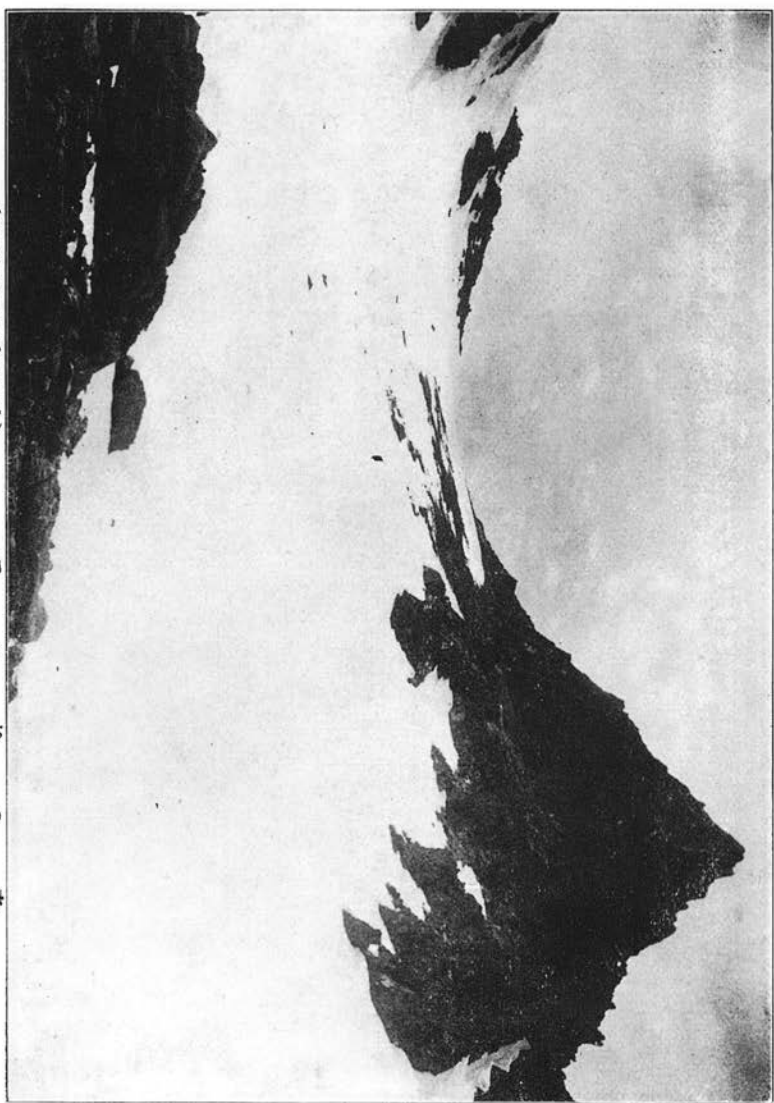
昨日の晴れ渡つた空に似もやらず、今朝は怪しい黒雲が風に追つたてられて、市房の峯頭をかすめて、次々へと足早に飛んで行く。雲の切れ間からは時々皮内に細い日ざしが投げ出されて居る。

「午後からはキツト雨になるだらう」との豫感があつたけれど、ママよといつた様な氣持で宿を出たのが朝の八時半頃だつた。

市房川を渡り、崖錐臺地の末端の斜面の凹路を登りつめると、草のやせた臺地面に出る。行手を大きく塞いで居る市房山は、次第に厚ぼつたい雲に被はれて行つて、臺地の半ば頃迄行つた頃には、中腹以上は全く雲に吸ひこまれてしまつて居た。

しかし山の下部の新緑の樹林の美しさは忘れ得ぬものの一つであつた。落葉闊葉樹と常緑闊葉樹との若芽のさまざまな明るい色彩とのモザイクは、スギやアスナロの暗色を交えて居りはしたけれど、全體の感じは、若い初々しさそのもので、秋の爛熟的色彩のイヤミがなかつた。かつて北海道に居つ

春の槍ヶ岳 (影撮氏水應田山)

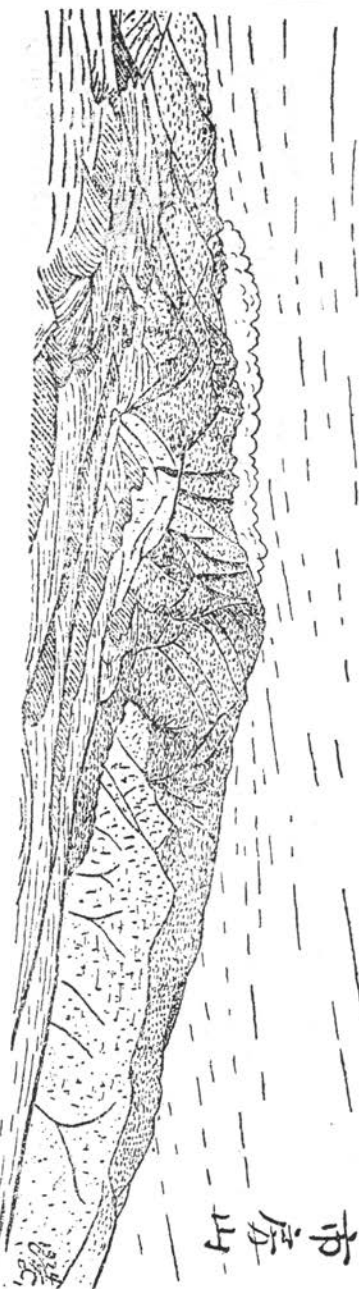


た時春の新緑の色彩がどんなに私をひきつけたかを想ひ、今眼のあたりこの森の色彩を見ては、私の心は遠い北の國にひきつけられずには居れなかつた。

何年かの歳月と多くの人の力とで、この山麓をはだかにした、官行斫伐事務所であつた建物の前から谷に下り、袖小屋の二三軒ある處を通り抜け、これはかかつた橋を渡ると、間もなく樹林に入る。市房神社へ導かれる山路はこの樹林を眞一文字に上へとつゞいて居る。

樹林の外部が新緑の明るさに照り輝いて居るのに、内部は唯陰暗そのものの氣分がつゞいて行く。スギとアスナロの巨大な幹が沈黙のまゝ、路の兩側を壓して續く。

舊曆三月十五日の市房の例祭には一種の迷信から、參拜者は必らず杉かアスナロの枝を路にさして行くのださうで、路の兩側はアスナロの芽生えと共に、雜草の様に埋められて居た。



途中小さな谷川を渡り、又ヒタ登りに登つて、市房の社殿に辿りついたのは午前十時すぎであつた、白い雲は最早一杯にたちこめて、社前の樹林の斷間からの眺望は全くかくされてしまつて居た。

この社殿は一段高い處の本殿と、その下の拜殿とから成り立つて居るが、拜殿が正面を横に向けてゐて、本殿を拜するのには内部で向きなほらねばならない様になつて居るのは、一寸他に類の少ない形式だと思つた。

市房山はこの邊では俗に「お嶽さん」といつて、舊曆三月十五日の祭禮には「お嶽さんまゐり」で湯山の村は大變な賑ひだといふことである。

拜殿の横に谷川が流れて居て、冷たいキレイな水がカケヒに導かれて居たのを、腹一杯つめこんで、さて愈々頂上へ向はふと思つたが、登路らしいものが何處にも見つからないのに一時はこまつたけれど、曾つてこの山に登つたことのある友人江氏の言を思ひ出して、本殿の横へ石段を上り、裏へ出て、漸くそれを見つけることが出来た。

細い路は暗い樹林の急斜面をヒタ登りに上へ續いて居た。間もなくハッキリした尾根になる。丈高いスズダケが兩側を埋めて居て、雨にぬれた笹の葉を分けるのは實に不愉快であつたけれど、處々に聳える岩壁の上に、今をさかりに咲いて居るアケボノツツジの淡い紅色は、私を引きつけずにはおかなかつた。

急な登りをモミ、ツガの多い喬木林からやがてブナの多い林に移つて、かれこれ一時間半も登ると、樹林は漸く幾分灌木性になり、岩塊の間に奇形を呈して蟠居してゐる。未だ冬枯れのさびしい樹林の間に、時々アセビの白い花叢も混つて居るのが一層さびしさを誘つた。マンサタの花も亦さびしいものの一つだつた。

雨、白い雲、冷たい風。山には輝きがなかつた。今度こそ頂上だらうと心あてに雲の中の一隅を登りつめると、又夢の様に樹林の斜面が雲の中へ吸ひ込まれてゐる。こんなことが二度三度と重なる内に私は根氣が盡きてしまつて、午後十二時半頃シットリとぬれた岩の蘚苔の上に腰を下ろして、グッ

シヨリぬれたリユックサックを開けて食事をとつた。ぬれた身體はジットしてゐる内に堪えきれない寒さに襲はれて、また上への歩みに追ひ立てられたが、今度はものの二十分も登つたと思ふ頃、嬉しい嬉しい頂の社が雨と雲と風との中に立つのを見た。

頂は周圍を灌木に圍れた小さな草原で、中央にさゝやかなしかし壯嚴な社殿があり、その後には一等三角點の石標が並んで居た。灌木の茂みの間には今登つた路の外に尾根を南に辿るらしいものと、北東にすぐ斜面を下るらしいものと、二條の小徑が見られた。

篠つく雨、怒號する風、亂舞する雲の間に一枚のスケッチをするなり、大急ぎに元來た路を下山の途についた。

雨にぬれた急斜面を下ることは、上り以上の苦痛であつたが、兎に角無難に下の社殿についたのは午後二時頃であつた。雨は益々ひどくなつて行く。社殿に休んでゐると、二人づれの林務官らしいのが登つて來られたが、お互に一寸あいさつした丈で深く話もしなかつた。それから間もなく私は一人で雨の不愉快な路を湯山の村へ急いで行つた。

二 石 南 越 (シャクナンゴシ)

湯山の村を包んだ朝霧がだんだんにはがれて行くと、市房山の上から村一杯にまばゆい光が照りはじめた。

湯山から五家莊へ入る順路としては、先づ球磨川谷の上流にある古屋敷へ出て、石楠越(一三九一米)或は水上越(ミツカミゴエ、一四五八米)のいづれかを踰える必要があつた。古屋敷へ出るにもここからでは二つあつて、一つは谷沿ひの往還を行くのと、一つは湯山のすぐ上の千米内外の高原狀の山地を越えるのであるが、私は山越えをすることにきめて十時頃宿を出た。

地名が示す様に湯山には温泉がある。私は温泉を見るためと、市房神社の社務所へ立ち寄りたかつ

たので、村のズット上の方へ寄り道して行つた。

社務所では大變忙がしさうであつたので、御札を一枚もらふなりすぐ辭去して、そのすぐ横にある温泉場へ行つた。

温泉といつても體溫より少し低い位の源泉が岩間から湧き出すのを、そのまゝ上屋をかけて入浴してゐる丈である。美しく澄んだ別に味も臭もなく、鹽類泉で、一軒の可成粗末な宿屋も附屬してゐた。人の話によると傷や腫物等には大變よく效くさうだが、あのつめたいまゝでは冬は可成な苦行だらうと思つた。

北目の部落から山路にかかつて行く。何度も何度も人に路を教はりながら、谷の畑地から樹林を抜けて十二時頃峠の草原に出た。

リュックを下つして汗を拭つてゐると、反對側から可成な年頃の男が一人上つて來た。しばらくとりとめない話をしたりした。こんな處では人と人とは御互になつかしいものだ。

峠から谷へは可成荒れた雜木林が続いた。谷からは右手に樹林に被はれた江代山(一六〇七米)の圓い平凡な山姿が間近かく望まれて、その中腹の樹林の間には朴ノ木原(ホウノキバール)の山村が辛うじて望まれた。

川を渡り谷の右側の細徑を傳ひ更に又左側に移つて行つた。路傍の斜面は大抵この邊でコバと稱する燐畑地で、こぼれ種子らしい大根と菜の花とが美しかつた。その斷間にはキケマンが畑一面に黄色な花を敷きつめてゐるし、ところどころにスミレの色々な種類のものが可憐にうなづいて居るし、森影にはヤマルリサウの淡い空色が美しくかざられて居た。

こんな路が一里許りもつゞくと、路は急に陰暗な杉の造林地に入り、間もなく急な下りになつて、路が右に折れると眼下には深い球磨川の谷が開けた。まるで梯子の様な急峻な路を下つて、球磨川沿

ひの往還に出て、川上へ三町行つた處に古屋敷の部落があつた。

ここは宮崎縣の椎葉村からの産物の集合地であり、球磨川上流の製板所や小部落への物資の中繼所であるといつた關係から、商店や宿屋等で一寸した市街をつくつて居た。

ここで見落すことの出来ないのは白水瀧である。江代山下の高原の水が球磨川へ落ちる時、吊りかけ谷の急斜を水は白いしぶきになつて何段かになつて落ちて行く。下から高くそれを望むと白絹をさらした様な優雅な美しさがある。

その日は古屋敷へ泊つたけれど、人の出入りのはげしい部落だけに宿屋が騒々しいのと、球磨川の流れの音とで静かな夢は結ばなかつた。

翌朝も日はうららかに谷を照らして居た。今日は石楠越を越えて五家莊へ入れるのだと思ふと何となく心が躍つた。しかしこの部落の人々に石楠越のことや五家莊の事情を聞いても、少しも要領を得ないのには可成前途の不安があつた。

まゝよと思つて辿つた路は宮崎縣へ通ずるものだつたりして、谷沿ひに、球磨川の奥へ通ずる一條の木馬路へ出る迄は可成まごつた。

この木馬道は球磨川の上流を川口の部落を経て、ズッと上流の製板所に通ずるもので、その先で右に分れば水上越に、左に入れば石楠越へ通ずるのであつた。古屋敷から五家莊へ入るのは、唯この木材運搬路の一條があるのみである。

狭い谷底を木馬道は右に左に棧道でからみながら、奥へ奥へと導かれて行つて、製板所へついたのは十二時過ぎであつた。途中の森林は全く荒らされて居て、到る處山骨はむき出されて居た。

製板所は可成り大規模なもので、高い槌からの水力で大量の製板をして居るらしかつた、生々しい木の香、骨を削る様な鋸の音、ゴチャゴチャと建てならべられた小屋、それ等は唯不愉快そのものの

現はれだつた。

ここから更に上の方へ木馬道が延びて居たので、そのまゝに行つた時、仕事をしてゐる人から注意されて、ズツと谷底に下り、又急な細徑を登り、又谷川沿ひに行く。途中小さな作小屋があつて、その先から又雑木林の斜面にかゝて行く。

荒された森林とスゞ竹の續く長い急な尾根の登りがその先にあつた。あきあきする平凡な登りを續けて、余程以前にコバ（焼畑）をしたことのあるらしい開けた斜面の上に出て、遠く市房と江代の山々を望んだ時はほんとに嬉しかつた。

又平凡な登りが一しきり續き、路は平な尾根に移る。ブナやミヅナラの大木が未だ冬枯れのまゝですくすく立ち並ぶ姿は、や々と私を深山路らしい氣分にもつて行つて呉れた。

平らな尾根路から谷頭の斜面を大きく廻つて、又尾根にかゝると、三叉路に出た。時計を見ると最早午後二時を過ぎてゐた。空にはいつのまにか黒い雲が低く垂れて、リュックを下ろして一休みして居る間にしめつぽい白いものが、梢をもつれはじめて居た。

こうなるとゆつくりもして居れないので、又重いリュックを肩にした。少し行くと又三叉路になつて私はその右をとつた。

石楠越といふのはこの邊を云ふのだとはすぐ氣づいたけれど、私の贅澤な想像——それは石楠が尾根一杯にあの深緑の葉をひろげて居て、ひよつとしたら花の盛りの目覺る程な美しさがあるだらうと云つた様な——はどこにも見つからなかつた。

未だ冬枯れのまゝのブナやミヅナラの密な梢は眺望を塞ぎ、樹下にはスゞ竹の密生がある丈であつたが、それでも路傍にこぼれた様に咲いて居たワチガヒサウの白い小さな花は、何となくなつかしい心持を誘ふものであつた。

尤とも五家莊での話では、峠から少し西の方へ林道を進めば、可成石楠が多いといふことであつたが、しかし平原で想像した様な美しい花の盛りには未だ間があつたのだ。

やがて遂に雨がやつて來た。近くの山々は全く白い霧の中に入つてしまつた。打ち開いた伐木跡地の斜面に出る迄の森林はほんとうに心持のいい處であつた。いやなス、竹の少ない樹下には落葉が重なつて、その間からは水々しい緑の葉をひろげた、シロバナエンレイサウやシユロサウが點々して、冷たい小さな流れはネコノメサウ属のいろいろの種類のものや、ユリフササヒ等の花で埋まつて居た。

森林から伐木跡地の急斜を下り、又森林の谷を大きく左から右へからんで下つて行つた。樹林の間からひよつこり大きな蘆ふき屋根が見えたと思ふと、十五六の男の子が一人、これまでもしぬけにやぶかげから飛び出して、双方で一寸びつくりしたが、こちらから軽く挨拶したら、向ふで心よく答えてくれた。

久連子(クレコ)への本村への路程等を教はりながら、雨の道を下る。

間もなく谷川を挟んで緩い斜面に立てられた久連子の本村に出た。途中でこの村の區長さんで泊めてくれると聞いたので、ずつと高みにあるその家迄辿りついたが、他に客があるといふので、その家の小さな男の子をつけて、又下の方の平盛氏へ案内してくれた。ここでも一人泊り客があつたけれど、心よく宿泊をさいてくれた時はほつとした。

三 五家莊の三日

翌五月三日も雨は晴れさうな氣配がなかつた。その日は一六四五米の上福根山の頂附近を越えて、五家莊の一部落樅木へ越す積りであつたけれど、こんな雨の日の山越えもつまらないので滞在ときめた。

五家莊といふのは樅木、久連子、葉木、椎原、古原の五箇村の總稱で、球磨川の支流川邊川の上流

一帯の山岳地で、平家の落武者の一團が占據して、其の子孫の續いて來た處と傳へられる處である。古來他と交通せず、今なほ可成古い文化形式を保存して居る處である。

村役場は柿迫外一ヶ村との連合役場として柿迫村にあるが、五家莊の各村々のことは區長が萬事取扱ひをして居て、旅人の世話から村人の死亡證明書迄も區長の仕事になつて居る。旅舎は一軒もなく、巡査も居らず、郵便局は古原に唯一つあるさき、道路は駄馬を通ずるのは上の部で、その他は辛うじて人が通行し得る程度の細徑を見るのみである。

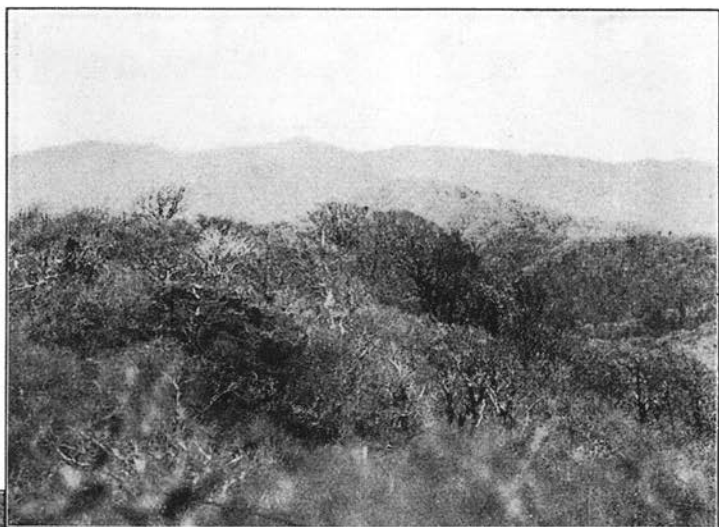
村人の仕事といふのはコバと稱する燒畑農業と、極わずかな水田を耕やすことが、春から夏への主なことで、冬は雪の少ない間は狩りにも出るが、雪路を歩く何等の方法も知らない村人は、雪が深くなれば狩にも出でずに居喰ひをする、閑が出来るからばくちも打つといつた生活をして居る。

民有地はコバのために全く荒れ果てて、木材の産出など思ひもよらず、炭焼でもやれば出来ないこともないけれど、運搬が駄目なので手がつかないといつた調子で、村人は唯一生きてさへ……」といつた態度で非文化的な生活をしてゐるらしい。

私の久連子の豫定外の一日の滞在は、宿のとつとときの白米に大變動を來たして、第二日の晝食からは稗飯になつた。副食物は鹽の汁の中にミツバをさざみ込んだ丈のものと、ワザビの葉の漬物丈で、動物性の香はどこにもして居なかつた。

村の人の常食といふのは大抵アワ、ヒエ、トウモロコシ、ソバモチ、サツマイモ等で、稀にこの邊でマダラといつてゐる岩魚を釣り上げてくる位が御馳走の關の山だ。

一つの村でランプをとす家は數へる程で、大抵は松の枝を焚いてゐる。ほんとうかどうか知らないけれど、或人の話では金銭は今でも壺の中に入れて床下にかくして置く處があるさうで、従つて紙幣は腐るといふので餘り喜ばないといふことであつた。



上 國見山頂より北東望

下 縦木村



(竹内亮氏撮影)

しかし現代らしい興味のあつた一つのエピソードは、この邊の人はどちらかと云へば、汽車とか電車とかいつたものは見た者が少ないのだが、唯一つ飛行機は大部分の人々が見たと云ふのであつた。久連子に残つて居る記録の内容だといつて、平盛家で話してくれた所によると、平家の一族が滅亡後、各地を漂泊した一團は豊後國に渡つて、その一有力者の保護の下にあつたが、やがてそこも立ち退かねばならなくなつた時、その首領は姓を緒方に改めて西の山地へと又漂泊の旅を續けて行つた。今の五家莊の近く迄やつて來た時、或一團の山賊と大衝突をして、一時は非常な苦戦に陥つたけれど、兎に角敵方の大將を生捕りして凱歌をあげることが出來た。しかし負けた山賊團の方では、大將を生捕られたのでは仕様がないので、いろいろ哀訴してその大將を返へしてもらふことが出來た。ところで山賊共はその禮心から、この落武者團の隠れ場所として、山賊團の巢窟である五家莊一帯を提供したのがこの五家莊のはじまりだといふのであつた。その緒方氏を名乗つた首領の家には三人の兄弟があつて、長子は久連子に次子は椎原に季子は葉木に居を定めて、今もその緒方三家は村人からお屋敷、殿様の尊稱を受けて居る。

この平盛家も元は緒方姓を名乗つたものださうで、首領の緒方家の重臣の家柄であつたといふ。今もこの家には槍や長刀や弓矢が保存されてある。

弓術は最近迄生活上の必要から男女共に一通りその技を練つたものださうで、今でも男子の間には競射の行事が残されてある。盃踊りには獨特な型が保存されてゐるさうで、踊り手の頭に雞の長い尾羽をかざつた帽子をつけるのが大變異様な姿だといふ。その必要から久連子では、雞は皆土佐の尾長鳥に似た長い尾羽をもつて居た。

それから久連子には正覺寺といふ古い眞宗の寺があつて、その裏に俗に平重盛の墓と云はれる古碑がある。高さ一尺五寸幅八寸許りの苔蒸したもので、その四邊はサツキの眞赤な花叢に包まれて居た。

碑面には中央に南無阿彌陀佛と記し、その下に蓮華と何か不明な二字があり、その左右に右から治承三年八月朔日と二行に書き分けて、左の隅に重盛と書き添えてあつた。村人の話では、京都の重盛の墓をもつて來たものだといつて居たが、内大臣山の小松神社と共にこの邊一帯が所謂平家の殘黨と深い關係のあることを示すものであらう。碑の傍のサツキは、折れば祟りがあるとか云つて、村人から恐れられてゐた。

無爲な一日の滞在も無駄になつて、五月四日も雨は晴れさうにもなかつたが、思ひ切つて樅木への山ごえをすることにきめて、十時すぎ久連子を出た。

石楠越から水上越への尾根の中頃から北に一枝が出て、久連子川と川邊川の本流とを分けて居る。その最高點が今日越えやうといふ上福根山で、その西に茶臼山（一四四六米）が連なつて居る。林道はこの峯々を縦横に通じて居るので、石楠越から福根山へ傳ふことも出来るし、福根山から茶臼山を経て権原へ下ることも出来る。

久連子から小さな橋を渡り、急な小徑を山腹の二軒家の處迄登り、こゝで路を教はつて又急な山路を登つた。その二軒家の附近のコバの跡には、茶の木が澤山生えて居たが、茶の木は球磨郡や八代郡の山地では、コバの跡には屹度自然に生えるもので、それが又こゝでは重要な物産の一つになつて居る。この邊の人々の信ずる處では、この邊は昔お釋迦さんがお通りになつたことがあつて、その巧徳から今でも茶の木が生えるのだといつて居る。例の甘茶の故事と結びつけられた傳説なのであらう。

途中の森林で二疋の牛を追ひながら下つて來る二人連れに會つた。この峻しい山路をよくやつて來たものと思つたが、後で樅木での話では、その二人連れは樅木を立つて行つたもので、しかもこの福根越に牛の足跡を印した最初であつたのださうだ。

十二時半頃茶臼山の西の鞍部の三叉路に出て、右の林道をとつて、石楠の多い北向きの斜面をから

んで、上福根山の殆んど頂上附近迄登り、急に下りになつて行つた。

ブナとミヅナラの木立の下では、處々に心地のいゝ緩斜な平地があつて、落葉の間からはシコクスミレの白い花が地に敷いた様に咲きつめて居た。

森林が終つて荒れたコバ跡の斜面に出ると、雲の斷間から谷の向側に樫木の人家が見え出した。

深い谷底へ下りて吊橋を渡り、又急斜面を一しきり登つて樫木の村へ入つた。

こゝでは三軒ばかり宿を斷はられて、一時途方にくれ、雨の中にたゞずんだが、最後に石本氏へ厄介になることが出来た時は、ほんとうに救はれた様な氣がした。この家ではこゝの官林の保護區に居られる泊氏を紹介されて、雨の翌日の樫木の滞在もさふ手持無沙汰なしにすんだ。

樫木附近の地形は二段に形成された峡谷で、上段は一二〇〇米内外の高さから八〇〇米許りの高度迄で、その部分から更に約二〇〇米許り深く谷が刻み込まれて居る。これ等の地形は最早可成解析されては居るけれど、それでも處々に段丘面が残つて居て、樫木の村もその一つの面上にあり、その下部には小面積ながらも水田が見られた。

久連子の村がどこか暗い氣持のするのに引かえて、樫木はその周囲の規模が雄大な丈にどこか明るい氣持のする處であつた、人々の氣風も久連子に比してはズツと進歩的らしい處があつて、雜貨店も二・三軒あるし、學校の建物等は可成立派なものであつた。勿論村の大きさから云つても、久連子は三十戸内外なのに、ここでは七十戸内外あるといふし、地形の關係上緑川の谷へ下るのは比較的困難が少なく、その方面との交通がたえずあることなどは、この村の氣分に幾分の異彩を與へる原因であるらしい。

四 國 見 越 え

樫木へ來た時の考へでは、ここから峠を越えて宮崎縣の椎葉村に出て、そこから國見岳へ登る豫定

であつたが、石本氏から、樺本より林道を國見岳へ登り、内大臣山へ行くことも出来るし、又直接に内大臣山へも行くことが出来て、其の後者の路程は僅かに四里餘にすぎないことを聞いたので、ここから國見岳を経て内大臣山へ出るとにきめて、國見の頂上迄の案内者も石本氏が心配してくれた。

五月七日。心配でならなかつた空は晴れ渡つて居た。八時甲斐米次郎といふ六十格好の老人を案内にして樺木を立つた。重いリュックは案内に背負つてもらつたので今朝は身が軽い。村のはづれで銃を肩にした元氣な若者と一緒になつた。

細徑は深い谷を右下に見て、急斜面を横過して行く。峯谷を埋むる鬱蒼たる針闊混淆林を一眸に收めつゝ、歩みは軽くはこばれた。

八時二十分頃開持(カイモチ)の小部落を過ぎ、九時十分ヨゴタの一軒家に小休して、更に谷の森林を約三十分許り歩いて五勇の一軒家についた。啞の子が一人淋びしく留守居して居て思ひもかけぬ通行者をそれでもなつかしさうに見送つて居た。

執念深い人の営みもこゝが止まりで、これから奥は、原始的な森林と、奔放な溪流との世界であつた。

溪流を渡つて愈々坂路にかゝる。サルメンエビネの花が美しく咲いて居た。

木の枝で段をつくつた坂路は、眞一文字に密林の上の方へ吸ひ込まれて行く。モミ、ツガ、ブナ、ミヅナ等の大木がすくすく生ひ茂つて枝を交えて居る様は何とも云へず心地がよい。石楠の花もこの邊の高さでは眞盛りであつたが、木が高いので下から見上げる許りで一向見榮へがしなかつた。

急な登りは約一時間半許りつゞいて、やつと高い平な尾根に出た。この邊では最早針葉村が少なくなつて、ブナとミヅナラの密林が続く。處々に石楠の美事な群落があるが蕾は未だ固かつた。樹下にはいろいろな草本が萌え初めて居て、若々しい緑が落葉の堆い緩斜面を彩つて居た。

心地のいゝこの平な尾根道は三十分許り續いて、國見岳頂上への岐路の處迄來た。國見岳への路は樹木が可成丈低くなつて、草の緑も未だ充分には萌えて居なかつた。ゆるやかな登りを二十分許り登つて、石櫛の數から低い岩を登ると、そこには國見の頂上の岩があつた。少し低い處に一等三角點の石標がある。

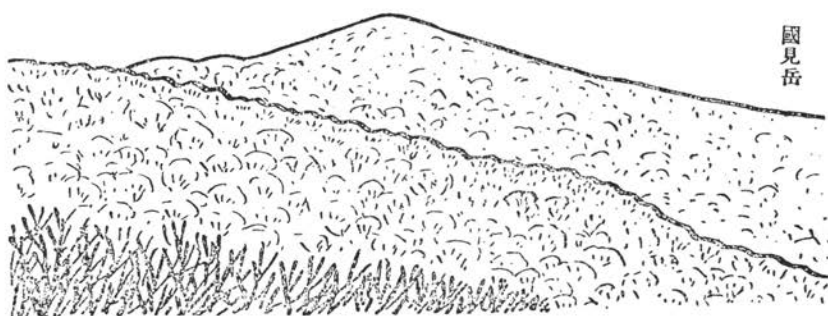
案内者や同行の若者の話では、ここは六月になるとツ、ジが満開で美しいさうだし、それよりも秋の紅葉の美觀は素派らしいものださうである。

朝の澄み渡つた空は、いつの間にか曇つて來て、この頂に立つた時には遠い景色は、全くうすれてしまつて居た。南は市房山や江代山が頂を雲に包まれて鼠色にくすんで見えるのを限界にして、それより遠くはだめだつた。北は白い雲が亂れて居て、大阿蘇の規模は盡くすことが出来なかつた。東には千五百米内外の連嶺が近く續いては居たけれど、古生層地の山岳の常型として、殆んど何等の奇狀がなく、唯森林の尾根續きが平凡に望まれる丈であつた。しかし國見岳は一七三九米といふ、この附近では殆んど比肩するものゝない高さをもつた大ピラミッドである丈に、頂上の眺望は三六〇度を完全に廻はることが出来るので、もし天氣がよかつたら九州の中部以南の全山岳を望み得るだらうと思つた。

國見岳は字の通りクニミ岳でも、通ずるけれど、五家莊の人はクルミ岳又はオホクルミと云つて居る。

頂上で二十分許り費やして後、元來た路を少し下つて、左に折れて森林の斜面をからんで下の大きな駄馬路に出た。そこには一軒の萱小屋があつたのは一寸意外だつたが、案内者の話によると、秋の茸取りの小屋だといふことであつた。この邊の地形から、又話によつて想像出来る豊富な雪量から、冬はこの小屋は理想的なスキーヒュッテにならないだらうかなんと考へて見たりした。

國見岳



○球磨川より緑川へ 竹内

五二

路々冷たい水が到る處に湧き出して居るのは、心地のいゝものであつた。

午後二時内大臣山への別れ路へ來た。こゝで右の路をとつても左の路をとつても内大臣山の官行斫伐事務所へ行けるのだが、右の路の方が分り易いだらうといふことゝ、同行した若者もこの先少しの間は同行出来るといふので、右の路をとることにきめて、案内者を返へした。

路はブナの森林を縫つて續いた。尾根の處々に濕地があつてハルトラノオなどが花穂を伸ばして居たが、大部分はス、竹に占領されてゐた。

一時間許りして若者は右の小徑へ別れて、愈々自分獨りになつた。山路は一人に限るといふ様な考へをいつももつては居ながら、やはり人と

の別れはなんとなく心さびしいものであつた。
別れる時に細々と若者から教へられた路を又三十分許りも行つて、高岳（一五六三米）の南肩にある日肥林業株式會社の木材運搬の索道線へ出ることが出来た。最早こゝ迄來てこの線の下を傳つて行けば、内大臣の谷へ下れるのだと思ふと何となく力強い心持ちになつた。

今迄は森林續きなので、殆んど望み得なかつた國見岳は、ここからでは大きな山姿でゆつたりと前面をふさいで居た。しかしその姿はどことつかみどころのない大きさである。唯それ丈が印象の全體であつた。

索道の下を峯から谷、谷から峯と正直に上り下りするのは新しい苦痛であつたが、中繼場の建物へ迫りついて、はるか下の谷にあるいくつ

の建物を見た時はホツとした。

先程國見の頂邊から下に垂れ初めて居た雨雲は、最早この邊へ追つて來て、時々雨足が通つた。谷に下りて、トロ軌道傳ひに約小一里下つて、漸く官行斫伐事務所へ迫りつくことが出來た。

この官行斫伐事務所といふのは、濱町小林區署の管轄で、内大臣山の伐木事業を行つて居る處である。ここから緑川の下流甲佐迄はトロ軌道がしかれて居て、木材の運搬をして居る。

すでに最早十年近くこの谷の伐木を續けて居るので、今では原始的な林相を保有して居るのは、奥の方の廣河原谷と西内谷丈で、その他の地域は皆杉其の他の造林地にかはつてしまつて居る。やがて再びそこに森林は回復されるだらうけれど、その森林にはかつて見られた多様性は失はれて、たゞ切れない單調が現出するのだと思ふと、人の仕事は私には呪ひの魔の手を伸ばす様にも見える。

この事務所のすぐ下は大峽谷をなして居て、十町許りも續いて居るが、そこは俗に魔の瀬とも云はれてゐる。酒に氣の狂つた山の人が、どうかするとよくこの瀬へ吸ひ込まれる様に身を躍らすことがあるとかで、こんな名がついたのだといふが、これは自然を呪ふ人への、自然からの呪ひではなからうか。

この夜は事務所の厄介になつて、明日は舊曆の四月四日で、この山の小松神社といふ重盛の神社の例祭にあたるのだとかで、夕食にはおすしの御馳走になつたりした。

翌朝は早くから若い事務員の案内で、小松神社へ眞先に參詣して、更に北内谷の伐木作業地を見學し、事務所へ歸つたのが十二時頃だつた。山は御祭りで杣夫も仕事を休み、小ざつぱりしたなりをして居たし、里からの參詣人も山の路に滿ちて居た。

午後からは又雨になつた。雨にぬれ乍らトロ軌道を一人の事務所員と、甲佐から來たといふ若い婦人と三人づれで約二里を歩いて、そこから一臺のトロに十人許り重なり合つて、緑川の谷を下つた。

途中で外の人はず下りたが、残された私共三人は二里許りを二人で交る交るトロを押さねばならなかつた。

老成した緑川の峡谷の景色は、眞に人々を引きつけずにはおかないものであつた。すべては美しい調和の中にとけ込んで居る。淡い緑の春の緑川、それもいゝ、しかし私は秋の緑川の美をもつと大きな期待をして心に盡いて見た。

軌道の終點に着いたのは日もとつぷり暮れてからだつた。そこから更に雨の降りしきる夜道を甘町ばかり、甲佐の停車場へ急がねばならなかつた。熊本行の終列車にやつと間に合つて、車室に腰を下ろした時は、一時に氣のゆるみがきて、幾つかの驛を夢の中に後にして居た。(終り)

— (一九二四・五・下旬稿) —

雜 錄

○比留賀嶽

夏から秋にかけて鹽原に遊ぶ人は少し懸値を見て十萬といふ。其内最奥の新湯元湯までくる人は一分に足らず、谷詰りの比留賀嶽などに登る物好きは滅多にあるまい。山に對して惻隱の情を起したといふ譯でもないが、越人が吳客を見るよりは幾分の同情を催しても惡くもなからうか。

奥鹽原新湯の下藤屋したふぢやにしぐれがちの數日を眺め暮らした時のことである。秋はもはや上鹽原を野分に譲つて下鹽原に移り、鹽湯や福渡あたりどの旅館にも空室一つない繁昌にひきかへ、一里餘の阪路を登る新湯などは、三階建の伽藍に客の影も消えて、朝晩の寒さに宿の人達は襟かき合せ、爐端に今年の終りを惜む頃である。外に客もなく無論自分一人であつた。階上奥詰りの室に話相手

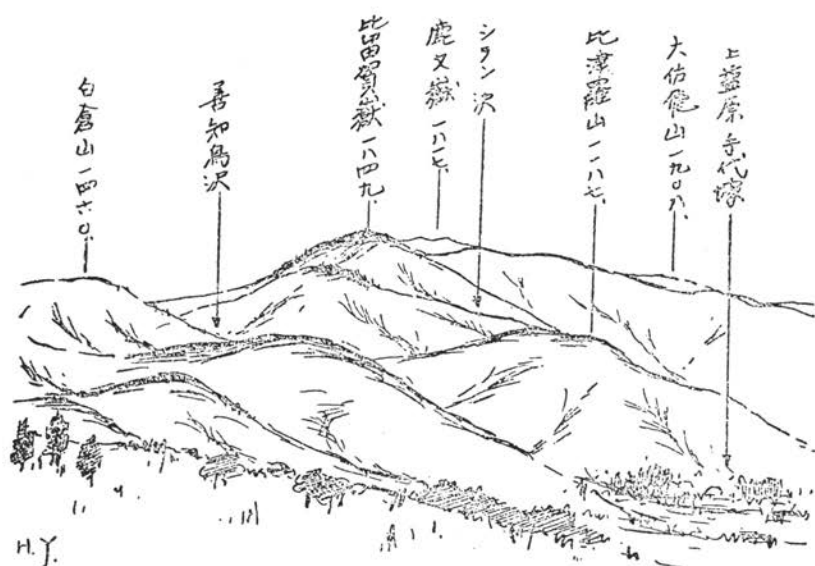
もなく、大火鉢の炭火を組んだり崩したりして見たはてに、前の障子を開くと緋の梢が冷たい風に燦られて、美しい落葉が未練氣もなくひら／＼谷底に散つてゆく。この附近は下鹽原邊に見るやうな繪看板に似た派手な溪山の曲折がない代りに、時雨の渡る林の落葉に秋の静けさを侘びることが出来る。無風流な人間でも時に十六文字位並べて見たくなる。殊に飽かぬのは、鹽原全溪に騒ぎ廻る漂游の群を悠然と瞰下して居る比留賀嶽の牙へた姿である。

比留賀嶽は時に蛭ヶ嶽とも書いたのを見るが、山名沿革の考證は篤志家に御願ひして置く。標高一八四九米突、高原火山の最高峰釋迦嶽の一七九五米突に比べると、高さに一日の長ありといふ格であるが、路次の奥に引込んで居て、近く尋ね寄つて見ても近所隣を壓する程の勢もないから、餘り人の注意を惹かぬ。併し自分は朝晩數日に互り、丁度我室の置物にしたやうに、透き徹る琉璃空に或は千切れ雲の飛ぶ間から見えつかくれつするのを、傍目もふらず睥入つたり、また新湯から元湯

に通ずる野道の枯芝の上に寝轉んで、暖い小春日の日光浴をやりながら睥睨して居ると、秋と冬の送迎に疲れたやうな野山が、色といふ色を無差別に塗りつけた上に、比津羅山と白倉山とを兩腋に抱へて延び上がり、頂上を染めた笹の遠色と麓の霜枯色との映りも佳く、絶頂から西に曳いた尾根にかけて一叢の針葉樹の色が一際澄んで居る。右寄りに鹿又嶽が一寸と額際を見せ、其右にやゝ低く大佐飛山が覗きかけて居る。此方面から望むと比留賀嶽もかなり尖つて見えるから、心がまづ山頂に馳せて次には肉體まで運んで見度くなる。

十月二十七日早朝一人の青年に辨當や果物などを持たせて登りに出掛けた。夏だと時間に不足もなからうが、釣瓶落しに暮れやすい秋の末では、新潟から山麓の手代塚までの往復に無駄な時間を費し不便である。上鹽原で赤川を越すと、すぐと再び箒川に架けた假橋を渡り、美しい成層面を見せた凝灰岩の小峠を上ると白戸の廣々した畑に出る。青年も初登山だから案内の役には立たぬ。手代塚で畑に居た男に道を尋ねて見ると、向うの家

が法印だから聞いて見よといはれたが、其家は家族總出の野良仕事に戸が締めてある。偶然林の中を分け登る道を見出してかまはず登つてゆくと、程なく右手にシラン澤を見下すやうになつて、地圖にある比津羅山を搦む道であることが判つた。思ひの外に手入れの届いた廣い道であるのを怪む間もなく、地圖上で比津羅の羅字の邊から急に一二尺の野道となり、比字の邊をすぎて比留賀嶽の胴體に連る鞍部にくると、二尺程の笹の中に消えて仕まう。鞍部の西側は已に伐り盡されて居るが、東側は二抱位の檜や其他の闊葉樹が長い枝を組み合せた間に、折々楓の紅い柯も見える。根元を綴ぢた笹を踏み分けて尾根の背筋に這ひ上つて見ると、足先に絡む程の灌木の中に微かな路跡が残つて居る。こゝを少し登ると再び篠竹が六七尺に伸びて、その底に隠れた倒木が、不用意に踏み込む脚を攔んで呀といふ間に笹の中に引き倒す。倒木の様子から見ると樹林が篠竹に征服されたものらしい。一五二米突の隆起點へ來ると榊や黒檜が立つて下生への笹も荊も消えて路が判然と残つ



て居る。頂上に在つた小祠が數年前の雷火で焼けて以來登拜するものも絶え法印の收入も斷えたといふが、其以前はかなり人が登つたものらしい。この邊から熊の足跡や生新しい糞の景品が出てくる。京都北方の棧敷嶽では鹿や猪が三條大橋を眺めながらヌタを捏ねくつて居るが、こゝでは二里足らずの谷の末に綺羅の姿を望みながら、熊が柵をかいて居ると見える。二つ目の隆起點を越えて少し降りかけるあたりで、木立を透かし絶頂の南端を望むやうになり、再び闊葉樹の密林と變じ、一面の篠竹は全く人頭を没する猛勢である。路などは捜しやうもなく、恐らく残つても居ないだらう。脚で歩むよりは手で泳がざるを得なくなり、笹潜りの間につひ足先がそれて、右方シラン澤に面した横腹に廻り、氣がついて急斜面の笹を手繰りつゝ、這ひ登るのに意外の時間を潰した際に、裏返したやうに天候が變り、笹渡る一陣の颶を先觸れとして雲交りの冷たい雨が笹葉に玉走る、林の中を卍字絡みに狂ひ廻る氣狂風に木末葉末が一齊に唸り出す、唯さへうす暗い林の底の笹の中は忽

ち黒み渡つて夕闇が迫つたやうに一層物凄しい。時は四時を僅に過ぎたばかり、藪潜りを仕ても頂上は一時間程と見えるが、亂れ飛ぶ落葉の勢も風流を通り越して悽愴の氣を吐いてくる。首筋に撲ちつけてくる霰に冷たさが臍まで滲みる。指先がかさまり始める。剩さへ追て氣味の脚元でしきりに踏み滑べる熊の遺物に意氣地を持ち合せぬ二人は怯氣づき、樹陰に雨を除けながら食ひ残りの辨當に元氣をつけて見たが、何分風の烈しさに焚火も出來ず、風雨は倍々募るばかり暮近くなるのに歸路を危ぶみ、瘠我慢を撤して退却と決し、元の路を下出して、六時近く手代塚に降つた時には空には格別の荒模様もなく、山の八合目以上が濃雲に包まれて居るばかり、里は雨一粒降らぬといはれて、一時間前の舞臺が嘘のやうに思はれた。之が昔であつたなら身の穢れで山の祟りに遭つたといふことにならう。(吉岡八二郎)

陸測五萬分一圖日光號鹽原、那須嶽兩圖幅參照。

○奈良井附近の山

一 高遠山より峠山へ

戸を排して見ると朝噉は今し天照山アテラの蒼鬱たる溪谷に鮮かな條光を投じて、滿谷は彌が上にも麗しく、正に是れ紅葉黄葉の黄金時代。然も葱青の空には些の纖翳だに在るを許さず、今日こそは全く申分のない登山日和である。「高遠山より峠山へ」の念切りに胸中を徂來するが儘に、最早矢も楯もたまらず、先づ高遠山へとぶらりと宿を飛出した。時に午前九時四十分。

殊更に街中を避けて裏道傳ひに奈良井驛の傍に出で、八幡社の石磴を踏み境内を抜けてから、小さな澤(ドーブラ澤)の右岸に展開してゐる桑畑を横切り、新道を突切つて「山ノ神」への小徑を探るべく落葉松林を潜る。聽て栗木立の中に鎮座する見窄しい「山ノ神」の古社を右に見て、漸く瓜先上りの小徑を拾ひ、山道との分岐點で右に折れ、栗の多い隈笹の斜面に取付いた。笹の根元に摺りつ上つて行くと何時の間にかやら小徑は消え失せ

る。藪を潜ること四五分で、とある尾根頭に出た。十時三十分。附近に叢を拓いて新らしく手入した鳥屋場がある。未だ人影はないが、恐らく茲二三日の内にはカスミを張り、鶉の二年鳥を囿に、隻々と西比利亞方面から日本海を越えて来る渡り鳥を捕獲するに違ひあるまいと思ひながら尾根通しを稍左へ辿り、境界の切明に出てから徑を北へと、心持だら／＼と下り、白樺や栗などの多い林に入つて只管に先きを急ぐ。

秋の陽に恵まれぬ道端の可憐な小草は、冷い露に濡れそぼちつゝ震へてゐる。林中の徑は殆ど高低がないので、足は思ひの儘に涉り、聽て林を抜け切ると急に前面が開けて申分のない鞍部に達する。

つひ眼の前に悠然と構へてゐる高遠の山容は、確に人に懷しみを抱かしめる。あたりは檜川・木祖兩村共有の草刈場になつてゐる、そして殊に南面は見事な草の急斜面で、思ひきり裾を延ばした草生は、闊葉樹に蔽はれた佐助澤（鹽澤の一支澤）にまで及んでゐる。東方は頂上の少し下まで闊葉

樹が紅や黄の綾羅を纏ひ、小深い柳澤（橋戸澤の一枝澤）を抱え込んでゐるのがよく見える。この鞍部を西に辿り、愈々北方へ向つて草の斜面を登りかける頃、山徑が縦横してゐて孰れが境界線に沿ふ徑だが判然せぬが、兎に角頂上目がけてさへ行けば迷ふ氣遣ひもなし、又別に境界線に沿ふて登らねばならぬといふこともない故、遠慮なく道もせの枯草を掻分け乍ら登る。勿論左顧右眴すれば可成りに佳い眺望を獲られるが、孰れ頂上に着いてから悠つくりと食ふつもりで、側目もふらず足を運ぶ。かなり登ると一人の小木曾女が思ひきり枯草を背つた五六頭の馬を鞭一つで巧に御しつつ下つてくる。それらを遣り過してから枯草を二丈許も積上げた二つ三つのニフの脇を通つて、電光形の石ころ徑をひた登りに登り、そろ／＼背に汗の滲出るのを覺える頃、漸く余が憧憬久しかりし高遠山の南肩に辿りつき、更に小半町ほど北寄りの二等三角點に到達したのが十一時二十分であつた。

標高一四六三・二米突。頂上は武州高尾山の尖

以上にゆとりがあり、且つ申分のない平で、標石の傍に纔にコナシの矮木が二三本ある外は、枯茅その他の小草が生えてゐるばかりである。標石の傍に轉つてゐる石の面に青い油繪具で「千九百二十三年十月十三日同行三人此處ニ遊ブ」と記してあつたが、下山後は余の友なる奈良井の青年洋畫家中西義男氏の書いたものと知つた。先づ眺望を恣にする。

正南に方つて著しく眼を惹くのは長鬣を振つて木曾谷を駿走する西駒の一群で、最高本岳の岩壁は、べつとりと新雪を着けて突兀天を摩し、それより一段低く北に、正澤川の溪谷を距てて奈良井川源頭の茶臼山(二六五・七米突)を始め、大棚入山(二三七・五・二米突)水澤山(二〇〇・三・三米突)及び一八五・六米突の峯が堂々たる威容を顯してゐるが、更に北に連なる山稜は急に勢力を削がれて姥神峠(一二七・七米突)オホクボ(一四九・一米突)ミヅシ(一三九・二米突)から一四一・五・七米突の峠山に至り、木曾・奈良井兩川の分水嶺なる鳥居峠(一一九・七米突)となつて一つの低鞍部を描き、

更に北走して稍や高まつたものが高遠山である。

眼を南東に移すと、茶臼山に源を發して北流する奈良井川の右岸に聳える黒木立の山稜のなかでこゝから望み得るものは、坊主岳(一九六・〇・六米突)天照山(坊主岳から北へ二ツ目の峯で標高凡ソ一九〇〇米突。伊那方面にての別稱、泣ッ面山)、一八六・二米突の峯及びその左の山葵澤ノ頭(標高凡ソ一八〇〇米突)岩尾澤ノ頭(二七八・二・四米突)瀬戸(瀬戸山? 瀬戸澤ノ頭? 一七二・五米突)に至る諸岳で、孰れも呼ばば應えんばかりに近い。

横川川源頭附近の突坂ノ峯(二一六・〇米突)が天照山の左肩からちよつと首を出してゐるのは何となしに嬉しく感ぜられる。是等は皆龐大な「坊主岳御料林」の範圍に屬してゐるので、民有林と違ひ、二三の峯を除けば山頂附近から山麓のあたりまで、一面に關葉・針葉の樹林に蔽はれ、今は紅黄をだんだんに染めなした霜葉は錦繡の美を誇つてゐる。山葵澤ノ頭の南懷から發源して奈良井橋(通稱大橋)の東で本流と合する渡澤も可成り立派

に見え、霜葉の間から上半身を顯してゐる會遊の渡澤の瀧が双眼鏡の主に久闊を叙して呉れる。

東北方には一三〇〇米突内外の低山脈が逶迤として連り、さして記憶に残る程の山も無いように思はれたが、遠く鉢伏山（一九二八・五米突）二ツ山（一八二六・四米突）三峰山（一八八七・四米突）や、更に遠く王ヶ鼻・武石峰・袴越山などの連嶺が親しみの心を持つて眺め得るのであつた。

直ぐ近く橋戸澤左岸の山なみも、ほんの口元だけは見える。その東面に鳥屋場の二ツ三ツ際立つて目に入るのが桑澤の頭（一四〇七米突）で、その左が福澤山（一六一一・七米突）、一つ置いて北の黒木立の峯が一五八二米突の荒井澤ノ頭である。

北方の眺望は是等の山なみですつかり遮られてゐるが、流石に木曾の上流なる味噌川源頭の八森山（鉢盛山。二四四六米突）は嶄然頭角を顯して木曾谷に君臨し、それより西北鹽澤右岸に蟠る幾多の低山脈の起伏する奥に、其の半面に白皚々の新雪を輝かしつつ突兀たる双尖を空際に抽出して

ゐるのが乗鞍嶽。西方に是れも亦雪白粉の粧を凝し、山貌豊かに龐大なる山容を顯してゐるのが木曾御嶽である。

俯瞰すれば青絹を布いたやうな木曾川は、蕨原の西北、禰宜屋・永谷の南方で二つに岐れ、一つは味噌川（木曾本流）となり、一つは笹川となり、共に源泉を尋ねつつ山懷深く潜つて行くのである。笹川の右岸を南東へ向つて趨る小脈の中で特に目立つのは、やはり道官山（大笹澤山。二〇三一米突）と二〇〇二米突の峯である。奥峰（最高點一六八九米突）東面の草生も去る事乍ら、更に南走して一五三〇米突の圈を有する峰の斜面の枯草の美しさ、或は狐色に或は肉色に全山を染上げて、すつと品よく立つてゐる優姿は、余をして一入の懷しさを覚えしめた。更にドングリの丈較べといふやうに幾多の矮峰をうねらせて、笹尾ノ峰（笹尾山。一四三七・二米突）に至り、つひに山なみは挫けてしまふが、西駒の右肩に倚懸つて立つ風越山（一六九八・五米突）の眞後ろ負けく、美濃で的高峰恵那山が悠然と立つてゐる。其他の美

濃境の山なみは各自にその存在を明にしてゐても、所謂「十三峠に負け七つ」と呼ばれてゐる十三峠の連脈さへさだかに分り兼ねるものを、先づこの邊で大體の眺望を打切る事にする。

藍碧に澄みさつた秋穹のもとで思存分眺望を恣にし、午食を済ませてから更に遊ぶこと時餘、前後二時間を頂上で費し、充分に眼を樂ませて此處に別れを告げたのは午後一時二十分であつた。吹上げてくる谷風を涼しさものと思ひつつ、一氣に直降したので、先刻の鞍部に達した時には、纔に十五分を経たのみであつた。佐助澤左岸の鈍圓頂附近で、四五名の村民が鳥屋造りのために働いてゐた。想へば余は峯々谷々の新緑が漸く深緑に代る七月の初旬、木曾溪谷のあらゆる「美」を慕ひ來つて靜かに思索を續けてゐたのであるが、うか／＼してゐる内に、はや霜に飽く紅黄葉を迎えて、アトリ・ツグミ・ミヤマツグミやヒワなどの燒鳥を肴に、飽くまで純朴なる奈良井村民と共に幾日かを送るのであつた。

鞍部で盛に交叉する小徑を南に取つて、だらだ

ら登切るとすぐに六尺幅程の立派な尾根通しの道に出る。高遠のドームを背にし西駒を真正面にし、て道は渉るが、右なる鹽澤峽谷の見事な霜葉に引かへ、奈良井川左岸に注ぐ^{カッ}澤・池ノ澤・宮ノ澤を埋める雜木の貧弱さには全く悲觀してしまつた。併し此の邊のなだらかな平には、若々しい白肌を顯はした樹齡幾何もない白樺が簇立してゐるので、すが／＼しい氣分になる。こんな良い場所です頃のような穏かな陽氣に、思ひのまゝ兩足を伸して寐轉び乍ら、好きな書を繙いたなら嘸かしなど、果敢ない希望を抱きつつ、殆ど高低のない一筋道を辿る。そして氣が向けばコナシ・アキグミ・シリダシやヤマブドウなどの蔓枝に手を觸れては山味を賞し、思出してはシバグリの毬を割つて小さな實を剥出し、前齒でぽつり／＼嚙締めつつ行く。一つの小隆起に懸ると落葉松の多い左の谷へ向つて細徑が滑込んでゐる。この谷が池ノ澤の谷である。歩一步と下り氣味になると眼前の黒木立の峠山は徐々に頭髻を擡げ、西駒の勇姿は次第に遠退いてしまふ。ネヅミイラズの疎林を搔分けると間

もなく、脚下に大同電力會社で最近に建てた嚴しい灰色の電柱が現れ、同時に赭く崩れた鳥居峠の塹溝が浮き出てくる。枯草をつけた木曾馬の傍を駈抜けて急降し、雜木の中に唯一本高きを誇つてゐるアスナロの樹下を廻つてつひに新道に出たのが二時三十分。仰げば道官山の支脈の上に木曾御嶽が僅に額を出してゐる。すぐ前の「嶽の御岳山」の社の背後一面の落葉松は、無慘にもあらかた折伏してゐるが、是は今春四月六日、此邊一體に涉つて稀有にできた雨水に依るものであるといふ。直に峠山へ登らうと思ひ、塹溝の上の崖縁を探つてみたが、酷い藪で手が著けられず、兎に角頻りに渴を覺えるので舊道を辿り、兼て見覺えの水場に行つて充分に咽喉を濡した。

水場の傍なる橡黄葉の美しさ。古人をして「木曾の橡浮世の人の土産かな」と嘆ぜしめたのは、必ずしもその實その餅その板目のみを賞したものであるまい。新道へ戻つて再び登路を探すのも能の無い話と、あてもなくがさこそとやつてゐる内に亭々たる老松の樹下に出た。樹側の立札に曰

く、「名木御野立ノ松。明治天皇御野立所」と。再び老橡の傍に立戻り、暫く四邊の様子を窺つてゐたところ、頭上に方つてどうやらアラシらしいものが見えるので、愈々藪潜りを決行することとなる。三時。

徑の痕跡らしいものすら見當らぬ急傾斜の擬アラシを三十分許文字通りに直上して、漸く峠山頂直北の小隆起に達したが、結局下に居て案じたほどに酷い藪でもなかつた。併し頼りない木ノ根岩ケ根に掴りつつ登つたので、足よりも寧ろ手の方が草臥れた位だ。この登りには確に手の努力を要する事と思ふ。登りつめた尾根頭は、林野管理局で拓いたらしく雜木を伐拂つてあるので樂に闊歩される。心持上り氣味の小徑を南へ辿り、峠山（一四一五・七米突）頂の三等三角標石を見つけてほつとした時が三時三十五分であつた。頂上は至つて狭いが、丈の低い雜木が少しある外には大した邪魔物も無く、従つて眺望に不自由はない。余は木曾・信濃兩川の分水嶺に登り得たといふ子供らしい淡い喜悅の情がむら／＼と湧いて出てくる

がまゝに獨りでにやりと笑を漏らしたのである。

眺望は高遠山の夫れと大差がないから略す。唯満谷新葉に埋れた奈良井川溪谷の奥鹽水附近まで望み得るのと、奈良井・敷原の人家が兩方とも指摘されるのは嬉しい。高遠のドームも懐しいには違ひないが、愈々出で、愈々明瞭に大棚入山水澤山などの防火線が尾根なみに隠顯してゐるのは、たまらなく余の登山心を煽る。坊主岳の西肩を掴まへてゐる約一七〇〇米突の隆起は、鍛冶屋澤ノ頭といはれ、同名の澤は西麓の部落なる曲り淵の右岸で、奈良井川へ逆落しに滑り込んでゐる。

頂上で遊ぶこと十五分許。ミヅシの鈍圓頂を眞正面に見乍ら關葉・針葉とりどりの尾根(敷原では此の邊をバアノフトコロと總稱する由)を南走し、二ツ三ツの小さい瘤を超えてからクズ澤ノ頭を仰ぎつつ、落葉松の生茂つた右方の谷(クズ澤の右岸)へずり込む。袖徑が斷續してゐるが可成り急な下りである。起き伏す草に足をとられて思はずも轉倒すること十幾度、歩一步と下つて落葉松の殖林の下生なる小藪を潜り抜け、漸く五時に新道

に下り立つた。山國の常として日脚至つて短かく、木曾川の兩岸に蟠る山々の峯がしらも漸く淡紫に煙る頃、夕闇を衝いて舊道に出で、名物お六櫛を嚙める古屋の軒をかすめて驛を目指す。少憩するつもりで敷原の街に余が宿舎奈良井越後屋の親戚なる、篠原文吉氏を訪れたが、結局當家の親切に甘へて今宵は此處に旅装を解くこととなつた。

茸飯に空腹を満たした後、宿の老嫗から面白い昔噺や此邊の山や谷の様子を聴く。文吉氏から明日の旅程を問はれし儘に、余は神谷峠・姥神峠を越えて羽淵村に出で、奈良井川を下つて歸宿する旨を述べた處、夫れより私も子供するから、一層のこと三澤山あたりの秋色を深らうぢやありませんかと言ふ事になり、余も夫れではとて前者を捨て後者を執ることにした。

圍爐裏の粗朶がどつと崩れ落ちて餘燼を擧げる頃、余は十一時半を告ぐる老嫗の聲に聊か愕いて床に就いた。(十月十七日)

二 三澤山を越へて笹尾ノ峰へ

眼が醒める。起きて戸を開ける。未だ仄暗い室

内へすうつと氣持よい涼味を漂はせつゝ迷ひ込んでくる朝靄。それは崖下を迂曲する木曾の清流さへも見透せぬ位濃いものであつた。

今日は朝からうららかな所謂「十月の小六月」を思せる日である。何が嬉しいとて霧旅に在る身の朝まだき、藍青の天空を仰ぎ見た時程嬉しいことはあるまい。上乘の天氣にすつかり安心して、鶉の焼鳥とシメヂの味噌汁を菜に美味しい朝餉を濟せ、仕度をして家を離れたのが午前十時。今日は思掛なくも篠原文吉氏が同行して呉れるので頗る難有い。同家の傍を通つて落込んでゐるクズ澤の右岸をだら／＼と下り、さして潤ひのない木曾本流の磧に下り立つ。川一杯に堰いてゐる夥しい御料材の上を飛び渡つて右岸に移り、露しげき川楊の繁みを掻分け乍ら小徑を辿つて、寺ノ澤といふ小澤の落口に出る。此邊は到る處でヌルデ・カヘデ・クリ・サハグルミなどの紅・黄葉が正に絢爛の秋を謳歌してゐる最中。この小澤を登り盡すと一つの小さなアラシが我々を威嚇してゐる、何のは位と思つたが三四度足をとられて危く滑落さ

うになつた。(この左手に稍々大きなアラシがある。登れぬ事はないだらうが、結局勞多くして效寡きに了るらしい)。

この小アラシを登り切つてから栗の多い雜木林に入ると徑が樂になる。落葉松や白樺などの林を通ずる千鳥がけの小徑を只管に急ぐ。林中には茸が澤山生へてゐるので、是こそと思ふのを採つて試に文吉氏に監定を乞ふと、「それもシメヂには違ひないが、イッボンシメヂと言つて命を大切にする者は見向もせんづら」と言はれ、ぎやふんと參る。

三澤山の南方を過る細徑は餘り判然たるものではない、漱石のよくいふ朦朧體の仲間である。呑氣な山話を交しつつ松の多い斜面を登り切つて、十一時五分三澤山直南の尾根に出た。西南の山腹には闊葉を織込んだ立派な針葉が一面に蔓つてゐる。東側は可成りに人手が入つたらしく、水澤(三澤山の東懷^{フコウ}から發して鹽澤と眞向合に本流に落込む小澤)兩岸の或る一部を除いては、大した良木も殖林されてゐないようである。尾根通し少し行く

と鳥屋場が在つて、四十恰好の男一人と小供が三人、カハミを疊んで歸り仕度をしてゐる傍に、ガツチ・ツグミ・アトリが三四十羽許繩で首を括られて横臥してゐる。こゝは三澤山頂より見晴しが佳いと聞き、枯草の上に腰を卸し、昨日登つた高遠のドームを始め、鳥居峠・峠山・オホクボ・ミヅシなどに目をやる。正面に開き直つた鹽澤が、川グルミ澤、ワル澤、ホソ澤、佐助澤、大澤、峠澤など比較的大きな枝澤を配下として、其の奥深い懷を覗かせまいと黒衣で肌を隠しつつ濟し込んでゐるが、其の水量はかなり豊富なようである。

俯瞰すると藪原の上町外れから川沿に走る野麥街道を來往する人が豆人形位になつて双眸に映ずるし、耕父をして刈入時の繁忙を嘆ぜしむるところの黄い田や僅に拓いた疎菜畑は、恰も色紙短冊形にくつきりと仕切つてあつて可愛らしい。申合せたように栗板葺の屋根に拳石を載せ、手に盛らば溢れん許りに密集してゐる人家もはつきりと見える。

徑を北寄りに辿る。左よりも右の方の見透しが

佳いので、つひ其方へ向き勝ちである。高遠山の背後には鹽澤の源流一の澤の發源する一七八五・三米突の峯が一癖有り氣に蟠踞してゐるが、遠望した様子では笹などの下草が多いらしく、夏季登攀の困難が思遣られる。我に返つて三澤山へと急ぐ。二十分も歩いて木立に入り、土龍の盛り上げた土を蹴飛ばしつつ、少し登ると白樺や落葉松の茂みに入つてしまふ。ふと見ると足元に三等三角標石が在るので、こゝが一三一七・九米の三澤山頂だとなと氣が付いたが、眺望は效かず、誠に飽氣ない處であつた。

十一時三十分、惜氣もなく頂上を棄てて南走し、二ツ目の隆起を西北へ向つて下る。白樺の多い落葉松林を三十分も下り、小徑の曲り角で漸く切明に出遭つたのでほとと杖を立てる。涼を容れつつ西北を望むと、道官山から奥峰へ連亘し、更に南走して笹尾ノ峯に續く木立寡い山稜がよく見える。脚下を瞰ると山迫り谷窮まるところ、行手から木曾の一支流なる菅川といふ溪流が馳せてきてゐる。此處から見得る限りの川沿ひ村は總て菅村

の小巷になつてゐて、夫らの人家がいち／＼指摘される。下るに従つて歩きよい徑が顯れてくる。山腹を伐拂つて雜木の截株ばかり残してある斜面に、電光形に搦んでゐる小巷を面倒臭いと思ひ乍ら辿つてゐたが、折柄手懸りの尠いアラシが左の谷へ滑込んでゐるのを見た二人は、何の躊躇もなく夫を下り始める。途中左手に大きな栗の截株があつた。クン／＼鼻を鳴らしてゐた文吉氏が「やあ有つた有つた」といひも終らず兩の手に有餘る程の栗茸を採る、余も負けずに採つたものを一纏めにして握飯の包と同居させ、がら／＼なだれ落ちる小石と共に下り立つた處は川胡桃・楡・シナ・落葉松などの豊富な窪で、危つかしい炭焼小屋の二つあるイシキ澤の落口附近であつた。午後十二時三十分。

イシキ澤左岸の小巷を正直に辿り、菅村の小巷なる久保田の下町外れで街道に出てから直に右折し、菅川の丸木橋を右岸に渡越して野中澤を仰ぎつつ下村へ辿着き、菅野館といふに立寄つて行厨を開く。

午後一時十五分、菅野館を後に笹尾ノ峰を攀づく先づその登路なる野中澤沿ひの徑を探す。眼科では信州さつての名醫なりとの噂が高い野中醫師の文化住宅(?)の脇を通つて、少し登ると徑が二つに岐れる、左に折れて進んだが、往くに從つて徑は徐ろに細くなり、畑の中を通り抜け、田甫に沿つて下り氣味になる様子が少し怪しいので、傍の小高い堤に上つて見ると果して飛んでもない方に本道があつて、夫れが正しく野中澤の左岸沿ひにうねり上つてゐる。先刻の分岐點を右折すればよかつたのである。

三四町の間は氣持のよい草原なので、唯足さへ働かせてゐればよいのだと至つて暢氣に緩るゝ々々登る。澤の右岸の斜面は闊葉・針葉が思ひの儘に生茂つて鬱然たる混森林を形成してゐるが、左岸の斜面は唯薪炭の原料をどつさり栽培してあるに過ぎない状態である。馬頭觀世音の石碑を右の高みに仰ぎつつ又少し登ると、漸く左右から木立が押迫つてくる。左岸の窪には七八本のカンゲルミやタケシカンバ(藪原邊では此頃原料寡きツゲ

の代用として盛に櫛製造に用ひつつあるといふ）が今や時得顔に黄葉の全盛期を表徴してゐる。澤の水が隘れて沮洳としてゐる小徑をうねること暫時、そろ／＼少憩を希ふ折しも、文吉氏が又も「有つた有つた」と叫び乍ら左の藪に飛込む、何だと訊けばコナシの樹幹を搦んでシラクチの果實が夥しいものだと思はす。

成る程有るは有るは。此の實は熊の大好物だと聞いてゐるが、夫の持つ一種の風味は我々人間にも全くお誂向である。二人は後腹病むのも物かたと貪食したが、尙且大形のハンケチに包みきれぬ位のお土産も忘れなかつた。コナシもよく熟れてゐた、見掛け程に美味しくなかつたのは、猫につきものの例のマタタビの淡黄色のすんなりした實であつた。

うつかり四十分が程も費したのに驚いて先きを急ぐ。目的の尾根頭は見透せないが、ふりかへれば例の高遠山から峠山へ續く山稜や坊主岳附近、三澤山を盟主とする低山脈などはよく見える。徑はよし、紅・黄の霜葉も麗しいので、樂に登つて樂

に尾根頭に立つと、闊然として眼界が開けたので、頭の方から足の爪先まですうと軽い氣分になる。野中澤の頭よりも一つ右の尾根頭に取付たわけであるが、東側と異り、西側は殆ど一本をもつてぬ感じのよい草生の斜面である。右手に稍々小高いドームが在るので、一議に及ぼす夫れに辿り着いた。

この無名の峯の頂上は、高遠山頂の夫れよりも遙に狭いが、眺望を恣にするには全く申分のない處である。

大體は高遠山頂からの眺望と異らないから、茲には唯高遠山頂で望み得なかつた二ツ三ツの山岳を擧げてみる。

南から西北へかけては別に記すこともないが、黒木立由々しき大棚入の山續きに見える權兵衛峠の奥に方り、實に素晴らしい巉岩峭壁が霄漢を衝いて峙つてゐるのは、あの懐しい甲斐駒及び鋸の胸から上の雄々しい姿であつた。そして權兵衛峠（二五二二米突）から盛上つて北方へ驀進する山稜のうちで、高遠山頂から望めなかつたのは曲り尾

(二九六・九米突) コイノコノ頭(二〇〇〇米突の圈を有する峰) 經ヶ岳(二二九六・三米突)の諸岳で、突坂ノ頭と坊主岳との間からそつと首を出してゐるのが一七三七・六米突の大瀧山である。權兵衛峠から經ヶ岳を経て坊主岳への縦走計劃は、入會以來暫々胸中を徂來したものであつたが、健康上の關係から遂ひ今日迄未だ實行するの運びに到らず、獨り圖上登山を試みつつあつたに過ぎないのである。曲り尾は兎も角、經ヶ岳から坊主岳へかけて奈良井川に面した山稜には、可成りに伐採の跡らしいものが見えるので、此の縦走は案外に樂らしく思はれる。

峠山・高遠山などを見棄て木曾の本流なる味噌川の上流を望む。思ひきり黒木を鑑ひ、蜘蛛手に入組んだ味噌川の源流ヲサヒ澤の上に蟠るのが八森山(鉢盛山)であつて、其の左、前山の爲めに大半は隠されて居乍らもよく頭髻を擡げてゐるのが小八森山(二三七三・八米)である。また味噌川の支流なる尾頭澤の源流をなすナギノ澤の捲上げに在るのが烏帽子岳(帽子岳) 一九五二米突)。更

にヤチ澤(地形圖「鹽尻」の尾頭澤の尾字の北に落ちる澤)を其の西懷に藏する峰を鍋冠(一九六二米突)といふ。なほ鍋冠の東方一八五七・七米突の橋戸澤ノ頭は前山に遮られたものか遂に眼に觸れなかつた。御岳・西駒の勇姿は云はずもがな、愈々出て愈々旺なるは其の山頂附近に夥しい新雪の霰を入れた秀骨鮮かなる乗鞍の山容である。

この氣の効いた眺望を保つこの峰は、高さ凡そ一四〇〇米突(木祖村字下村から新開村字中幸澤へ通ずる乗越の境界點より西北へ三ツ目)で、更にその西北に聳ゆる獨立標高點一五三〇米突の峰は頗る立派な山容を示し、寧ろこゝよりも眺望の優秀を誇るかも知れぬと思つたが、時間の都合上止むなく尾根通しを南走して笹尾ノ峯へ向ふことにした。一五三〇米突の峰頭あたりから笹尾直北の尾根頭に至るまで、恰も牧場に在るが如き丈六尺許の木柵が蜿蜒とうねつてゐるのに奇異の思ひをなし、文吉氏に訊ねてみたところ、此邊一帯は有名な草刈場であり、且又木祖・新開兩村の境界な

るが故に草刈上の争ひなきよう造つたものだからである。

午後三時四十分。後髪を曳かれる思ひをしてこの絶好の眺望を棄て、先刻の尾根頭まで戻つてから乗越の細徑を過り、尾根通しの樂な徑を心持爪先上りに辿る。左のひらに鳥屋場が見えるが人の氣配もなく、アトリが嬉々として其の上空を群れ飛ぶのみであつた。闊葉樹の多いケト澤を左下に瞰て進むと、倒木の太い幹や雜木の小枝が行手の邪魔をするようになり、懸て笹の多い斜面を登りきる少し下に標木があつて、其の北面に「是より新開村界」と書いてある。林野管理局で刈込んだらしい笹の根を踏んで思はず「あ痛ッ」と叫ぶこと幾度。びく／＼もので此の急斜面を登切ると更に笹一面の隆起が行手に現れる。もう一息踏張つて「恩賜紀念林界」の標木在る木立の瘤を乗越し、猛烈な隈笹（近く林野管理局の手で刈込む由）を掻分け、倒木を乗踏え飛越えつゝ、栗木立の斜面を直上して、漸く笹尾ノ峯頭なる二等三角標石に足を觸れた。四時十分。

標高一四三七・二米突であるが、山頂附近には雜木に混つて丈の低いネズミイラズや白樺やシリダシやコナシが繁茂し、常々眺望を妨げてゐるので、先刻の無名峰に一籌を輸するのは是非なき次第である。五分許休んだのち、宮ノ越徳音寺の傍なる百島^{モモジマ}へ下りるべく急いだ。手當り次第にアキグミやシリダシの果實を飽かず舐りつつ小隆起を幾つか越えて、一時間程も歩いたが更に下りの徑にならぬ。漸く「これは變だな」と氣付いた時には、前方の谷底にちらつく燈火を視て木曾福島の町外れだといふ事がわかり、再び獨立標高點一二七九米突附近まで逆走して、左手の藪へ飛び込み、がさ／＼と暫くあたりを探した。

折柄の月明に漸く徑の跡らしいものを見付出し、ほつとし乍ら落葉松の急斜面をのめるように直降して、とある祠の傍に出る。深いか浅いか分らぬ澤（御馬澤^{オウマヅ}と後でわかつた）の丸木橋を闇に渡り越し、急に廣くなつた道を辿つて杉林の中の小さな坂を下りかけると、眼の前にちら／＼灯のともつてゐる宮ノ越の町が見下せる。

社上根野 東小川村

沿革

乃於往時人望于代景行天皇辛卯年皇二子武尊降臨御
 通鑑時失品川東川會同云木村字平瀬有之
 中野城今川上伊賀等信直鎮之其後明應平
 東川城今川上伊賀等信直鎮之時東方當平野

合合

古(ヨリ)獨村ニミテ合セニコトナシ

管轄

和銅初年國宮田益入領之云云其後治
平治元年知里太郎平煙家^二貞名^一國威年追
所領^三。天正八年度田寺^二癩子^一是等信之所領^三

此

東直隸山員其脈南延以錦衆姓並舊唐山三連一北方延以子女身蛇倉車澤山一號蛇

水龍

群山重疊，其形狀猶如犬牙，如之。

部

大小、山脈屏列、土田村、境ヲ塞、

王越

衛^ニ地^ノ平^ニ坦^ニシ^テ村^ノ各^ノ班^ヲ點^シ在^リ背^ノ尾^ノ及^テ兩^ノ翼^ノ

正 乎

間もなくこんもりした木立に入り、闇を探りつつ行くとお寺の脇にひよつこりと出たので、よく見ると是が例の本曾義仲の菩提寺なる德音寺であつた。いゝ加減に下りてきてぶつかった澤は、寺の南へ落ちて本曾本流に注ぐところの御馬澤であることが分つた。時に六時十五分。

後で考へて見ると、二人は笹尾ノ峯から西寄りに南走する尾根通しの小徑に瞞され、三文字（地形圖「伊那」笹尾ノ峯より南へ二ツ目の隆起。標高凡一三八〇米突？）の分岐點で左折すべきをうか／＼と尾根通しに本曾福島の町外れへと導く小長い徑を辿つてゐたのであつた。本曾川に架つてゐる寺橋といふを渡つて宮ノ越驛に辿り着いたのが六時三十分。天祐といはんか列車は定刻より三十分以上も遅れて漸く歩廊に入つた。勝手な言分乍ら斯うなると歩みの遅い汽車も難有い、お蔭で次の列車まで三時間餘の待呆けも喰はされずに車中の人となることができた。

藪原驛で車窓から篠原文吉氏を見送つた余は、僅か二日間の低山あるさにも關はらず、言知れぬ

喜悅の情に充たされ乍ら再び懐しい奈良井の旅舎越後屋に立戻つてきたのである。（高畑棟材）

（大正十二年十月十八日）

○山旅のノートから

九州の中部・南部一帯は、その地質構造上四國及び大和・紀伊一帯と同一系統のものであるとは、すでに地質學上の定論であるが、この事實は又或種の植物の分布からも窺ひ知ることが出来る様に思ふ。尤もこう云ふ様な問題は多くの材料から得た信すべき統計的事實によつて、はじめて論斷さるべき重大且つ興味ある事項であつて、既にそれ等に關する研究を進めて居らるゝ方もあること、思ふので、私は唯五家莊・國見岳等を素通りした時に氣づいた二・三の事實をエピソードとしてここに記すことにする。

イチキは一位科の樹木で、北海道や本州中部・北部の深山には普通なもので、かつその別名アララギの名と共に何となく人々に床しい感じを與へるものであるが、私は今度此種類が國見岳一帯の高

い尾根に點在するのを見た。五家莊の人はアカギといつて、風呂桶等に使ふとがあるといつて居た。九州では恐らくこの中部の古生層の高山地に限られて居るのではないかと考へられる。そこでこの樹種の分布を見ると、四國から所謂大和アルプスに亘つて居る事を知ることが出来るのである。それから、北海道の森林に普通なサルメンエビネは、又四國の山地にもあるものであるが、國見岳一帯にも森林中にその艶美な花を見ることが出来る。イチリンサウ・ニリンサウ等は、九州では主として、中部の高山地に生ずるもので、その本州との連絡は四國を介して居る。

これ等はホンの小さな一例であるが、九州の中部の山地と四國・大和・紀伊との植物分布上の連鎖をうかがひ知る一つの資料であると信ずる。そしてそれ等が又北海道にも連鎖を求め得ることは益々興味ある事項であると云はねばならぬ。

九州に多い火山の高山では、植物帯の變化等はどうも正常な推移を見せて居ないのであるが、國見岳や市房山等では、略正常な發達を見せて居る

様に考へられる。即ち下部から上部への推移は(一)常緑闊葉樹林、(二)常緑闊葉樹と針葉樹との混淆林、(三)落葉闊葉樹と針葉樹との混淆林、(四)落葉闊葉樹林の四帶を區別出来る様である。尤も市房山や國見岳等ではその山頂附近では、森林がいぢけて灌木帯とでも云ふ區域を強いてつくれば出来ないではないけれど、それは唯地形的の一異常型で、眞の灌木帯とは似而非なるものである。

屋久島の八重岳(一九三五米)は、その拔群な高さから、緯度が南であるに拘はらず、その上部は眞の灌木帯に達して居るものと考へられるが、九重山の高處は高度一七八八米に達するとは云へ、又多くの本州中部地方と共通な高地植物を生ずるとは云へ、眞の灌木帯へ達してゐるとは考へられない。それはあの山麓が新しい火山であること、森林の人爲的破壊が甚しかったと等を挙げ得るからだ。

五家莊を圍む高山地や宮崎縣の椎葉村の山地等は、九州に於ける最も深山地であると云ひ得るのであるが、林區署では森林管理の必要上、縦横無

盡に巡視路を設けて居る。それで陸地測量部の五萬分一の地圖に記された何倍かの路線があの邊の山地にはある筈で、山地の跋渉には非常な利便である。しかも要所々々には親切な指導標を立て、あるので、少し注意すれば迷ふ様なことはない。それでその地方の山地を歩く前に一應八代小林區署、濱町小林區署、延岡小林區署等に照會して置くことも便利を得る一方法になるだらうと思はれる。

それから内大臣山の地名で、陸地測量部の五萬分一の圖に出て居る西内谷は、北内谷の間違ひで、西内谷はそれよりズツと下で、左から内大臣川に合する大きな谷である。又五家莊一帶の部落にも可成書き入れ洩れがある様だつた。(竹内 亮)

○可惜郡村誌の焼失

昨年九月一日の大震災は、官公私を通じて大小幾十の文庫を全滅せしめ、曠世の稀籍寶冊も空しく一片の灰燼となつて、今後幾萬金を投じてでも決して再び獲られない貴重の圖書を永久に失つて了

つた。其中に在つて大學圖書館で焼失した「郡村誌」六千四百冊は、山の考證でもしやうとする人に取りても、亦見免すことの出来ない權威あるものであつた。

此書は明治の初年に内務省の地理局で、大日本國誌を編纂する爲に、全國の各村に通牒して、提出させた資料即ち舊幕時代の所謂書上げを基として集成したものである。

大日本國誌編輯誌料取調候處、前記之通り相違無之候也。

村誌擔當委員

明治 年 月 何 之 某印

同

何 之 某印

右の様な文句が提出資料の終に記載してあるのをよく見受けた。

郡村誌は二通り揃つてゐるものが少なくなかつた。其一は明治十二年乃至十四年に集成され、巻首一冊は之を郡誌とし、各村誌を總括的に纏めたものであり、其村誌も亦編輯されたもので、書上

げられた誌料其物ではなかつた。然るに他の一は、明治二十年乃至二十一年に提出された各村の誌料を其儘綴ぢ合せ、これに總括的な郡誌を編附したものであつた。察するに恐らく後者は、補遺の積りで提出されたものではなかつたらうか。所が此兩者を比較して見ると互に出入する所があつて、孰れを取り孰れを捨るといふよりも、寧ろ並存して妙味のあるものであつた。

書上げの事項は、最初に「誌料編輯有志賛襄者」なる欄を設けて、其人の身分と履歴とが、載せてあり、編輯者の如何なる人であるかを明にしてある。主として戸長とか元戸長とか、又は村での學者とかいふ人達である。それから沿革、位置疆域、幅員、地味、地勢、字地、戸長役場、郵便局、學校、農工場、會社、病院、神社、寺院、道路、橋梁、渡津、山岳、原野、湖沼、堤塘、瀑布、名勝、古跡、古墳、人物、流謫、古文書、變異記事、舊檢地帳表書合計、舊檢地帳所載の字等の項目に就ての記載であるが、これが又可成詳細を極めてゐる。例せば沿革の部では、名稱、所屬（郡、郷、莊、

領、組、大小區、郡區、戸長役場）、分合、管轄の四項に亘りて述べ、地勢では、山脈、水脈、東部、西部、南部、北部、全地形勢を叙し、山嶽では、所在、高、形狀、周圍、登路、樹木、景致、雜項に分けて記すといった工合である。然しこの行届いた記載方注意も、うまゝ當事者に徹底しなかつたものか、或は故意かは知らぬけれども、痒い所に手の届いたやうなものもあれば、極めて粗雑なものもあつたりした。

村誌には詳しい繪圖の添附してあるものがあつた。中には字地まで一々繪圖にした村などもあつて、其勞力には驚嘆してしまつた。いや地方に依つては繪圖に物を言はせて、記録の方は極めて簡単に記述したに過ぎない縣もあつたやうだ。書上げ當時には各村誌とも盡く繪圖が添へてあつたものが、後に散佚してしまつたのかも知れなかつた。傳説や口碑又は土語、變つた風俗習慣の如きも、特別に項は設けてなかつたが、適宜な項目の所に記入してあつた。傳説などは古跡の部に入れてあることが多かつた。

編輯の體裁が前述の通りであつたから、此書は地方行政上に便利且つ貢獻する所が多く、入會各村の地界や山林の管轄等で、訴訟の起つた場合などは、本書の記載に據つて解決したものである。

又郷土研究の上から言ふても、無二の寶庫として、少數の研究者に貴重されてゐた。加之のみならず日本の地理を研究するには、觀過することの出來ない性質のものであつたに拘はらず、多くの地理學者は或は其存在すらも知らなかつたものか、一度本書を見ればすぐ分る大きな誤を依然として繰返してゐるものさへあつたのは、燈臺下暗しの諺も思ひ出されて笑止な位であつた。

山や谷を踏査したり考證したり、或は研究したりするにも、本書は實に良好な指導者であり、時として必要缺く可らざるものであつた。私は其お蔭を蒙つたことが幾度であつたか知れない。本誌第十一年第一號に載せた河田氏の武藏通志山嶽篇は、郡村誌の誌料を基として編述されたものであるが、其記事の正確にして而も精細なることは、實際に照して驚く可きものがあるのも無理のなき

次第である。幸にして多摩郡の山と川との記事は、大部分會て郡村誌から抄出したものが残つてゐるから、他日誌上に掲載して讀者の瀏覽に供しやうと思ふ。本會は機會ある毎に、せめて郡村誌全部の山の部だけなりとも、抄出轉載したいものであると思つてゐたが、其交渉が成立しない内にこの罹災を見たのは實に遺憾に堪へない。

勿論郡村誌の如きは政府でやらうと思へば、再び編輯する事は敢て困難ではあるまい。然し夫は單に地理的現狀の調査に止まつて、傳説や口碑も失はれ、舊慣古俗を熟知してゐた老人も物故し、古文書などの大半が散佚してしまつた今日、明治初年に於けるが如き郡村誌は、再び之を編纂しやうとしても到底不可能である。

帝國大學では、内務省地理局から之を引繼いだ後、一度雨漏の爲に汚損したり、不幸にして其幾冊かを廢滅に歸して以來、貴重本として書庫の奥深く襲藏してあつたので、火災の時は手の下しやうがなかつたさうである。この「郡村誌」六千四百冊の中、東京市史編纂掛に貸してあつた上野國

利根吾妻の二郡約四十冊のみが、稀有にして災厄を免かれ、郡村誌の如何なるものであつたかを示す標本として形見に残された観があるのも是非もない。(木暮)

○城ヶ尾行

激しい執務のひまに、なつかしい山ふところに親みたいといふ事は、自然に起る要求であらう。平野の真中に住む東京の人々が、土曜日曜の休を利用して、比較的山深い所に入りたいと思へば、先づ大菩薩連嶺、丹澤山塊を選むであらう。

私は道志の名にあくがれて、何時かは思ふ様に歩いて見たい、又河内川を育む山々、所謂足柄の山々をも同時に跋涉して見たいと云ふ計畫を、可成以前から胸底深く秘めて居た。かくて丹澤山から塔ノ岳への篤道、玄倉川上流の紅葉、中川から、犬越路への錯綜、城ヶ尾峠の静寂を味つてからは愈々忘れ難いものとなつた。然も今次の災變によつて、あの美しい森林が赤裸になつたかと思ふと、感慨無量である。然し私は少しでも早く、あの美

しかつた山ふところに抱かれたかと思ふと、しあはせであつた様にも思はれる。

丹澤山塊につきて足跡至らざるなき武田博士に誘はれて、文字通り驥尾に附し、災後の丹澤山塊西部を採ることゝし、四月一日の夜行列車で飯田町を發し、大月から例の電車で吉田に向つた。長い吉田の町を歩き始めたのは午前四時十五分過であつた。家を出る時に、金星が濡絹を透して見る様に滲んで見えたので、天候を氣遣かつて出發したが、吉田の町では可成の星が見えて居たので安心して歩いて行つた。忽ち石油鑛を節可笑く叩いて過ぐる一隊……殊に中には婆さんも二人居た様だが……に出會つた。あまりの騒がしさに呆れて火ノ番とは氣附かず、氣狂の所業かと思つた位であつた。

富士嶽神社を一塊りの間に見て、宇新屋を出外れるともう富士の裾野だ。夜明近い空は雲の去來はげしく、つひに満天を覆つて終つた。暫くして街道を左折し、僅か行くと富士見公園に出た。桂川の本流は見事な瀑となつて、仄暗い中にも一條

の白と、鞆々の聲を擧げて居た。元の路に戻つて大町桂月氏の推奨したとか云ふ井戸のある、ナシケ原の西軒家の檐先に腰を下ろして朝飯とした。少々道草はしたが、六時十分は驚いた。家は無人なので蜜柑で喉を潤して出發した。悠々と天空を限る双曲線に似た空線を畫く裾野は、何時見ても飽かぬ景色だ。落葉松二三本をあしらつて、路傍にカメラを立てて居ると、沼津へ行くのだといふ里人が、寫し終る迄立つて見て居た。富士の上には拋物線の様なカーブをした雲が逆立をして見える。『アリヤつるし雲といつて、あれが山につくと雨でさあ』と説明した呉れた。どうもガスが多くて雨らしく思はれるが、武田さんは大丈夫だと云ふ。裾野の道を呑氣に歩いて平野に至るべく左折して桂川の源流について溯る。震害であらう、左手の一一〇四米突の丘には、まさに崩れんとする裂罅が、幾條も見られた。山中湖が見え初めた頃には、もう富士の頂は見えない。多年一遊を希望した山中湖の富士を、カメラの中に収められなかつたのは頗る残念であつた。又桂川の流口のあま

りにあつけない有様にも興が醒めて終つた。湖岸を道ふて後、平野に向つて湖の北岸を辿り、長池の部落を過ぎたのは八時半。鐵砲木ノ頭（一二九一米突）を遠く望んで、ヒタヒタと寄せる軽い湖の囁きに慰められつゝ、露の臺の多い砂の一すぢ路を平野に出た。平野は去る地震には激震地帯に當りし故にて、大分と家が痛んで居り、大地震の時は同時に十五個所から火を發した相だが、直ぐに消し止めた由である。小学校前の雜貨店で菓子を食べ乍ら、早晝をすませて色々と話を聞く。三十分計り休んで十一時に出發した。

路を北に取つて少し許りの坂を登つて行くと、左右割權現道となつて路は頗るよい。鳥居の傍から右に取つて行くと、廣々とした原に出た。『甲斐國志』の村里部平野村の條には「此地湖水の東平原の地なれば村名平野と稱せるならん地形又近江の平野に似たり」とある。又元録十六年十一月廿三日に大地震があつて、山崩れの爲に家は押つぶされ人畜の死傷も可成あつたので、其時から今の地に（山足をはなれて）住すとあるのを見ても、

昔から地震に弱い地であつた事が推察される。加ふるに寶永の富士燒の爲め山野皆燒砂となつて、あたらず野を不毛に等しい地にして終つたのだ。然し風景は絶勝であると書いてある。山伏峠に向つて此原を見渡すと、何となく梓山の戰場ヶ原といふ風に直感された。けれど振返へると一碧の湖を隔て、富士の靈峯が屹立して居るから實により景だ。初めの程は山崩れの後の出水の有様が、まぎ／＼と地に印せられて居たが、暫くすると草原になつて暢々した氣持になる。しかし今日は眺望がない。山伏峠あたりを密雲が籠めて、もう帽子には果敢ない音さへ聞えて來た。晝の中から抜け出て來る様に馬が二三匹現はれる。武田さんは早速馬子を捉へて質問を始める。何處から來たのかと聞くと、世附の水ノ木から來たといふ。話の模様では、世附の谷からこつちへ來る路が大分と壞はれた様だ。油紙をかぶり原を横切つて峠路にかゝる。荒涼たる平野の果に湖と富士とを眺めるのはまことに美しいものに違ひない。晩春の若葉か、初冬の頃訪れたら又ない思ひをするであらう。

峠の頂上では午後零時十五分、景は一變して俄に深山らしい姿を見せた。道志川を生む谷は幽邃に、そして斜面には未だ厚い残雪さへ示して居た。道志川の下流は屢々眺めて居たが、一度は水源のあたりを通つて見たいと思つて居たのを、今、目のあたり眺める心は、小兒の如くわだかまりのないものであつた。僅かの距離であるが此水源あたりは感じのよい處であつた。カメラを立てて居ると、又一頻り降つて來たが遂に止まなかつた。初めの程は左岸を傳つて行く。その内に谷も平凡な姿となつたので、唯足にまかせて雨の中を進んで行つた。左手には御正體山の山脚が恐ろしく峙つて見える。長又迄は可成骨が折れた。一時十分、とある百姓家に茶を乞ふて圍爐裡にあたる事が出來た。神地迄は宿屋はない相で、物賣る家も少ない様だ。油紙を欲しいと思つても賣る家もない。村のものは谷村に馬に荷をつんで行くので、歸りに何でも欲しいものを買つて來るから、村には所謂物品販賣業の存在する必要がないのだ相だ。道志川や秋山川沿岸の村々では、豆腐屋が通る處は

開けた方なのだそうで、此の處なども豆腐屋は來るのだが此始末だから、外が思ひやられる。仕方がないから又雨の中を白井平、板橋、善ノ木と下つて行く。此のあたり兩岸の崩壊は可成り手ひどい様である。後で聞くと、大正九年八月四、五日の大荒れの跡であつて、地震の爲めでは無いとの事だ。雨の中に鳥ノ胸が名の如く道志川に胸を張つて突き出て居る。もう神地だ。曾遊の三ヶ背澤を覗いてから、村で宿屋を尋ねて、一軒ある事を知つた、手前の家より先きの方がよいといふので、態々道坂峠路と合してから暫く行つて、宿を乞うた處が、あなた方に上げる様な食物はないと言つて、どうしても泊めない、又戻つて手前の家に行つた。もう四時半頃で、今日は大分と塞い。然も下着は汗で上着は雨で濡れたので、乾すのが大變だ。宿から赤い裏の女の着物を借りて、免も角も簡單な夕餉をすませて、襦衣を乾かして居ると、武田さんは宿の老婆を相手に、頻りに地名などを聞質される。夜汽車の勞れと雨とですつかり草臥れて、終には夢現の様に話が聞えた。盜られない様に荷物を纏

めて寝て呉れと、親切だかふどかすのだからぬが、そう云つて蚤の多い床へ案内した。どうもあハキ／＼した處は、唯の女ではないらしい。

翌朝眼を覺ますと、兩戸に朝暾があたつて居たので、喜んで起き上り、前の小川で顔を洗つて空を眺めると、下流の方は暗れて居るが、頭上は又漠々の雲に覆はれて居たので、稍悲觀の體だが、城ヶ尾行を決行することにした。二人で壹圓貳拾錢の宿料を拂つて、午前八時宿を出る。道志川を越す所に來ると、今頻りと工事中だ。地震後九月十五日の大荒れで大分やられたのだそうだ。

三ヶ背澤に入る。暫く行くと澤は西澤と東澤とに分れる。其の手前に炭焼が居たので、忽ち例の「土民測量」といふのを始めた。これは武田さんの新用語であつて、土地の人に就て何でも其土地のことを聞き質すことをいふのである。此西澤のオキは栲澤で、其の頭は栲ノ丸といふ相だ、本誌十五年の武田さんの記事に、菰釣シ山を道志では栲ノ丸と稱するらしいといふ事は、事實と確定された。聽て澤は一面の押し出しとなつて、仄か

に路らしいものが續く。此邊から今日も亦頼りない音を聞く様になつた。藪の藁を採集し乍ら溯つて行く。大正十一年春に來た時には、舊い路が左岸について居たけれど、今度は崩れて一向に分らない。可成苦心の末、午前十時澤を離れる峠路入口の、見覚えある道標を目に入れることが出來た。篤とそして深い茂みの間を通る路は明かであつた。暫くすると一寸した赤土のガレがあつて、先づ無難に越して尾根を辿ると、今度は一層大きなガレに出會つた、仕方なくガレの上を迂廻するところになつて、篤の中を我武者羅に分けて暫く行くと、一旦澤に下りて左の尾根に渡る處に出だ。一面に崩れた急斜面には勿論路はない。ガレの表面は雪解水の凍つた上を、崩れた土が軽く覆つて居るので、一足入れて見て、長嘆之を久うして又下から眺めた。側のヤブを行つたのでは一時間も掛らう。流石の武田さんも『君歸るかい』と言はれた程であつた。結局ヤブとガレとの境目を、木の根にすがつて行く事にして、漸く登ることが出來た。それからもう危い處もなくて頂上に着いた。

千米突内外の峠路など、侮つてはいけない。霧雨の爲め、樂みにして居た畦ヶ丸方面の眺望も得られない。畦ヶ丸と云へば地圖上甚だ奇抜であるが、武田さんの話では地圖には可成誤謬があると云ふ事である。先年行かれた時には、峠から随分と深いヤブの中を潜つて行つて、終には自分の位置さへ判明しない程になつた相であるが、今は餘程伐木の魔手が伸びて、一寸覗いた丈では樂に行ける様に見える。若しも左迄困難をせずにするものなら、畦ヶ丸探究に一遊を試みたい氣もする。兎に角今日は霧雨で、目的の處に着いても休む處か、眺望も得られないのが残念だ。十一時過發足。相州側の峠路は龜裂を生じて仲々路が悪い。然し景色は一段と勝つて、櫛の太木の間から見た、畦ヶ丸方面は棄て難い。新緑の候、満山紅葉の頃、一度は此の都近き、かく幽邃な峠路を味ふべきであらふ。續いて三箇處のガレがある。或ものは上を迂廻し、或ものは羚羊流に横斷する必要がある。行くに隨つて相州側は、震害の豫想外にひどい事を知つた。地圖（陸測五萬、松田物領）を見ると、

一〇〇〇米突附近で小さな西の尾根から、東の本尾根にかかる様になつて居るが、此邊は路も切れ斷れになつて崩壊が甚だしい。九六〇米突の附近などは、信玄平の遺跡なることを後に推定し得たが、此時は勿論崩壊路を如何に行くべきかに就いて苦心して居たので、其まゝに打過ぎて終つた。樹の大木を背に、茅戸の斜面の中に埋つて、白銀の富士を嘆賞した會遊の此地も、今日は淋しく、そして忙しく過ぎて終つた。峠路は右に白水澤、左に卜澤を下瞰しつゝ、地割れのある尾根の上を走つて行く。貧弱な殖林がある計りなので、左右を廣く見渡すことが出来る。七〇〇米の附近は武田さんが、信玄平かと一時考へられた地點なので、可成に注意して探索しつゝ行つたが、終に尾根の末端に出て終つた。然も猛烈に崩壊して居て、岩石の洪水の様になつて居て足の入れ様もない。降り切つて白水澤を東に行き、卜澤と合流するあたりを地藏平と云ふ。数棟の山小屋の間を通り、御料局の出張所の事務所を訪ねて茶を乞ひ乍ら、武田さんは番人に地震當時の話や、信玄平に就いて

色々問ひなどした。信玄平は知らぬが、信玄平に有るといはれるお助水といふのは、九六〇米突附近であつて、白水澤に向つて湧出して居ると答へた。丁度前記崩壊の甚しい處に當る譯である。地藏平附近を歩いて、カメラを立てなどして、零時四十分から二時迄、晝餉やら散歩やらに過して、愈々此の澤（大又澤）を下り初めた。可成積の廣い澤を傳つて行くのだけれど、深い森林や荒れた具合は、深山らしい氣持を與へる。十本に近い獨木橋を渡り、二時半に堰堤に着いた。

堰き止められた大又澤は、流木の残骸や、夥しい土砂の爲めに、大荒れが一目に見える様だ。殊にオリトノ澤からは、溢れる様に土砂を流して居た。靜かな水面に影落す鐵の構造物は、自然破壊者其物の姿に見られて、甚だ嫌でならなかつた。カメラを据えたり、堰堤詰所で問合せたりなどして、二十分計り費して發足し、少し下ると右から寶形棚澤が合流する。分け入ると忽ち前面に、寶形棚の二段の瀑が見事に懸つて居る。武田さんが此處で最後の撮影をして、三時十五分、樂な澤沿

ひの路を、主として右岸を傳つて走つて行く。以前通つた時には馬鹿に長いと思つたけれど、今日は大變樂に、四時十五分には淺瀬に着いた。此の世附川の合流點附近から上流にかけては、甚だしい變り方で、左岸にあつた茶店は右岸に、といふよりは谷の真中に移つて、一面に土砂の堆積と山腹の崩壊とを示して居る。例により生卵を飲み、二十分程休んで、愈々最後の峯坂越えにかかつた。夥しい山崩れの爲め路は變つて終つたが、相變らず世附の谷水を育む山々の眺めには、他にない程勝れた位置を保つて居る。五時二十分、峠の頂上に着いたが、低い雲の往來が甚だしいので、よい眺めを得る事は出来なかつた。露の藁を採り乍らも、急いで日の暮れぬ内に山を下らうと、緩い山坡を繞つて逆落的に柳島に下りてから、悠々と小山の町に入つた。六時四十分、驛近くで夕餉を済し、終列車で歸京の途に就いた。

新緑に、紅葉に美しい粧ひをこらす丹澤の溪も、大分と痛められた様だ。以前の様にたやすく入ることは、當分難いであらふ。殊に諸方面の人の説

を綜合しても、此梅雨後でないと、危険さへ伴はないであらうか。兎も角此の都近い幽玄な山溪を、眞摯な山谷の巡禮者によつて探られ、誌上に發表せられんことを、望んで止まぬものである。

(大正十三年五月稿 松井幹雄)

○澤と谷

澤も谷も地形を現はす文字として、字典にもあるし、文字上は日本國中、何處でも使はれて居る。然るに文字を離れた言語としては、日本國中何處でも此兩方を使つて居るとも限らぬ。東北や關東地方では「澤」といふ語が盛に使はれる。地形上回稜の所は凡て澤である。大きな溪谷を總括して澤と呼ぶこともある。澤内の住民を「澤の者」と言つて廣闊な區域の住民と區別することもある。「此の澤での金持」とか「物識り」とか、兎も角一の溪谷を此の澤あの澤と呼ぶ。官廳でも溪谷の設備を「澤の工事」と言つて居る。谷なる語は滅多に使はない。然るに山陽道邊になると「澤」なる語を殆んど使はない。關東や東北の人々が澤と言ふ

所を凡て「谷」なる語で通して居る。「この谷での分限者」、「彼の谷での物識」といつた風に、あの谷の堰堤工事と言つても、あの澤の堰堤工事とは言はない。東北では、あの澤の森林事業區や堰堤工事などと云ふことを官廳の人々からも耳にする。山陽地方には澤といふ語は字典にあつて言葉に使用はない。但し地形地質上過濕になつてゐる所をばソータと言ふが、之れは澤田の意味かも知れぬ。然も田があるでなし、水草密生地で、始終ジメ／＼してゐる所をソータと言つて、澤に近い語を使ふのみである。東北地方ではこんな處をヤチといふのみでソータなどと云ふ語はない。要するに東北に生れ、山陽に永住しての経験から言ふと、山陽の「谷」と東北の「澤」とは一致してゐる。あの谷と言ふ場合にあの澤と呼ぶ。これは其の地方地方に於ける言語の相違で、別段異とするに足らぬが、同じ地形の處に斯様な異つた言語を使用され、しかもそれが方言土語でなく、澤でも谷でも立派な標準語であるのに、處によつて同一物を澤と言つたり谷と呼んだりするのは、單に處が變つたと云

ふばかりでなく、地質と氣候とに左右せられ、其の地表の状態が何れの谿谷も澤と言ひかねたり、谷と言ふのもふさはしくない時があるために自然、一方では谷と云つたり他方では澤と呼ぶやうになつたのではないかと思ふ。

東北地方一帯は新生界の軟い頁岩（板泥岩）が多く、山岳地帯の火成岩も新しい火山岩である。即ち大體に於て、粘土になり易く、土質一般に水分を吸収してジメ／＼になり易い。それに太平洋に向いた一局部を除いた外は、空氣は乾燥してゐない。殊に日本海の影響を受ける裏日本地帯は、空中濕氣も多く雨も多いから山地の土壤は常に水氣を含んでゐる。殊に凹稜である溪谷は、山岳地域各所の水分を集中する所であるから、溪流の水路をなせる所のみでなく、溪谷區域一帯、排水も不敏な粘土質であるから、水分でジメ／＼してゐる所が多い。其れで彼の地方一帯の溪谷が濕つぽく、單に「谷」と言ふよりか、實感上からしても沼澤に近いし、澤と呼ぶ方がふさはしく思はれて、自然と澤と言ふ様になつたのであらう。

一方山陽道南部は、全國稀有の空氣乾燥地帯であり、地質は花崗岩や石英粗面岩で、其の風化土は砂礫質に富み、通水自在、排水は非常に良好で、保水力は頗る弱い、千尺内外の丘陵地帯の溪谷であると、雨期の外水分のないことが間々ある。水分があるにしても流路となつて居る所だけで、其の兩岸地帯は敏活に排水せられて、水分でジワジワしてゐることはない、即ち谷間の大部が濕つぱくなつて居る所は稀である。北部は相當空氣に濕氣があるが、母岩が花崗岩か石英斑岩が多いから、溪谷の水路にこそ始終水があつても、其の附近地までジワ／＼して居ることは餘りない、風化土が排水が好いためである。中部は粘板岩であるが、大部は秩父古生層の堅いのや少々中世層の粘板岩であるから、東北地方の如き頁岩（板泥岩 *shale*）でないから、あんなネバ／＼した粘土にならない。何れにしても、保水力の點に於て、東北地方のものより弱く、溪谷が水路以外にジメ／＼して濕つてるといふことが少く、水源の淺く狭い凹稜では、無水の狀態に在ることが多い。即ちカラ／＼乾い

てサンズイヘンの澤の字を充てはめることの出来ない谷間が多く、單に「谷」と言ひさへすれば、水分の有無や、乾濕の狀態等に顧慮せんでも、谷たるに於て相違はないし、澤と言へば何んだかザワ／＼ジメ／＼して居らぬと言へぬやうな氣も起るが、「谷」と言へば、こんな顧慮も要らず範圍が廣く安全である。始終溪流のある谷でも、流路以外の谷間の區域がジメ／＼して居らぬのに、其の谷全體を澤と呼ぶも變だし、山陽道の如き地質に支配されて出來た凹稜溪谷に向つて澤なる名稱は付られず、殊に南部の如き、空氣乾燥地帯の丘陵で、平時水分を缺く場合の多い地方に、地形が凹稜になつて居ても、「澤」なる稱呼を用ゐられないのは自然の數である。關東や東北の溪谷工事や山林事業に關係する官公吏が彼の澤此の澤と呼ばれると、關西の人々が異様に感ぜられたるが、彼の谷此の谷と解釋して居れば、決して間違はない。要するに同じ地形に對する稱呼が、一方は谷、一方は澤と唱へるか考へて見れば、處變れば品變るで、東北と關西とは處を異にするから名前を

異にするのは當然であるが、谷と澤とは、彼方と此方との地質と氣候を異にするが爲に地表に相違を來した當然の歸結である様に思はれる。これは東北に生ひ立つて山陽に漂泊する者の直感である。澤と谷との使ひ分けをする境界線は果して何處の邊であらう。甲州邊も「澤」と言ふ。關西に近づくに従ひ澤と言はず谷々と言ふ。山陽道岡山縣などになると谷一點張で、澤は固有名詞に使ふだけで、一般の地形には用ゐない。其理由は前述の通りに解釋したい。

(山本徳三郎)

雜報

○燒ヶ岳大爆發

日本アルプス燒ヶ岳の大爆發は、第一報のごとく卅日午前七時ごろ爆發をはじめ、同日午後十一時ごろ大音響とともに大爆發をなし、火柱天に沖して更に卅一日朝七時再び大爆發あり、前夜に比し音響一層物すごく、稻坂地方では非常な驚愕で、降灰は屋根の上に約一寸もつた。山麓地方は一層甚だしく恐らく岩石が落下したであらうと。なほ右につき松本測候所員の語る所によると、燒ヶ岳の大爆發は大正四年六月にあり、松本地方へも灰をふらしたが、前回と比較し今度の爆發は一層大きく、三十一日は晴天にもかゝらず松本地方はまるで曇天のごとく降灰につき、島々方面の山々を望むことが出来ず、爆發の程度については全く不明だが、大正四年には頂上の火口以外に信州各所に降灰したが、今度は一時に爆發したとすれば梓川を再び堰止め、大正湖以外の大正湖が出来らうと。(七月卅一日、松本發)

上高地から觀望した燒ヶ岳

燒ヶ岳の調査に向ひたる長野測候所堤技手一行は、四日午後五時半上高地に着いた、一行が河童橋から燒ヶ岳を觀望した所によると、頂上と西側は風の爲めに噴煙が下伏となつて居るので見えなかつ

たが、上堀澤、中堀澤、下堀澤は明かに觀望することが出来た、大正四年六月の大正池を現出した時に噴煙した箇所は極微であるが、之を認めることが出来た、上堀澤の頭部の噴火口は大正四年當時よりは小さいが、其數と其勢ひを増した如くである、大體に於て馬蹄形を成して多數の小孔氣が噴出して居るのを見た、今回の噴煙は全く飛驒の中尾に面して居る火口より噴出したことは明かである、去る二日午前十一時過噴煙の時は、一時上高地は眞の暗となつて旅舎ではランプを點け、下山する人夫などは提灯を付けて通過した程である。其當時燒ヶ岳登山の者もあつたが被害は全くない。逕信省事務官三宅氏の一行も上高地に居つたが何等の被害もなかつた。東京大林區署副事務官鹽谷氏松本小林區署烏々保護區森林主事小吹氏等の一行も、四日頂上を迂廻して觀察して來たが、其の談によれば、盛んに噴煙してゐて火口の側へ接近することが出来なかつた。噴煙は屢下伏に吹き廻るので、降灰を件ふ噴煙の中を通過するのは頗る困難で、敏捷なる行動をとらねばならぬと云ふ。目下登山路の笹の上は灰に覆はれて居るので、其中を歩けば濺々として灰が舞立つので體が灰まみれとなる。堤大久保兩氏の一行は五日觀察に登山した。(上高地四日特信)

燒ヶ岳の新噴火口を踏査

燒ヶ岳新噴火口實地調査の爲既報の如く松本測候所の堤大久保長野測候所の堤兩技手四日松本を出發して上高地に向つたが、同日現場に登攀し實地調査の結果、同日夜刻松本測候所へ宛た大久保技手からの電報によると、今回の新火口は燒ヶ岳の頂上から少し下つ

た西側の飛驒に面した大岩石の間で、大正八年十一月一日始めて爆發した火口が今回の噴火によつて更に大きくなつたもので、之により登山者の目撃した新火口に對する種々な説が明瞭になつたが、更に中央氣象臺からは中村博士が七日中に來松し、八日上高地に至り九日晴天なれば大久保技手の案内で登攀して實地調査を行ふ筈で、同博士調査の結果により噴火の狀況が詳細に判明するものである。

灰積る事一尺

長野測候所の堀技手、松本測候所の大久保技手は五日午前燒嶺の調査をした、中尾峠に至る途中峠澤は雨の爲に頭部が崩壊して非常に廣くなり谷も亦大正八年の時よりは一層深くなつて居た、此箇所だけは徒歩に注意を要する處である。燒嶺の東北側の尾根には多數の硫氣孔が散在し、小さいながらも勢よく噴出して居る、之は峠澤の頭部に向つて左側である、下掘澤の頭部には勢のよい小氣孔が多數あり、多くは硫黄の花が多數に附着して居る、地面は熱氣が多くて暫らく立ち止まつて居ると足が熱くなつて非常に氣持が悪い、第一火口を横切つて南西側の横孔に行くところとゴッーと凄しい音響を發して居た、此横孔の隆から下つた處に今回降灰を來たした火口がある。此邊の降灰は少なくて五六寸深い處は一尺餘も積つて居た、其灰には水氣を含んで居つて沍るから甚だ歩るき難い、之が固まらなければ火口に接近することは不可能である、五日にも少量の灰が降つた、飛驒の中尾の方から人夫が多數來て崩れた道路の修繕を爲した爲め登山者には非常に便利がよく

なつた、之等の人々の話に依ると、今年は降灰の回数が割合に多かつたが、其多くは信州方面に向つて居たと云つて居る。猶一行は六日にも調査して七日の夕刻松本へ歸る豫定である。(松本電話)

燒嶺の噴煙

東京中央氣象臺技師中村博士等一行は去八日燒嶺視察登山し、途中先發隊の松本測候所技手大久保氏等と一緒に、充分の視察を終へて十二日午後六時無事松本へ降つた、松本に於て中村博士は左の如く語る。

今回の噴煙は大正八年の穴と同一箇所て即ち大正八年の穴に於ける後期の活動とも見える。穴の方向は矢張り頂上より北西の方で飛驒方面に向つてゐる。それで同方面へは火口から約五六町附近迄大きいのは約徑三尺位の石が飛んでゐる。然し信州方面へは灰こそ多いが石は少しもない。だから吹出す時は飛驒方面へ向ひ、上空へ上つてから風の方向で常に信州方面へは降灰があつたのだ。それで火口附近は一體に約六寸程の灰が積つてゐるし、水蒸氣でしめつてゐるからつる／＼すべり危険で何とも火口へ近寄れない、穴の大きさは解らなかつた。今回の穴は勿論新しい穴ではなく、大正八年の再發だが、最初の明治四十四年に比べると次第に穴も小さくなり勢もおとろへてゐる。大體此の位で活動は終つたものと見なされた。(以上大正十二年八月信濃毎日新聞)

○羚羊の濫獲防止

本縣では日本アルプス上高地高山のみに僅に棲息し、近來濫獲

のために種族絶滅せんとする珍獸『羚羊』を保護するため、今回警察部より各警察署に對し注意書を發したが、それによれば大正八年から本縣が羚羊の捕獲を、十二月一日より二月までとしたのであるが、この規程を無視するもの多く、今回上高井郡に於てもこれを捕獲して起訴されんとした事實もあり、之等に鑑み將來期間以外の捕獲を嚴重取締らんとするのである、尙縣は將來羚羊を天然紀念物保存法によつて捕獲を禁止する手續きを執ることにしてゐる。(大正十二年十一月十七日信濃毎日新聞)

○秩父宮殿下立山御登山

秩父宮殿下が雪の立山をスキーで御登攀の計畫については既報の通りであるが、愈來る五日午後六時五十分上野發金澤行急行で御出發の事と決定した、御日程は往復九日間で、六日午前六時五十分富山御着、同日午後二時御出發蘆倉御一泊、七日は弘法茶屋、八日は室堂着お泊りとなり、愈九、十、十一の三日間を海拔數千尺の鯨ヶ嶽、立山、彌陀ヶ原、雄山の各方面を御跋渉、壯快なるスキーの御練習を遊ばされ、十二日御下山、再び富山を経て十三日朝上野着の汽車で御歸京の豫定である。雄山御滞在中の日程は特に定められず天候に依つてその都度御決めるなる筈で、殿下の御一行は細川護立侯、事務官前田利男伯、主獵官坊城俊良伯、御用係渡邊八郎氏に、御案内役として横有恒氏に學習院在學の岡部子令息岡部長世氏、慶應山岳會の大島亮吉、三田幸夫兩氏の九人、いづれもスキーの熟達者のみであるが、別に富山縣當局では信濃山岳會の山口勝氏其他スキーに熟達せる者を選抜御案内に

附ける筈である。

ゆふべ秩父宮上野を御出發

立山へスキー登山の壯圖へ就かれる秩父宮殿下は、霜降の背廣服に淡風色のスプリングハットといふ頗る輕快な御旅裝で、五日の夕刻青山御所から自動車で上野驛へお着になると先着した細川護立侯、坊城伯、岡部長世氏、慶應山岳會の三田幸夫、大島亮吉、渡邊秩父宮家御用掛などの猛者連がスキー服裝でお迎へ申したが、殿下は一行と共にお召車に乗込まれた、御旅行具は殿下愛用のスキーとリュックサック一個、ニコ／＼と微笑されつゝお身輕に六時五十分の金澤行急行で御出發になつた。

【富山特電】 七日立山彌陀ヶ原弘法茶屋に御一泊になつた秩父宮殿下には、八日午前五時半御起床八時半殿下の思召に依り、折柄の大暴風雨を衝いて御出發、九時過大岩木茶屋御登攀、殿下には先頭に立たせられつゝ三里の彌陀ヶ原を突破して、午後二時過御宿泊所なる立山觀測所(室堂を變更)に入らせられた。

【富山特電】 立山一帯は八日來天候險惡を極め、九日は早朝大吹雪となり咫尺を辨ぜず、立山觀測所に御滞在中の秩父宮殿下には、終日御引籠りにて供奉員や横氏等の山岳家を相手に山に關する雑談に耽らせられたが、伊東富山縣知事は立山の天候につき憂慮し、九日電話を以て事務官前田伯を通じて殿下に御機嫌を奉伺した。

【富山特電】 九日の大吹雪で秩父宮殿下の御消息につき憂慮されたが、十日富山縣廳に達した公報によると殿下には九日横、岡部其他のスキー家を伴はれ、吹雪を衝いて玉洞の岩屋ヶ峰、御前谷、

賽の原江原谷並にみくりヶ池等までスキー滑走を試みさせられたが、十日は天候回復したので殿下には朝六時頃雄山の一ノ越まで御登攀になり、終日スキーを御練習になつた。

【富山特電】秩父宮殿下には十一日御ヶ嶽御登攀の御豫定であつたが、山頂一帶濃霧に閉されて危険なので御登攀を御見合せになり、淨土山にスキーの滑走を試みられたが、十二日は午前六時御出發スキーで一氣に御下山、午後四時頃富山に御着、同夜九時一分富山發急行列車で御歸京の御豫定。

秩父宮御歸京 去五日東京御出發越中立山を御登山あらせられた秩父宮雍仁親王殿下には渡邊御用掛を隨へ今十三日午前九時二十一分上野驛着御歸京あらせられた。(大正十三年五月東京朝日新聞)

○京阪神在住日本山岳會員小集會

最近米國から歸朝された、今村幸男氏を歡迎する爲、大阪市北区堂島ビルディング内清交社に於て、大正十三年三月十五日の夕べ集會を催す。

當日の出席者は京阪神在住の日本山岳會會員二十五名。

會食後記念撮影をなし、茶を喫し乍ら快談に時を移す。今村幸男氏は昨秋のスイス地方旅行談を試みられ、同地方會遊の塚本、加賀氏を始め一同非常の興味を以て伺ふ。尙ほ同氏提案の、四月上旬日本を去るゝ、エテ、イー、ドント氏に送別の辭を呈する件を可決し、塚本氏原文朗讀説明の上、一同之に署名す。(下に載す)

次て榎谷徹藏氏は、先づ昨秋の震災に依り逝去されし辻村氏を追悼し、今後春秋の候に、京、阪、神の地で交互に關西地方在住の日本山岳會會員の集會を催さん事を提案され、會衆の賛同を得らる。席上直ちに榎谷氏を常任幹事に、今秋の集會は神戸とし、當番幹事は神戸の岡田英定、毛馬新次郎兩氏に決す。最後に塚本永堯氏の發議に依り當日の幹事諸氏の勞を謝し十時散會す。

幹事。榎谷徹藏、中原繁之助、影山寅造。出席者。東井宣明、朝輝記太留、岡本治之助、岡田英定、加賀正太郎、毛馬新次郎、後藤正彦、後醍醐正六、達清一、田邊朔郎、武山良次、竹下英一、塚本永堯、長野武之丞、濱谷泰次郎、藤木九三、別所史郎、山崎彦磨、山本隆三、山中治三郎、安井喜之助、栗飯原健三。(栗飯原健三)

The undersigned members of the Japanese Alpine Club (Tokio) living in Osaka and its neighbouring cities who met at the Dojima Building, Osaka, for a Social Reunion on the 15th of March, 1924, exceedingly regret to learn of the approaching departure for the Pacific Coast of their fellow member, Mr. H. E. Dann, whose indefatigable endeavours to explore and to introduce the Japanese Alps to the English speaking World have always won the admiration as well as appreciation of the said members who hereby express their sincere hope for a speedy and complete recovery of his health so as

to enable him to return soon to the mountains he loves most.

Signed.

March 24, 1924.

Dear Mr. Imamura,

I have to thank you and the members to the Japanese Alpine Club who were at the Social Reception at the Dojima Building, Osaka, on the 15th inst., for your kind letter signed by 25 members, expressing regret at my departure from Japan, and hoping for a speedy and complete recovery to health as also a return to the Japanese Alps.

I very much regret having to leave Japan on account of bad health, but can assure you that in the event of my complete recovery I shall come back as soon as possible.

Will you not, therefore, convey my best thanks to the Japanese Alpine Club for the token of their esteem?

With kind regards, believe me,

Yours very sincerely,

Signed.

○八高山岳部夏季計畫

第一班 燕・常念、槍方面。第二班 白馬、大池方面。第三班 烏帽子より槍への縦走。第四班 針木、立山、劔、白馬縦走。第五班 薬師より槍への縦走。第六班 後立山山脈縦走（白馬より針木峠）。第七班 木曾駒山脈縦走。第八班 浅間山より八ヶ岳

へ。第九班 白峯三山縦走。第十班 赤石山脈縦走と遠山川跋涉。第十一班 立山、劔岳、黒部川方面。第十二班 上高地天幕生活。（西山參次）

○一高旅行部山岳旅行日程

第一班 日光・尾瀬・赤城（八日間）。第二班 奥秩父・八ヶ岳（六日間）。第三班 岩菅・草津白根（七日間）。第四班 飯豊・大日岳（五日間）。第五班 大島池・朝日岳（九日間）。第六班 常念山脈・槍ヶ岳・上高地（七日間）。第七班 白馬連峰縦走（白馬より八方池・六日間）。第八班 笠・双六・槍・穂高岳縦走（八日間）。第九班 烏帽子・薬師・槍縦走（十日間）。第十班 針ノ本峠・立山・劔岳（十日間）。第十一班 木曾及乗鞍（七日間）。第十二班 西駒ヶ岳縦走（六日間）。第十三班 遠山川・碧・赤石（九日間）。第十四班 鹽見・惡澤・赤石岳（七日間）。第十五班 甲斐駒・仙丈・白峰縦走（七日間）（一高旅行部）

會 報

○第十七回大會記事

大正十三年五月十日午後六時半から芝區高輪南町三十番地調和道協會に於て、本會第十七回大會を開き、左の幻燈講演があつた。

飯豊山

立山と黒部川

沼井鐵太郎氏
冠 松次郎氏

兩講演とも昨年第十六回大會の時、幻燈を使用する筈であつたのが、機械破損の爲終に使用するこゝとが出来ず、單に講演だけに止めて置いた。夫れで十一月に臨時大會を開いて當初の目的を果す事に一決した。然るに九月一日の大震災が起つて復之を果す由もなかつたのである。今年は適當な場所がないので、大會は延期の止むなきに至りはせぬかと危ぶまれたが、鳥山幹事の盡力に依りて幸に程よい場所が得られた。勿論例年のやうに陳列

會を開くことは、場所の關係上不可能であつたから、一年越しではあるけれども、幻燈を主として再び兩講演者に説明の勞を取つて戴くことにした。定刻に至りて木暮幹事開會の辭を述べ、次で高頭及鳥山兩幹事の事務及會計の兩報告があり、終て幻燈講話に移り、十時閉會した。當夜の來會者は、會員及會員外を合せて百五十餘名であつた。

○第二十四會小集會記事

六月八日高頭幹事司會の下に麴町區清水谷皆香園に於て第二十四回小集會を開いた。通知が餘り切迫してゐた爲か、來會者は甚少なかつた。然しこの日は講演者が多かつたので、興味は却つて深かつた様に思はれた。

(一) 開聞岳登山談 高頭 式氏

五月末より六月初旬に涉つて、九州を旅行された氏は名譽會員の大平晟氏と共に開聞岳へ登山された。然し午後四時麓の部落から登つたので、頂上へ着いて暫くすると日は全く暮れ、咫尺を辨ぜず、星月夜であつたがマツチ一個も持ち合はせな

い爲、歸路を發見することが出来ないで、僅か二時間位で登れる山の上へ野營をしやうと迄決心された。開聞岳の頂邊から降る處は崖になつてゐて、その未端の處に途が付けられてあるのだが、それが暗夜の爲中々分らず、崖を降ると危険なので、非常に困られたとのことである。幸に迎ひの者が來たので野宿だけはせずに済んだ。平地から特立してゐる開聞岳は、山の姿態が面白いのみならず、その眺望に於て九州に類の少ない山である。

(二) 遠山附近 冠 松次郎氏

これも五月下旬遠州秋葉山より天龍川に下り、飛行艇と云ふ船で上流西渡まで溯り、秋葉街道を遠州奥山村の水窪に泊り、それから青崩峠を越え信州遠山へ出で、八重河内を経て和田に泊り、赤石山脈の池口岳・加々森山・光岳登山を試みたが、天候不良の爲途中より引返し、下栗・大野附近に遊び、上村より小川路峠を越えて飯田に出で歸京した迄の話をされた。遠山が赤石山脈殊に聖岳を中心としての登山に最も樞要の地であること、和田

を出發點として山脈縦走の目的ならば、池口岳・加々森山より赤石山脈の主脈を一週日位で全部（鹽見岳を除き）旅行が出来ること、溪谷からならば聖岳迄遠山川の悠大の景を賞しながら三日目に達しられる、それから冬期或は晩秋か早春、雪の遠山川の奥山を見るのに、御池山、大野、下栗邊が最もよいこと等に就て語られた。

(三) 地震に就て 梅澤親光氏

九月一日の大震の震源地が馬入川々口にあると云ふことに大體一致してゐると云ふこと、一月十五日の地震が餘震の測定によりて略ぼ豫定が出來た、然し現今の地震計では近距離に大震のあつた場合は、正確に近い震源地を決定することは不可能で、現今の科學の知識でも到底正確に地震を豫知することはむづかしい、近い將來に大震があることを豫言してもその近き將來が五十年後にあるか百年後にあるか要するに五里霧中である。五月初旬頃から起り始めた鹿島灘方面に震源地を有するものが目下問題になつてゐる、これが安政の地震の震源地に近いので所謂江戸川地震と云ふもの

である、然しそれも果してどうなるものやらも分らない、今のところ大震が近い將來にあるともないとも確言し得る程研究が進んで居ないと云ふ意味の話をされた。

(四) 大震後の丹澤山塊に就て 武田久吉氏
丹澤山塊をよく旅行され、この附近を最もよく知つてゐられる氏の大震後に於ける状況、道路の廢滅、溪谷の埋没、山崩れや薙等に就て詳細の説明及實地見分の御話をせられた。ありふれた雜誌新聞紙に出た記事などと比較すると、殆ど問題にならない程の精細なそして興味ある御話であつて、非常に得る處が多かつた。

當日の來會者は高畑棟材、村越匡次、磯貝藤太郎、堀龜雄、戸澤英一、酒井忠一、永江博、飯塚篤之助、沼井鐵太郎、岩永信雄、岩永良三、伊藤朝太郎、冠松次郎、鳥山悌成、武田久吉、梅澤親光、高頭仁兵衛の十七氏であつた。

次會は鳥山幹事主會者として、九月廿八日に右同所で開催する。

○交換及寄贈圖書目

ツォリスト 第十一卷第五號第十二卷第一、二、三號

地質學雜誌 第參拾卷三百五十九號、三百六十一號、三百六十三號

地學雜誌 第三十五年四百十六號

山とスキ 第三十三號—第三十七號

地質調査所報告 第八十九號

きりのたび 十二號—十四號

アルカウ趣味 第十年第七號—十一號第十一年一號—五號

號—五號

關西時報 第十三號—三十號

史蹟名勝天然紀念物 第六卷第三號—五號

L'écho des Alpes, 59^{me} Année No 5, 6, 7, 8, 9, 10.

Alpina, 31 Jahrgang No 5, 6, 7, 10.

Bird-Lore, Vol. XXV No 3, 4, 5, 6. Vol. XXVI

No 1, 2,

The Mountaineer, Vol. XV No. 7, 8, 9, 10, 12,

13. Vol. XVI No. 1, 2, 3, 4, 5, 6.

The Preirie Club, Bulletin No. 126, 127, 128, 129, 133, 134, 136.
 Club Alpino Italiano Anno XLII Num. 3, 4, 5, 6, 8, 9,
 Trail and Timberline, No. 57, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 67, 68.
 Colorado Chautauqua Bulletin, Vol. XII No. 6.
 La Montagne, 19^e Année No 161, 162, 163, 164.
 Butlelet del Centre Excursionista de Catalunya, Any XXXIII No. 336, 337, 338, 339, 340, 343, 344, 345, 346, 347, 348.
 Revue Alpine, Vol. 24 No. 2, 3.
 The Bulletin of the Geographical Society of Philadelphia, Vol. XXI No. 3.
 Natural History, Vol. XXIII No. 3, 5, 6.
 Geographical Journal Vol. LXIII No. 5.
 Mededeelingen der Nederlandsche Alpen-Vereeniging, 2 Vols.
 Hrvatski Planinar, Godiste XIX Broj. 1, 2, 3, 6.

Svenska Turist-Föreningen Arsskrift 1924.
 Atlas över Sverige del II.
 The Climbers' Club Journal. New Series No. 3.
 The Annual of the Mountain Club of South Africa. No. 26-1923.
 Sierra Club Bulletin, Vol. XI No. 4.
 The Canadian Alpine Journal, Vol. XIII.
 Jahrbuch des Schweizer Alpin Club, LVII. 1922.

○本會規則拔萃 (大正十二年三月改正)

- 第二條 本會ハ山岳ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス
- 第三條 本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌「山岳」ヲ發行ス、又時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコトアルベシ
- 第五條 本會ハ會長ヲ戴カズ幹事若干名ヲ置キ一切ノ會務ヲ處理セシム
- 第六條 本會ハ別ニ評議員ヲ置キ重要ナル會務ニ參與セシム
- 第十條 本會會員ヲ別チテ正會員及ビ名譽會員トス、名譽會員ハ幹事會ノ決議ニヨリテ推薦セラルルモノトス
- 第十一條 正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住所姓名、年齢及ビ職業ヲ記シタル申込書ヲ事務所ニ送附スベシ、但シ紹介者ノ一名ハ本會評議員タルヲ要ス (入會申込用紙ハ事務所ニ備付ケアリ)

第十二條 入會ノ許否ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス

第十三條 入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ直ニ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込マルベシ

第十四條 正會員ハ會費年金參圓ヲ毎年二月末日迄ニ納付スヘキモノトス、三月一日以後ノ納付者ハ特別取扱手数料トシテ金五拾錢ヲ附加シテ拂込マル可ク、尙ホ三月末日迄ニ納附セザル者ハ之ヲ除名ス可シ(以下略)

現在幹事(八名)

藤島 敏男 冠 松次郎 木暮理太郎 植 有 恒
六 鷗 保 高田 達也 高頭仁兵衛 島山 梯成

評議員(十八名)

小島久太(在桑港) 武田久吉 梅澤 親光 高野 鷹藏
近 藤 茂吉 中村清太郎 三枝 守博 辻本 満丸
田部 重治 山川 默
及ヒ現在幹事八名。

○投稿規定

一、會員は勿論會員以外の何人も投稿隨意のこと

一、用紙は半紙又は半紙半枚大、天地左右をあげ、毎紙片面のみに字體明瞭に認め、各行二十二字詰とし、毎紙同一行数のこと
一、い。」「」等は各一字畫宛とし、行を更むる時は一字下げのこと

一、地名には片假名を振り、漢字不明にして宛字をなす時は其旨

み括弧内に明記す可きこと

一、原稿は必ず左記宛て送附のこと

東京市本郷區駒込蓬萊町三十一番地「山岳」編輯所
尙ほ編輯に關する用件は總て前記宛御照會のこと、殊に挿圖寫眞等のある原稿は其調製方印刷方につき一應御相談あらば幸なり(スケッチは複製の際誤記脱漏等の憂あるを以て豫め本誌面に適當せる大きに調製あらんことを望む)

正 誤

本誌第十七年第三號三二頁十行目クロハキはクロハリキの誤。
同三十五頁サウセウはサンセウの誤。

家庭常備藥ナゾ百個を同製劑部より寄贈ありたる
に付希望の會員は二錢郵券封入の上左記へ申込
れたし

芝區高輪南町三〇

日本山岳會會計取扱所

大正十三年九月十二日印刷
大正十三年九月十五日發行

【定價金壹圓貳拾錢】

發行兼編輯者

新潟縣三島郡深才村深澤

高頭仁兵衛

東京市神田區美土代町二丁目一番地

島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地

三秀舍

新潟縣三島郡深才村深澤

日本山岳會

東京市芝區高輪南町三十番地

日本山岳會計取扱所

振替口座東京四八二九番

東京市神田區表神保町

發賣所

東京堂



山岳第十七年總目錄 (大正十一年度)

本 欄

神流川雜記	吉岡八二郎	一	一	通し頁
南國の山	武田 信	一	一〇	10
北上山地の旅	沼井鐵太郎	一	三	31
三月の劔岳へ	船田 三郎	二	一	123
スノードン	八代 準	二	一	133
黒部別山と内蔵之助平	沼井鐵太郎	二	一	141
阿蘇九重由布を巡登して	竹 内 亮	二	二七	149
磐梯山	吉岡八二郎	二	四〇	162
樽前火山臺の地形及植物景觀	竹 内 亮	三	一	204
西澤紀行	書上喜太郎	三	三九	242
錫ヶ岳	黒田 正夫	三	四七	250
雪の上ノ岳へ	榎谷 徹藏	三	六一	264

圖 版

○高山植物 ○立山室堂より見たる別山 ○プレバンより見たるモン・ブランの連峰 ○瓜哇シンビン山 ○爪哇シンドロー山

(以上 第一號)

○立山室堂 ○五ノ越より見たる劔岳 ○梯子谷の雪溪 ○御前澤 ○九重山北麓の裾野及涌蓋山。久住山頂より東望

(以上 第二號)

○樽前山東峯 ○樽前山新出山最高點とフツブシマブリ。東方の外輪山頂より新出山を望む ○樽前山中腹より見たるフツブシマブリ。東峯最高點より中央火口丘を隔て、西峯を望む ○白果累々たるシラタマノキ。オボツブ空澤の上流 ○ウチハマンネンスキ。イハヒゲ ○上ノ岳北方尾根より見たる黒岳。上ノ岳尾根の樹氷狀凍雪 ○上ノ岳頂下より黒部川水源を望む

(以上 第三號)

雜 錄

○船上談山(八代準) ○平民詩に現れたる山岳趣味(山本徳三郎) ○有峰のこと(冠松次郎) ○白馬大雪溪(横山光太郎) ○瓜哇登山の感想(武田信) ○山岳及山湖と國立公園(山本)

第一號 自六〇
至九六 96

○藥師岳の新登路(今西錦司) ○丘陵山岳及アルプスの範圍(山本徳三郎) ○白馬岳遺難記(田中晴真) ○沼尻及野尻に就て(木暮) ○高山薔類雜記(笹岡久彦)

第二號 自五〇
至六二 172
184

◎山岳第十七年總目錄

○長白山に就て(吉岡八二郎)○大井川の荒廢(冠)○屋久島行(竹内)○板倉勝宣君を想ふ(加納一郎)○第三回エウエレスト山遠征(木暮)○デッチョウの茶屋の一夜(MK生)

第三號 自九八 301
至一二八 331

雜報

○常念坊の由來○長村角間の岩窟から大発見○槍の絶嶺から二高生墜死す○三原山鳴動爆發○檜前山の大爆發○北海道の駒ヶ岳大爆發○登山新路○新に縣道となつた大きな登山路○山の物價○山岳圖書紹介「スウィス日記」「山岳美」「一日二日山の旅」(木暮)○會員通信

第一號 自一〇 110
至一九七 317

○關東地方大地震○相州大山の山海嘯○富士山を踏査に○ハケ岳に大龜裂○燒岳の噴煙増加○登山案内組合「石佛會」○山岳圖書紹介「山行」「登高行」「リュックサック」(木暮)○會員通信

第二號 自六三 135
至七一 153

○頸城アルプスの登山路完成○避難小屋と觀賞地をアルプスに設置○黒部の門戸を開く峡谷鐵道○南アルプスで行方不明となる○伊藤氏の映畫隊大成功○榛名山麓の御料林○英國の探險隊今年も

エ峯登山を決行○大鳴動の後噴煙猛烈○十七の火山活動○會員通信

第三號 自一二九 332
至一三九 336

會報

○第二十回小集會記事○第二十一回小集會記事○事務所の移轉に就て○會費拂込に對する注意○會務報告○會員の訃報○退會者○交換及寄贈圖書目○本會規則拔萃○投稿規定

第一號 自一一一 111
至一二二 123

○第十六回大會記事○第二十二回小集會記事○會員章再貸與○本會規則改訂○會務報告○英文欄中止○會員の訃報○交換及寄贈圖書目○會告○本會規則拔萃○投稿規定

第二號 自七二 194
至八一 203

○臨時茶話會○第二十三回小集會記事○會務報告○名譽會員城氏の訃報○本會規則拔萃○投稿規定

第三號 自一三四 337
至一三八 341

附錄

英文欄 第一號三頁
山岳第十一年乃至第十六年總目錄 第三號

山とスキー



山岳及びスキーに關する
専門的の月刊雜誌であり
ます。目下第四年刊行中。

年額 金三圓六拾錢 送料不要

札幌市北六條西六丁目

山とスキーの會

振替口座小樽八四九五番

山岳殘本販賣

奥上州號

山岳第十六年第三號

本欄及雜錄二百十二頁

定價金貳圓五拾錢

奥上州は巨流利根及其貢流の發源する所、山や谷や殘雪や森林や登路や果して如何に、奥上州號は其詳を盡して餘蘊なし。

山岳

第二年第三號。第四年第二號。第五年第二號、第三號。第六年各號。第七年各號。第八年各號。第九年各號。第十年第二號。第十一年第二號。第十二年第一號。第十三年第二號。第十四年各號。第十五年各號。第十六年各號。第十七年各號。以上何れも定價異り、且つ部數も僅少につき、御注文に先立ち往復葉書（又は返信切手附）にて一應御照會被成下度候。

東京市芝區高輪南町三〇

健全書店

振替口座東京三二〇五二番

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XVIII

1924

No. I